

# 日本武道学会第56回大会 研究発表抄録

期 日 令和5年9月4日(月)・9月5日(火)  
会 場 大阪教育大学柏原キャンパス  
共 催 International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society  
大阪教育大学



日 本 武 道 学 会

Japanese Academy of Budo



## ご挨拶

日本武道学会会長 大保木 輝雄

コロナ禍による規制が解け、4年ぶりの対面開催となった本大会は、ポーランドの研究団体「IMACSSS (International Martial Arts and Combat Sports Scientific Society)」との共催となりました。本大会に至るまでの大会委員の方々のご尽力と武道に対する情熱に対し、あらためて敬意を表します。また、会場をご提供頂いた大阪教育大学の太田順康先生をはじめ関西支部会員の皆様にご感謝申し上げます。

思いおこせば、本学会の大会において海外を視野に入れた企画の画期となったのは、2012年の第45回大会でした。本部企画として「武道の捉え方 - 世界の動向 -」と題する国際シンポジウムが開催され、大韓武道学会の金正幸会長とIMACSSSのW.J. シナルスキー会長及び百鬼史訓本学会会長をパネラーとする鼎談を機に国際学会開催が目指され、翌年の第46回大会と第50回大会でそれぞれ2回目と3回目の国際シンポジウムが開催されました。この流れから言えば第55回大会で4回目となる国際シンポジウムが企画されるはずでしたがコロナ禍により先延ばしとなり、本年度の開催となりました。

本大会では、W.J. シナルスキー会長による「ヨーロッパの武道研究事情」と題する特別講演が実施されます。また、本部企画としては「多様『性』と武道」と題したシンポジウムを開催します。これは、第51回大会から実施された「生涯武道」をキーワードとしたシンポジウムの開催を契機に、「女性の武道」など多様なテーマへの着目を経て、武道における多様性への許容力が確認されるといった一連の流れを踏まえての企画です。多様な「性」と武道についての多角的な論議が期待されます。また、発表は、従来の三部門（自然、人文・社会、指導法）に加え、国際セッションがオンデマンド形式で実施されます。

ここ数年続いたコロナ禍により、対面の在り方が規制されました。私たちはそれなりの不便を抱えながらIT機器の活用により新たな人と人の関係を構築し、対面でなくても出来ることや対面でなければ出来ないことを明瞭にしてきたように思います。このような事情は世界共通の現象です。コロナ禍は期せずして、日常生活における人と人との直接的な関係の在り方である「対面」の意味を問い直す契機となりました。「病気」になって初めて「健康」の有難さに気づくように、それまで当たり前で気にも留めていなかった「対面」そのものに関心を向け始めたのです。そのような状況下で、私は当たり前のこととして疑いを挟まなかったこの「対面性」こそが、武道文化を読み解くキーワードになるのではないかと考えるようになりました。しかも、武道が大前提にする「対面」の仕方は、エチケットやマナーといった礼儀が重要とされる日常においては無礼とされかねないような、相手から目を背けずしっかり向き合うことなのです。これをどう捉え、いかに読み解きましょうか。先行き不明瞭、多様性が当たり前の世界において、武道の世界こそが、人種・性別・年齢を超えた「対面」の在り方を細微にわたって示してきたのではないかと。そんな妄想が浮かんできます。

皆様の内側に膨らんでいる想いが今回の大会を通じて、真剣な「対面」の場で飛び交うことを願って止みません。



## ご挨拶

日本武道学会第56回大会委員長  
大阪教育大学 太田 順康

日本武道学会第56回大会を大阪の地で開催されますこと、心よりお喜び申し上げます。日本の古都が集まる関西は、伝統と革新に育まれた地域です。平城京・平安京を後ろに控えたここ浪速宮（大阪）は6世紀ごろには、日本の経済、政治の中心地として栄え、朝鮮や中国などアジア各国との交流の窓口として最先端の技術や文化を取り入れ発展してきました。この地に伝わった仏教もここから広がりました。このような大阪は、IMACSと共催による国際学会が開催されるに相応しい場所であるとも思います。これを機会に、是非、大阪・関西を楽しんでいただきたく存じます。

この地で創基150年を数える大阪教育大学は大阪、西日本の教育の総本山として、教育研究、教員養成に携わってきました。長い歴史の中には悲しい事件もありました。平成13年6月8日に、8人の児童の命を奪われ、多くの児童教員に深い傷を負わせた「附属池田小学校事件」が起きました。このことは、学校を守る教職員、教職員を養成する本大学にも衝撃を与え、学校の安全について考えるきっかけとなりました。事件後、本学では6月8日を「学校安全の日」と定め、教職員と学生が一体となって事件を振り返り、「語り伝え」を実施しています。学校安全推進センター（旧称：メンタル危機サポートセンター）を立ち上げ、事件の被害者への長期的なケアや学校危機管理に関する調査研究に努め、全ての教職員の安全意識及び危機対応能力の向上を図るとともに、学校安全に関する実践的な教育・研究の充実など再発防止に向けた取組を続けています。

附属池田小学校では文部科学省の教育課程特例校として、必修教科「安全科」の授業が行われ、大学では全学必修科目「学校安全」や「普通救命講習会（AED講習）」が教員免許要件の一つにされるなど、特色ある取り組みが行われています。このように本学は安全・安心な学校づくりを目指し、学校安全を推進し、学校安全に関する先進的な取り組みを行い、日本だけでなく世界にもその成果を発信しています。

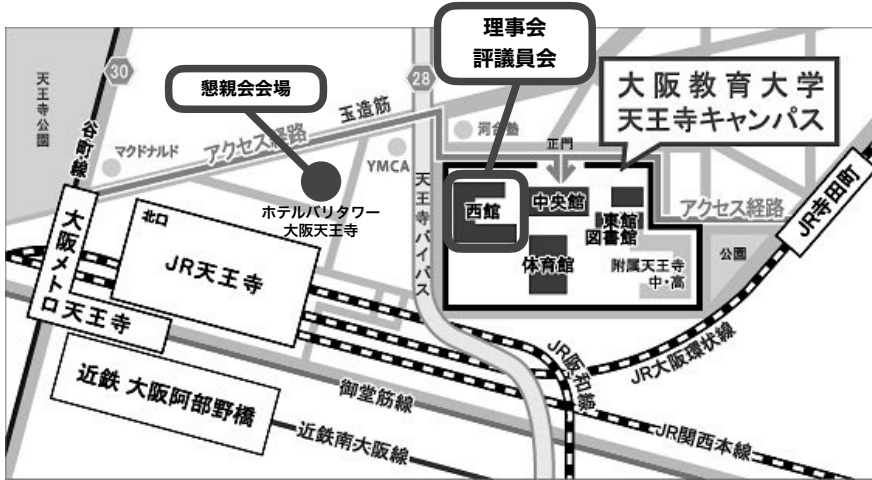
この安全・安心な学校づくりに欠かせない力の一つが危機を予見する力です。これは自己修練を通じて身を護ることを主とする武道でも大切な能力と考えられ、人間教育を目指す武道と学校安全は非常に密接な関係にあります。本学で開催されるこの機会に武道研究者の皆さまに学校安全について考えていただける機会となれば幸いです。

最後に、本大会実施にあたり大保木輝雄会長はじめ日本武道学会の役員の方々、また岡本幾子学長はじめ大阪教育大学の教職員の方々のご助言、お力添えに対し心より御礼申し上げます。本大会にご参加いただいた皆さまに実りある成果が得られますことを願い、ご挨拶とさせていただきます。

# campus map キャンパスマップ

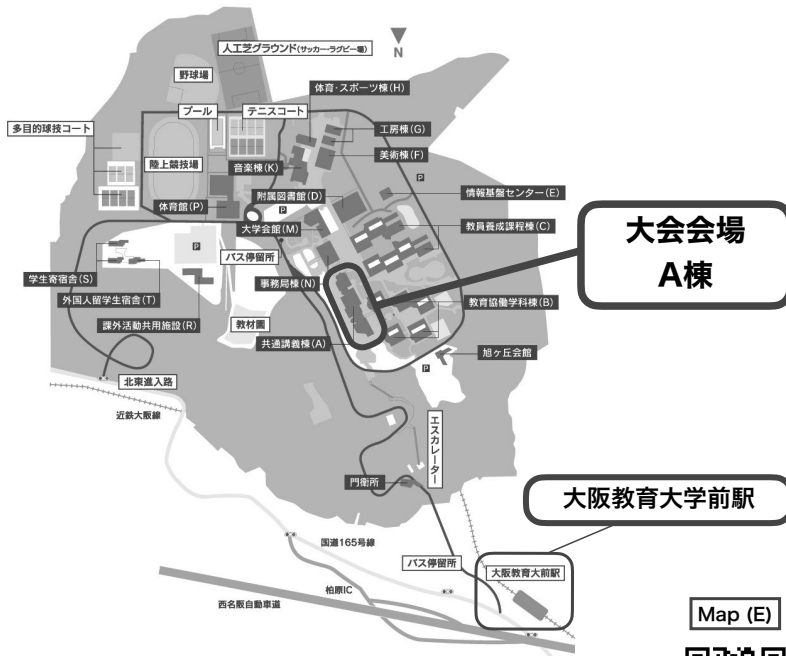
理事会・評議員会  
Board Meeting

Tennoji Campus  
大阪教育大学天王寺キャンパス



大会会場  
Conference Venue

Kashiwara Campus  
大阪教育大学柏原キャンパス



[https://osaka-kyoiku.ac.jp/en/campus\\_map.html](https://osaka-kyoiku.ac.jp/en/campus_map.html)

Map (E)



一般  
IA-1  
∩  
IA-9

一般  
IB-1  
∩  
IB-6

一般  
IC-1  
∩  
IC-4

一般  
IP-1  
∩  
IP-8

一般  
IA-1  
∩  
IA-12

一般  
IB-1  
∩  
IB-6

一般  
IC-1  
∩  
IC-6

一般  
IP-1  
∩  
IP-7

オンデマンド  
I-1  
∩  
I-17

9月4日(月)

9月5日(火)

# Access

## 会場までのアクセス

### 理事会・評議員会

会場：大阪教育大学天王寺キャンパス Tennoji Campus

最寄駅：JR天王寺駅、地下鉄天王寺駅、近鉄大阪阿部野橋駅下車、徒歩約10分

JR寺田町駅下車、徒歩約5分

Get off at JR Tennoji Station, Subway Tennoji Station, Kintetsu Osaka-Abenobashi Station. Walk 10 minutes.

Get off at JR Teradacho Station, walk 8 minutes.

### 大会会場

会場：大阪教育大学柏原キャンパス（駐車場利用可）

最寄駅：大阪教育大前駅下車、徒歩約15分

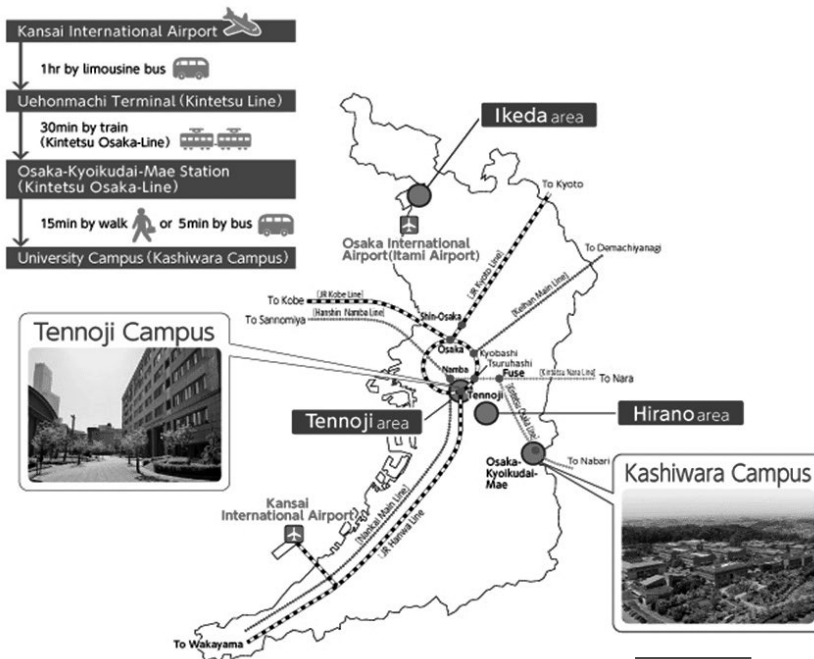
大阪上本町駅・鶴橋駅から近鉄大阪線準急・区間準急で約30分

急行の場合、河内国分駅で準急・区間準急・普通に乗り換え

Get off at the Kintetsu Line at Osaka-Kyoikudai-mae station. There is an approx. 15 minute walk.

From Kintetsu Namba Station or Nihonbashi Station, transfer at Uehonmachi or Tsuruhashi Station, and take the train going to [Haibara][Nabari][Goidou].

The Kintetsu Bus only runs on weekdays.

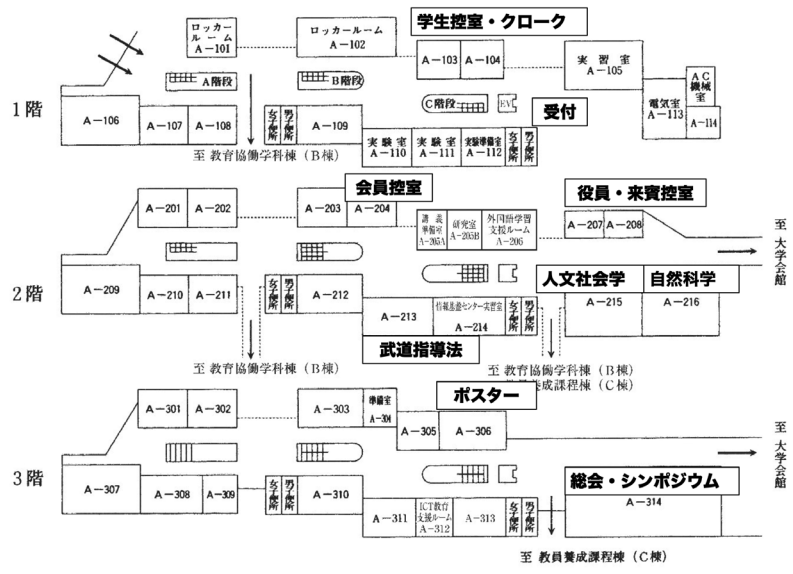


Access (E)



<https://osaka-kyoiku.ac.jp/en/traffic.html>

# Venue 会場案内図 -9月4日-

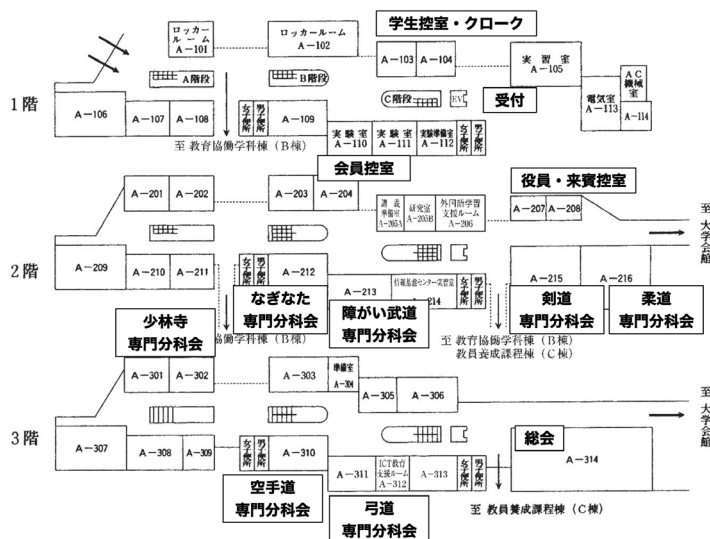


9月4日午前 September 4th morning	
人文社会学 Humanities	A215
自然科学 Natural Sciences	A216
武道指導法 Budo Instruction	A213
ポスター発表 Poster Presentation	A306
9月4日午後 September 4th afternoon	
特別講演・シンポジウム Special Lecture / Symposium	A314

役員控室 Board Member's Room	A207 A208
会員控室 Member's Room	A204
クローク Cloakroom	A104

# Venue

## 会場案内図 -9月5日-



9月5日午前 September 4th morning	
人文社会学 Humanities	A215
自然科学 Natural Sciences	A216
武道指導法 Budo Instruction	A213
ポスター発表 Poster Presentation	A306
9月5日午後 September 4th afternoon	
総会 General Assembly	A314
なぎなた専門分科会 Branch of Naginata	A212
障がい者武道専門分科会 Branch of Budo Culture for the Disabled	A213
剣道専門分科会 Branch of Kendo	A215
柔道専門分科会 Branch of Judo	A216
少林寺拳法専門分科会 Branch of Shorinji Kenpo	A302
空手道専門分科会 Branch of Karatedo	A310
弓道専門分科会 Branch of Kyudo	A311

## 参加者の皆様へ

1. 参加者の受付は、以下の時間帯で行います。
  - 9月3日（日） 13:00 ～ 17:00 天王寺キャンパス西館内
  - 9月4日（火）、5日（月） 8:00 ～ 15:00 柏原キャンパス A104 室前
- ※ 参加申込み済みの会員で参加費を事前納入されている場合は、受付で大会システム（AWARD）のアカウント情報から受付 QR コードをご提示ください。QR コードは事前に印刷したもの、もしくはスマートフォンでその画面をご提示ください。
- ※ 参加費未納の会員（参加申込み未登録会員も含む）、会員以外で大会に参加される方は、大会特設サイトからアカウント登録をし、大会参加費をクレジットカード決済にてお支払いください。大会参加登録後、受付 QR コードをご提示ください。
- ※ 大会参加章は、受付で発券されます。大会期間中必ず着用してください。着用がない場合、入場をお断りすることがあります。

会員種別	会員区分	事前割引	
		5月10日-9月3日	当日現地受付 9月4日-9月5日
会員	一般	5,000円	6,000円
会員	大学院生	4,000円	5,000円
会員	学部生	1,000円	2,000円
非会員	一般	6,000円	7,000円
非会員	大学院生	5,000円	6,000円
非会員	学部生	2,000円	3,000円

2. 令和5年度の会員年会費（一般会員：8,000円、大学院生会員：7,000円、学部学生会員：1,000円）は、受付業務の煩雑さを避けるため大会参加者の受付では納入できません。後日、郵便振替または銀行振り込みで納入をお願い致します。
3. 大会期間中の昼食は、大学構内にある食堂、コンビニエンスストアをご利用ください。
4. 宿泊が必要な場合は、各自でご手配ください。
5. 会場では紙媒体の資料配布はございません。特設サイトから資料、抄録をご覧いただくこととなりますので、発表会場には PC やタブレットなどをお持ち込みいただく、もしくは事前に印刷して会場にお持ち込みください。



## 座長の皆様へ

口頭およびポスター発表の座長の皆様は、担当される演題の発表時間 15 分前までには、発表会場受付にお越しください。

### <口頭発表の座長>

1. 口頭発表の発表時間は発表 12 分、質疑応答 3 分の合計 15 分です。発表時間に関する卓上鈴での合図は以下の通りとなります。
  - ・ 第 1 鈴 発表終了 2 分前
  - ・ 第 2 鈴 発表終了と質疑応答開始
  - ・ 第 3 鈴 質疑応答終了
2. 座長は質疑応答に際し、「質問者は、所属・氏名を述べた後、簡潔に質問するよう」にご指示ください。
3. 座長は、発表時間厳守での進行をお願いします。

### <ポスター発表の座長>

1. ポスター発表の発表時間は、1 演題 5 分です。ご担当演題の進行役と発表時間の管理をお願いします。発表時間の管理はご自身の時計等をお願いします。
2. 質疑応答は、ご担当の演題が全て終了した後、随時、発表演者自身に行っていただきますので、取りまとめ等の業務は特段ございません。セッション終了の際、「この後の質疑応答は随時となりますので、演者の方はポスターの前で待機してください」とアナウンスし、座長終了となります。

### <国際セッションの座長>

1. 国際セッションは、オンデマンド(ビデオプレゼンテーション)となります。
2. 発表動画の下にコメント欄がありますので、そちらを使用して質疑応答が行われます。
3. 発表動画の公開期間は 9 月 1 日～5 日です。その期間中は任意のタイミングで参加者、発表者よりコメントが入力されます。座長は発表動画とコメントをご覧いただき、コメント欄の質疑応答の進行、また質疑応答へのご参加をお願いいたします。

## 発表演者の皆様へ

1. 発表形式は、口頭発表またはポスター発表です。  
口頭発表 発表 12 分 質疑応答 3 分  
ポスター発表 発表 5 分 質疑応答は随時（発表前、後も含む）  
発表者は、発表時間の厳守にご協力ください。
2. 発表の進行等は、担当座長の指示に従ってください。
3. 発表演者の変更は認められません。但し、急病等のやむを得ない事情がある場合は、大会本部へ速やかに連絡し、指示に従ってください。
4. **口頭発表者**は、発表開始 20 分前までに各会場受付で受付を済ませ、発表時間の 15 分前には次演者席で待機してください。
5. **口頭発表者**は、12 分以内（時間厳守）で研究内容を発表してください。
6. **口頭発表者**でプレゼンテーションソフト (PowerPoint 等) を使用する場合は、発表資料の入ったご自身のパーソナルコンピュータを必ずお持ちください。特に Macintosh をご使用の方は、変換コネクタ、また HDMI アダプタと電源アダプタも必ずご持参ください。
7. 今まで口頭発表者が準備することになっていた資料（紙媒体・100 部）は、昨年度の大会から廃止となりました。資料等（発表で使用するものも含む）がある場合は、大会特設サイトの指定場所に予めアップロードしてください。
8. **ポスター発表者**は、発表日の 9 時までには会場受付を済ませ、所定の場所にポスターを掲示してください。また、発表時間の 10 分前までには、掲示したポスターの前で待機をお願いします。
9. **ポスター発表者**は、5 分以内（時間厳守）で研究内容を簡潔にまとめて発表してください。
10. **ポスター発表者**は、質問を随時受け付けていただきますので、ご自身の発表が終わってもポスター前近辺で待機し、質問者への対応をお願いします。
11. 掲示したポスターは、正午過ぎにご自身で撤収してください。

# 日本武道学会第56回大会日程表

9月3日(日) Sunday, September 3		9月4日(月) Monday, September 4	
8:00			
9:00			
10:00		(A215) 人文・社会科学 Humanities 9演題	
11:00		(A216) 自然科学 Natural Sciences 6演題	(A213) 武道指導法 Budo Instruction 4演題
12:00			(A306) ポスター Poster Presentation 8演題
13:00		昼食・休憩 Lunch Break	
14:00		(A314) 開催校挨拶 大阪教育大学 岡本 幾子 学長	
15:00	(講義室E) 理事会 (天王寺キャンパス)	(A314) 特別講演 Special Lecture CURRENT SITUATION AND TRENDS IN EUROPEAN MARTIAL ARTS RESEARCH Prof. Dr habil. Wojciech J. Cynarski (IMACSSS)	
16:00		(A314) 本部企画シンポジウム: 多様「性」と武道 Symposium: Gender Diversity and Budo  司会: 小田 佳子(法政大学)・松井 崇(筑波大学)	
17:00	(講義室F) 評議員会 (天王寺キャンパス)	シンポジスト: 野口 亜弥(成城大学専任講師) 松宮 智生(清和大学准教授)	
	受付 reception	(オンデマンド) 国際セッション 17演題	受付 reception

9月5日(火) Tuesday, September 4									
8.00									受付 reception
9.00	(A215) 人文・社会科学 Humanities 12演題	(A216) 自然科学 Natural Sciences 6演題	(A213) 武道指導法 Budo Instruction 6演題	(A306) ポスター Poster Presentation 7演題					
10.00									
11.00									
12.00	昼食・休憩 Lunch Break							(オンデマンド) 国際セッション International Session 17演題	
13.00	(A314) 令和5年度日本武道学会総会 General Assembly								
14.00									
15.00	(A212) なぎなた 専門分科会 Branch of Naginata	(A213) 障害者武道 専門分科会 Branch of Budo Culture for the Disabled	(A215) 剣道 専門分科会 Branch of Kendo	(A216) 柔道 専門分科会 Branch of Judo	(A311) 弓道 専門分科会 Branch of Kyudo	(A310) 空手道 専門分科会 Branch of Karatedo	(A302) 少林寺拳法 専門分科会 Branch of Shorinji Kenpo		
16.00									
17.00									

※各専門分科会で開始時刻が異なることがあります。

# 一般研究発表

第1日目 9月4日(月)

人文・社会科学系

A会場 (A215)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:45	IA-1	2022年スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・広島第1回柔道競技会の構造分析	中村 和裕	福山大学	前川 直也 (国際武道大学)
10:00	IA-2	大学生柔道競技者における柔道実践の動機づけの因子構造とその信頼性	佐々木 康允	富士大学	
10:15	IA-3	ドイツにおける柔道教育に見られる柔道技法の捉え方：柔道専門コーディネーショントレーニングの分析を中心に	SORI DOVAL MAJA	津田塾大学	
10:30	IA-4	東欧における武道の教育力に関する研究 —ルーマニアの武道実践者を対象として—	柴田 直生	筑波大学大学院	小田 佳子 (法政大学)
10:45	IA-5	中国における柔道の研究動向と史料分析	劉 暢	国際武道大学	
11:00	IA-6	ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の取り組み ～ドイツ柔道フェスティバルの視察から～	曾我部 晋哉	甲南大学	
11:15	IA-7	藤田西湖文庫所蔵伝書『大東流合気柔術』(江戸期)の検証	工藤 龍太	早稲田大学 スポーツ科学 学術院	菊本 智之 (常葉大学)
11:30	IA-8	『新陰流兵法書』を中心とした江戸柳生初期組太刀仕様の研究	中嶋 哲也	茨城大学	
11:45	IA-9	新当流における「気」に関する研究 —『兵法自観照』に着目して—	森山 竜成	筑波大学大学院	

昼食・休憩

## 特別講演、本部企画

会場 (A314)

13:00	岡本幾子・大阪教育大学学長 挨拶
13:15	特別講演：Prof. Dr habil. Wojciech J. Cynarski (IMACSSS)
14:15	「CURRENT SITUATION AND TRENDS IN EUROPEAN MARTIAL ARTS RESEARCH」
14:30	本部企画シンポジウム：多様「性」と武道 司 会：小田 佳子 (法政大学)・松井 崇 (筑波大学) シンポジスト：野口 亜弥 (成城大学専任講師) 松宮 智生 (清和大学准教授)

一般研究発表

第1日目 9月4日(月)

自然科学系

B会場 (A216)

大会案内  
日程  
演題一覧他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	IB-1	空手道競技会における救護状況と課題	鈴木 浩司	日本大学 松戸歯学部	今 有礼 (東洋大学)
10:15	IB-2	剣道稽古中のマスク着用は生理学的負担になるのか	高橋 健太郎	関東学院大学	
10:30	IB-3	剣道選手におけるプライオメトリクスが跳躍能力および面打ちに及ぼす効果	佐々木 陽一朗	筑波大学	
10:45	IB-4	なぎなたの運動習慣が中高齢者の健康度・生活習慣に与える影響	田中 ひかる	近畿大学	廣野 準一 (信州大学)
11:00	IB-5	「コンタクトスポーツ難聴」予防のための頭部衝撃低減サポーターの開発	濱西 伸治	東北学院大学 工学部	
11:15	IB-6	大学剣道選手におけるアキレス腱の特性の左右差とジャンプパフォーマンスとの関連について	岩本 寧々	筑波大学大学院	

昼食・休憩

特別講演、本部企画

会場 (A314)

13:00	岡本幾子・大阪教育大学学長 挨拶
13:15	特別講演：Prof. Dr habil. Wojciech J. Cynarski (IMACSSS)
14:15	「CURRENT SITUATION AND TRENDS IN EUROPEAN MARTIAL ARTS RESEARCH」
14:30	本部企画シンポジウム：多様「性」と武道 司 会：小田 佳子 (法政大学)・松井 崇 (筑波大学) シンポジスト：野口 亜弥 (成城大学専任講師) 松宮 智生 (清和大学准教授)

# 一般研究発表

第1日目 9月4日(月)

武道指導法系

C会場 (A213)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:30	IC-1	柔道の頭部外傷を予防する大外刈に代わる大外落の検討	林 弘典	びわこ成蹊スポーツ大学	久保田浩史 (東京学芸大学)
10:45	IC-2	柔道療育における身体、精神、社会的効果に関する質的研究：保護者を対象として	小崎 亮輔	鹿屋体育大学	
11:00	IC-3	柔道初心者の頭部外傷を予防する後ろ受け身の効果的な指導法の検討	生田 秀和	大阪体育大学	
11:15	IC-4	柔道大内刈りの効果的な掛けの方向	石井 直人	秋田工業高等専門学校	

昼食・休憩

## 特別講演、本部企画

会場 (A314)

13:00	岡本幾子・大阪教育大学学長 挨拶
13:15	特別講演：Prof. Dr habil. Wojciech J. Cynarski (IMACSSS)
14:15	「CURRENT SITUATION AND TRENDS IN EUROPEAN MARTIAL ARTS RESEARCH」
14:30	本部企画シンポジウム：多様「性」と武道 司 会：小田 佳子 (法政大学)・松井 崇 (筑波大学) シンポジスト：野口 亜弥 (成城大学専任講師) 松宮 智生 (清和大学准教授)

# 一般研究発表

第1日目 9月4日(月)

ポスター発表

P会場 (A306)

大会案内図  
日程  
演題一覧他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:30	IP-1	学生柔道選手における競技力とGrade Point Average および知能指数の関係	高野 当	皇學館大学	松崎 守利 (下関市立大学)
9:35	IP-2	OpenPose を活用した投の形の動作評価システムの開発	横山 喬之	摂南大学	
9:40	IP-3	UK 法から考える勝利達成条件 —柔道競技の場合—	内村 直也	大阪産業大学	
9:30	IP-4	大学男子柔道選手におけるジャンプ能力と競技力の関係 —片脚4方向ジャンプとバーティカルジャンプに着目して—	石橋 剛士	熊本学園大学	松井 崇 (筑波大学)
9:35	IP-5	血流制限下におけるトレーニングが血中酸素飽和度に与える影響 —大学男子柔道選手を対象として—	大川 康隆	東海大学	
9:40	IP-6	世代別による柔道の必要性の調査	吉田 岳	東海大学大学院 体育学研究科	
9:30	IP-7	デジタル技術を用いた武道史研究:『校友会雑誌』の計量テキスト分析	佐藤 皓也	順天堂大学	加藤 純一 (皇學館大学)
9:35	IP-8	一刀流中西派の組太刀遣方について 中西派間書と思われる資料から	立木 幸敏	国際武道大学	

昼食・休憩

## 特別講演、本部企画

会場 (A314)

13:00	岡本幾子・大阪教育大学学長 挨拶
13:15	特別講演: Prof. Dr habil. Wojciech J. Cynarski (IMACSSS)
14:15	[CURRENT SITUATION AND TRENDS IN EUROPEAN MARTIAL ARTS RESEARCH]
14:30	本部企画シンポジウム: 多様「性」と武道 司 会: 小田 佳子 (法政大学)・松井 崇 (筑波大学) シンポジスト: 野口 亜弥 (成城大学専任講師) 松宮 智生 (清和大学准教授)



# 一般研究発表

第2日目 9月5日(火)

人文・社会科学系

A会場 (A215)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:00	IIA-1	小学校低学年児を対象とした嘉納柔道思想教育の試み	稲川 郁子	日本体育大学	中嶋 哲也 (筑波大学)
9:15	IIA-2	精力善用国民体育の教育的効果とは何か	大辻 新恭	関西大学大学院	
9:30	IIA-3	明治期前半における武道教育に関する研究 －教育雑誌に着目して－	幕田 熙	筑波大学大学院	
9:45	IIA-4	大和から伝わる琉球の鎌術(鎌之手 カマヌティー)	早坂 義文	古武道研究会	大石 純子 (筑波大学)
10:00	IIA-5	安政年間における槍術修行記録について	長尾 進	明治大学	
10:15	IIA-6	島村右馬丞の日記にみる幕末土佐藩の居合について	森本 邦生	貫汪館	
10:30	IIA-7	大日本武徳会における武道教育に関する研究 －設立当初に着目して－	筒井 雄大	国際武道大学	数馬 広二 (工学院大学)
10:45	IIA-8	剣道の竹刀操作に関する史的考察	坂本 太一	中部学院大学	
11:00	IIA-9	大日本武徳会武徳祭大演武会に関する新史料の発見とその意義: 剣道史研究の視点から	矢野 裕介	愛知淑徳大学	
11:15	IIA-10	武道実践者の礼儀に関する研究 －大学剣道及び柔道部員と一般学生の挨拶に関するアンケート調査より－	中山 佳子	早稲田大学 大学院	原田 隆次 (国際武道大学)
11:30	IIA-11	弓術流派日置流印西派「秘歌」について	黒須 憲	東北学院大学	
11:45	IIA-12	弓道稽古着の普及と定着に関する考察	松尾 牧則	筑波大学	

昼食・休憩

## 総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (A314)						
	なぎなた 専門分科会	障害者武道 専門分科会	剣道 専門分科会	柔道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会
	A212	A213	A215	A216	A311	A310	A302

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

第2日目 9月5日(火)

自然科学系

B会場 (A216)

大会案内図  
日程  
演題一覧他

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	II B-1	剣道試合の Time-motion 分析：簡便ゲーム分析における移動測定の信頼性の検証	川井 良介	日本大学 文理学部	奥村 基生 (東京学芸大学)
10:15	II B-2	韓国における剣道の映像判定システムについて	金 明燮	早稲田大学	
10:30	II B-3	ゴールドスコア導入後の全日本柔道選手権大会の競技分析	三宅 恵介	中京大学	
10:45	II B-4	大学女子柔道選手における競技力向上のためのコンディショニングサポート～ウエイトトレーニングに着目して～	清水 伸子	国際武道大学	竹澤 稔裕 (順天堂大学)
11:00	II B-5	大学柔道競技者の異なる稽古順がもたらす神経内分泌反応：テストステロンとオキシトシンからみた精力善用・自他共栄	松井 崇	筑波大学	
11:15	II B-6	柔道練習時の発汗量と水分摂取量の関係	市川 龍之介	東海大学 体育学研究科	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (A314)						
	なぎなた 専門分科会	障害者武道 専門分科会	剣道 専門分科会	柔道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会
	A212	A213	A215	A216	A311	A310	A302

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

# 一般研究発表

第2日目 9月5日(火)

武道指導法系

C会場 (A213)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
10:00	II C-1	「かた」学習を導入した剣道授業の計量テキスト分析による学習効果の検証と抽出	菊本 智之	常葉大学	椿 武 (神戸親和大学)
10:15	II C-2	中学校保健体育科における武道領域のこれからの可能性について	太田 順康	大阪教育大学	
10:30	II C-3	中学校なぎなた授業に関する研究 ー体育教師のなぎなたイメージに焦点をあててー	今浦 千信	摂南大学	
10:45	II C-4	「剣道における指導法に関する事例研究」 ～自己観察と他者観察を通して～	米山 哲弘	早稲田大学	有田 祐二 (筑波大学)
11:00	II C-5	1年間のなぎなた授業を通して感じた、最も強い「構え」について	木村 有里	天道流	
11:15	II C-6	高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～ その6 心理面に焦点をあてて	三苦 保久	滋賀県立大津清陵高等学校	

昼食・休憩

## 総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (A314)						
	なぎなた 専門分科会	障害者武道 専門分科会	剣道 専門分科会	柔道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会
	A212	A213	A215	A216	A311	A310	A302

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

第2日目 9月5日(火)

ポスター発表

P会場 (A306)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:30	II P-1	高齢者の柔道教室参加による柔道への印象の変化に関する検証	大村 康太	東海大学大学院 体育学研究科	横山 喬之 (摂南大学)
9:35	II P-2	中学校武道授業の学習成果に関する検討 ー保健体育科教員養成課程学生に対する回顧的調査からー	京林 由季子	岡山県立大学	
9:30	II P-3	柔道授業における「自由練習」の有無が生徒の学習成果に及ぼす影響 ～「伝統的な考え方」に迫る安全な授業展開を目指して～	由留木 俊之	岸和田市立 山直中学校	増地 克之 (筑波大学)
9:35	II P-4	柔道指導者が施す礼法に関する研究： 立礼時腰部前傾角度に着目して	佐藤 武尊	皇學館大学	
9:40	II P-5	大学柔道選手が指導者から受ける非言語的行動の印象と頻度に関する調査	熊代 佑輔	国際武道大学	
9:30	II P-6	剣道を通じた大学生の社会貢献活動について ー少年剣道指導の実践報告ー	山田 彩結	大阪教育大学	小澤 聡 (常磐大学)
9:35	II P-7	英国及び米国の剣道実践者による稽古環境のサーフェイスに関する評価	池田 孝博	福岡県立大学	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 14:00	総会 (A314)						
	なぎなた 専門分科会	障害者武道 専門分科会	剣道 専門分科会	柔道 専門分科会	弓道 専門分科会	空手道 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会
	A212	A213	A215	A216	A311	A310	A302

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

International Session <Video Presentation>

Video presentation and commentary discussion from September 1st to September 5th

	Title	Author	Affiliation	Chairperson
I-1	Biomechanical investigation of technical parameters indicating the skill level of Seoi-nage in the Kake phase	Takanori Ishii	Ryotokuji University	Keisuke Miyake (Chukyo University)
I-2	A monitoring head impact exposure in women&judo athletes: A single site study	Sentato Koshida	Ryotokuji University	
I-3	Grasp and Breaking Grasp Strengths of Judo Versus Non-Judo Athletes	Chinami Nakagawara	Waseda University	
I-4	The effect of ambidextrous development on fencing performance in the early training phase of a sabreur practising the Old Polish martial art Signum Polonicum	Leonard Marynowski	Signum Polonicum Wroclaw	Kentaro Takahashi (Kantogakuin University)
I-5	Cutting-edge Developments and Challenges in Artificial Intelligence for Enhancing Martial Arts Sports Performance	ning Li	MARA University of Technology	
I-6	Seni Silat Malaysia&Curriculum : The arts of silat combat in Tempur Seni	MOHAMAD N I Z A M MOHAMED SHAPIE	MARA University of Technology	
I-7	The impact of the study of selected Aikido techniques on the performance in wrestling exercises applied in the Old Polish martial art Signum Polonicum.	Kornel Kalka	Signum Polonicum Wroclaw	Kosuke Nagaki (Hosei University)
I-8	Differentiation and Analysis of Four Theories on the Origin of Karate	yi Gao	Southwest University	
I-9	Fact-finding study of Kodokan Kohaku-shiai	Shusaku Kiryu	Kodokan	
I-10	The Influence of Taijiquan Training on the Physical Function of College Students	CHANG LIU	MARA University of Technology	Akitoshi Sogabe (Konan University)
I-11	A lance, a saber, a pistol - the offensive weapon of the Polish hussars and the art of using it in the years 1498-1786(93)	Jakub Pokojcki	Signum Polonicum Katowice	
I-12	Discovering the tradition of Polish martial art	Miłosz Markiewicz	Signum Polonicum Wroclaw	
I-13	SAN CHIN KATA HISTORY, EVOLUTION AND BUNKAI	Edvard Sefer	IMACSSS	Kaori Inoshita (Reitaku University)
I-14	Research on the International Communication Strategies of&nbsp;Wushu Culture from the Perspective of Globalization	Nasru Syazwan Nawai	MARA University of Technology	
I-15	Maritime martial arts-the rise and fall of Wenzhou Nanquan	Wenyao Chen	MARA University of Technology	Sotaro Honda (University of Teacher Education Fukuoka)
I-16	The Tasks and Outcomes in Karate Classes: A Survey of Junior High School Students	Kaori Inoshita	Reitaku Univsesity	
I-17	A study of Kendo Shinpan Method with one-arm II -Focusing on the Diversity of Budo and Lifelong-kendo-	Yoshiko Oda	Hosei University	

## Special lecture

### CURRENT SITUATION AND TRENDS IN EUROPEAN MARTIAL ARTS RESEARCH

Wojciech J. Cynarski

#### [profile]



Prof. Dr. habil. Wojciech J. Cynarski (born Feb. 23, 1965). He published over 800 scientific works, including his own 20 books (monographs and manuals). His major scientific interests concern sociology (of culture, tourism and sport), coaching and pedagogy of martial arts.

Chief-Director / Technical Director responsible for teaching combat sports & martial arts in Idokan Poland Association, IPA (since 1993); President of IMACSSS (since 2010) and European Martial Arts Committee (since 2017); Full Professor of physical culture sciences at University of Rzeszow, Poland

(since 2016). Practical experience: Training / practising combat sports and martial arts – since 1977, teaching (as instructor and coach) – since 1987.

#### [abstract]

**Problem:** *Budō* and other Asian martial arts have been practised in Europe since the late 1800s. All fighting arts are also a subject matter of scientific research. The following research questions have been formulated: What is the current situation of martial arts research in Europe? What are trends in European martial arts research? What academic institutions operate in this area?

**Method:** The literature covering this subject matter was reviewed and a topic-related search in scientific databases was carried out. The contents of websites of major scientific periodicals and databases i.e., Web of Science and Scopus were examined taking into account the thematic profile "martial arts". Additionally, Impact Factor report (by Clarivate Analytics / Web of Science) for the year 2022 was analysed.

**Results:** Five specialist scientific journals were identified; four of these continue to operate today. The dominant theoretical approaches and problem areas were reviewed along with the most frequently published contents.

**Conclusions:** The predominant trend in research is related to sport studies. This is an effect of the fact that many traditional martial arts have largely been associated with sport. Academic research focusing on cultural, historical and philosophical aspects of *Budō* and other fighting arts is less common.

## 第 56 回日本武道学会本部企画シンポジウム

# 多様「性」と武道 Gender Diversity and Budo

場所：大阪教育大学柏原キャンパス

開催日時：2023 年 9 月 4 日（月）14:30～17:00

司会：小田 佳子（法政大学）・松井 崇（筑波大学）

シンポジスト：野口 亜弥（成城大学専任講師）

松宮 智生（清和大学准教授）

Coordinator: ODA Yoshiko, MATSUI Takashi

Speakers: Aya NOGUCHI (Seiyo University, Lecturer)

Tomoki MATSUMIYA (Seiwa University, Associate Professor)

### 企画の趣旨

The theme of Gender diversity includes various types of issues especially in the sporting arena lately; therefore, in this symposium, we invited three speakers who are researching gender issues from unique perspectives, and going to discuss the gender or sexuality diversity and budo.

日本武道学会第 51 回大会より、複数年で「生涯武道」をキーワードとしてシンポジウムが展開されてきた。このキーワードに基づいた最初の企画では、先ず様々な運動形態で展開されている武道種目の実態を知り、高所より武道全体を俯瞰しつつその中に潜む今後議論を進めるべきポイントを探った。伝統や本質といった言葉で表現されるものを確かに継承していこうとする意識の一方で、現代武道が、様々なタイプの色々な考え方を持った人たちをおおらかに受容できており、武道における多様性を許容する力が確認された。第 2 回目では、その議論を踏まえた上で、特に「女性の武道」に焦点が当てられ、そこでのディスカッションにおいても「多様性」が結論のなかで導かれた。

以上のようなことから、本年度の企画のテーマとして「多様性」を取り上げたい。多様性という言葉自体が非常に幅広いコンセプトを含みこんでしまうため、議論の課題は多岐にわたる。しかし、近年では、社会生活やビジネスに限らず、スポーツの場面でも特に「性」にかかわる多様な在り方が注目され、従来の男性と女性という 2 項をこえた価値観が社会に広まりつつある。そこで、本企画では、多様性というキーワードの中でも「性」にかかわる課題に着眼し、多様「性」と武道について考えていきたい。第 52 回大会での「生涯武道の視点から女性の武道を考える」というシンポジウムでは、「女性」を議論の中心に据えたが、今回は、女性の問題も含みつつ、それをさらに超えた多様な「性」と武道の今後の在り方について、多角的にディスカッションできればと考える。

企画委員会：大石 純子(委員長)，増地 克之(副委員長)

三村 由紀，松井 崇，軽米 克尊(幹事)

## スポーツ現場における LGBTQ+ LGBTQ+ in Sport

野口 亜弥 (成城大学)

【プロフィール】 成城大学文芸学部専任講師。成城大学スポーツとジェンダー平等国際研究センター副センター長。国際基督教大学博士後期課程、プライドハウス東京共同代表、S.C.P. Japan 代表

Aya NOGUCHI (Seijo Univrsity),

Profile: Lecturer at Seijo University Faculty of Arts and Literature. Deputy Director at International Research Center for Sport and Gender Equality. Ph.D. Student at International Christiane University. Co-Chair at Pride House Tokyo. Director at S.C.P. Japan

### 【Outline】

This presentation will introduce the basic knowledge of LGBTQ+ and SOGIE (Sexual Orientation, Gender Identity, and Expression) and the current LGBTQ+ rights movement in Japan. The experience of LGBTQ+ people in sports and physical education will also be discussed alongside some initiatives taken by Pride House Tokyo to make the sports environment more LGBTQ+ inclusive.

本発表では LGBTQ+を含む性的マイノリティ（以下、LGBTQ+とする）や性的指向、性自認、性別表現（SOGIE：Sexual Orientation, Gender Identity and Expression）等の基礎用語の説明と国内の LGBTQ+当事者を取り巻く法整備や企業、社会活動について紹介する。また、体育・スポーツ現場で LGBTQ+当事者が直面する課題について概観する。

SOGIE に関する権利は、2006年にインドネシアのジョグジャカルタにて、人権活動の専門家が集結し発表された、「ジョグジャカルタ原則」によってまとめられている。日本国内では、SOGIE に関する権利の法整備が他の G 7 諸国と比較して遅れており、LGBT 理解増進法や同性婚の法整備化など、法整備に向けた動きが活発になっている。

体育・スポーツ現場での SOGIE に関する課題は近代スポーツの発祥の頃から遡る。障害がない、異性愛のシスジェンダー男性を中心に、拡大してきたスポーツ文化の中に女性が平等な機会を求めてきた歴史が、スポーツ現場で、男性優位主義、異性愛主義ジェンダー二元論が絶えず再生産され続けている。

体育・スポーツ現場で LGBTQ+当事者が抱える課題は2つに分類される。「差別・偏見・嫌悪」に関する課題。「制度・仕組み」に関する課題だ。「差別・偏見・嫌悪」の課題では、同性愛に関する不快な発言や、異性愛を当然、正常とする雰囲気や体育・スポーツの現場では見られる。「制度・仕組み」の課題は、ユニフォームや水着が性別で分けられていることの抵抗感や、トランスジェンダーやノンバイナリーの当事者の機会に関するルールが整備されていないことなどが挙げられる。2022年に実施された国内の調査では「体育の現場は自分らしくいられる場所である」との回答に、LGBTQ+当事者は非当事者と比較して有意に低い傾向が見られた。また、「体育に参加してポジティブな気持ちになった」との回答にも LGBTQ+当事者は非当事者と比較して、有意に低い回答が得られた。

体育・スポーツの現場が LGBTQ+当事者にとって安全・安心な場にしていくためのアクションが求められている中、プライドハウス東京が実施する具体的な取り組みを紹介する。



## スポーツにおける多様な性をめぐるルールの動向とこれから Trends and Future of Rules Regarding Sexual Diversity in Sport

松宮 智生 (清和大学)

【プロフィール】 日本体育・スポーツ哲学学会監事、一般社団法人日本 MMA 審判機構副会長

Tomoki MATSUMIYA (Seiwa University),

Profile : Auditor, Japan Society of Physical Education and Sport Philosophy

Vice President, Japan MMA Officials Committee.

### 【Outline】

This presentation will discuss Sexual Diversity in Sport, focusing on rules for the participation of transgender and DSDs women in female sports, then attempts to show the optimal rules regarding Gender Identity and Sex Variations, and the future of gender duality in sports.

東京 2020 は、多様な性をめぐる話題の多い大会であった。同大会において、LGBTQ+であることを公表したオリンピックは、少なくとも 186 人に上り (前回リオデジャネイロ 2016 における 56 人の 3 倍以上)、これらのアスリートたちの競技における活躍、及び、彼／彼女らが発信するメッセージが肯定的に報じられた。

他方、女子重量挙げ 87 キロ超級に出場したトランスジェンダー女性、ローレル・ハーバード選手 (ニュージーランド) が女子種目に参加することに対しては、主に競技における公平性の観点から賛否両論があった。

また、陸上女子 200 メートルに出場したクリスティン・エムボマ選手 (ナミビア) ら、DSD (Difference of Sex Development) の身体的特徴を有する女性アスリートは、本来 400 メートルを専門とする選手たちであったが、世界陸連 (WA) が定めるルール (いわゆる「DSD 規定」) により、種目の変更を余儀なくされた。

これらの背景を踏まえ、東京 2020 終了後、各国際競技団体 (IF) は、トランス女性や DSD 女性の女子種目参加に関する新たなルール作りに取り組んでいる。2021 年 11 月、国際オリンピック委員会 (IOC) は、「性自認とからだの性の多様性に基づく公平性、包摂性、非差別に関する IOC の枠組み (IOC Framework on Fairness, Inclusion and Non-Discrimination on the Basis of Gender Identity and Sex Variations) を発し、各 IF がルール作りにあたって参照すべき 10 の原則 (包摂的であること、公平であること等) を掲げた。

しかし、ハイレベルな競技を前提にした議論では、包摂性と公平性とを対立的にとらえる見解が多く、WA や国際水連等は、公平性を最重要視する方針から、トランス女性の女子種目への参加を禁じた。また、コンバット・スポーツ (MMA、ボクシング等) やコリジョン・スポーツ (ラグビー、アメリカンフットボール等) では安全性にも配慮せねばならず、武道においても同様の課題があるであろう。本発表においては、このようなルールに関する議論及び動向を整理し、多様な性をめぐるルール形成の見通し、また、スポーツにおいて当然の前提とされてきた男女二元性の行方について論じることとする。

一方で、武道においては、全柔連が若年期の大会を廃止するなど、他の競技に先んじて、人生の長いスパンにおける、競技者や愛好者の可能性に配慮する動きがある。本シンポジウムにおいては、競技にとどまらない幅広い視点から武道・スポーツにおける多様な性のありかたについてご示唆をいただければ幸いである。

## 剣道専門分科会企画

### 学校体育における武道授業の一層の充実に向けて Further enrichment of budo classes in school physical education

講師 関 伸夫（スポーツ庁政策課 教科調査官）

【プロフィール】東京都公立高等学校教諭、東京都教育庁指導主事、文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課調査係長、国立スポーツ科学センター研究支援課長、文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ振興課スポーツ指導専門官、スポーツ庁健康スポーツ課課長補佐、スポーツ庁競技スポーツ課課長補佐、平成31年から現職。博士（スポーツ健康科学）

Nobuo SEKI (Japan Sports Agency, Policy Division, Senior Specialist for National Curriculum (Physical Education))

[Profile] Unit Chief, Research Section, Lifelong Sports Division, Sports and Youth Affairs Bureau, MEXT; Director, Research Support Division, Japan Institute of Sports Science; Specialist in Sports Guidance, Sports Promotion Division, Sports and Youth Affairs Bureau, MEXT; Deputy Director, Sports for Health Division, Sports Agency; Deputy Director, Competitive Sports Division, Sports Agency; Current position since 2019. Doctor of Sports and Health Science

【Outline】 Budo has been compulsory subject based on the policy that students exposure to the unique traditions and culture of our country and establish enrich sport life in school physical education since 2012. In the fact that about 10 years have passed since budo became compulsory and the current revision of the Courses of Study, we would like to consider issues and measures for further enhancement of martial arts classes in physical education.

我が国では、全国どの地域においても同水準の教育を受けられるようにするため、文部科学省において学校教育法等に基づき、各学校で教育課程を編成する際の基準となる学習指導要領を定めており、直近では小学校、中学校は平成29年、高等学校では平成30年に改訂が行われている。

今次改訂においては、「生きる力」の理念の具体化に向けて、全ての教科等において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理した。このことから、教師は、体育で武道授業を実施するに当たり、武道領域において育成を目指す、それらの資質・能力とは何かを正しく理解した上で、授業をデザインすることが求められる。

加えて、授業づくりに当たっては、GIGA スクール構想により整備された、1人1台端末、高速通信ネットワークの可能性を最大限に活用しつつ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実することで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図ることが重要となっている。

御案内のとおり、平成20年改訂では、中学校第1学年及び第2学年において、全ての生徒に武道領域とダンス領域を履修させることとなり、平成24年度から実施されている。この武道必修化については、我が国固有の伝統と文化に一層触れることに加え、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、全ての領域を履修させることが背景となっており、これまで武道授業の充実に向けて、研究者や競技団体、教師などにより様々な研究、実践などの取組がなされてきている。

武道必修化から約10年が経過したこと及び学習指導要領の今次改訂を踏まえ、体育における武道授業の一層の充実に向けた課題とその対応策について、御参会の皆様と一緒に考えてみたい。

## 弓道・なぎなた専門分科会合同企画

### 中学校体育における武道（弓道・なぎなた）授業の実際 ：授業採択に係る問題は解決できるのか

（日本武道学会第 56 回大会弓道・なぎなた専門分科会合同企画）

Actual Practice of Budo (kyudo and naginata) Classes in Junior High School Physical Education  
: Can problems related to adoption in the regular curriculum be solved?  
(56th Annual Conference of the Japanese Academy of Budo: Kyudo and Naginata Specialized Subcommittee Joint Project)

Ten years have passed since budo became compulsory in junior high schools in the 2012 school year. However, even though the term "budo" is used, in reality, judo and kendo are practiced by about 90% of all junior high schools. Kyudo and Naginata are currently practiced by only about 1% of schools. How should budo (kyudo and naginata), which have a low implementation rate, be developed as physical education classes in junior high schools in the future? In this session, the various problems that have been pointed out in the past to adopt kyudo and naginata in the regular curriculum will be examined, and essential questions discussed.

平成24（2012）年度に中学校で武道が必修化されてから10年が経過した。しかし、「武道」とはいえども、実際は柔道・剣道の実施が約9割を占めている。弓道・なぎなたに至っては、実施率が1%程度であるのが現状である。それでは、実施率の低い武道（弓道・なぎなた）は、今後中学校体育授業としてどのように展開していくべきなのか。これまで実施に伴う諸問題が数多く指摘されてきたが、それらの問題を改めて整理し、その本質的な問いに対して検討・考察を行う。

はじめに、弓道専門分科会より、歴史的な観点から学校体育における弓道・なぎなたについて議論を行う。弓道・なぎなたは、剣道・柔道に続いて、昭和11（1936）年に中等学校の正課として同じ時期に導入された歴史を有している。しかし、弓道・なぎなた共に教員・道具の不足、カリキュラムの未整備、流派の問題などによって、その実施率は決して高くはなかった。当時の授業実施に伴う問題点は、現在の弓道授業が抱えている課題と共通するものが多い。その問題点を改めて整理すると共に、どのようにして問題解決に取り組んできたのかも明らかにする。

次に、なぎなた専門分科会より、社会的な観点から、スポーツ庁委託事業を活用して授業推進を行ってきた大阪市立墨江丘中学校の事例を中心に、なぎなた授業の実際について報告を行う。今後の授業採択についての問題点と課題を検討する。

以上の2つの議論を基に、学校体育における武道（弓道・なぎなた）授業の実際について理解すると共に、授業採択に伴う問題は解決できるのか、今後の武道（弓道・なぎなた）授業に対する提言の作成も見据えた議論を行う。

開催方法：対面+Zoom を用いたハイブリッド開催（予定）

対面での開催場所：大阪教育大学 柏原キャンパスA212

予定：

- |                    |  |
|--------------------|--|
| ①なぎなた専門分科会代表挨拶     | 田中ひかる（近畿大学）                                    |
| ②弓道専門分科会代表挨拶       | 五賀友継（国際武道大学）                                   |
| ③企画・趣旨説明           | 原田隆次（国際武道大学）                                   |
| ④近代学校教育における弓道・薙刀授業 | 五賀友継（国際武道大学）                                   |
| ⑤なぎなた授業の現状報告       | 今浦千信（公財）全日本なぎなた連盟中学校武道必修化プロジェクト推進委員／摂南大学非常勤講師） |
| ⑥質疑応答              |  |

司会：宮田尚美（名古屋市立南光中学校）

参加方法について

弓道・なぎなた専門分科会に所属されていない方で、オンライン参加をご希望される方は、9月4日（月）までに、  
弓道・なぎなた専門分科会事務局までご連絡ください。

弓道専門分科会事務局 担当：原田隆次（国際武道大学）

E-mail : budo.kyudo@gmail.com

なぎなた専門分科会事務局 担当：田中ひかる（近畿大学）

E-mail : nagilabo2020@gmail.com 申込フォーム : <https://forms.gle/bdEfr5EAT4EMyEci8>



申込フォーム

本部企画  
専門分科会

Delivery Mode: Hybrid meeting using face-to-face + Zoom

Location of face-to-face meeting: Osaka Kyoiku University

- (1) Greetings from representative of naginata specialized subcommittee Hikaru Tanaka (Kindai University)
- (2) Kyudo specialized subcommittee representative greeting Tomotsugu Goka (International Budo University)
- (3) Explanation of the session purpose Ryuji Harada (International Budo University)
- (4) Naginata and kyudo in the modern school curriculum Tomotsugu Goka (International Budo University)
- (5) Report on the status of naginata classes  
Chinobu Imaura, All Japan Naginata Federation (Junior High School curriculum naginata promotion member); Lecturer -  
Setsunan University
- (6) Question and Answer Session

Moderator: Naomi Miyata (Nanko Junior High School, Nagoya)

How to Participate

If you are not a member of the kyudo and naginata specialized subcommittee, and wish to participate online, please contact the kyudo and naginata specialized subcommittee secretariat by Monday, September 4, 2012.

Kyudo Subcommittee Secretariat

Contact : Ryuji Harada (International Budo University)

E-mail : budo.kyudo@gmail.com

Naginata Specialty Subcommittee Secretariat

Contact: Hikaru Tanaka (Kinki University)

E-mail : nagilabo2020@gmail.com

Application Form: <https://forms.gle/bdEfr5EAT4EMyEci8>



Application Form

## 少林寺拳法専門分科会企画 講演、シンポジウム

日本武道学会第56回大会

### 少林寺拳法の「教育と普及」について考える Considering "Education and Promotion" of Shorinji Kempo

日時：2023年9月5日(月)14:00~15:30

場所：[対面] 大阪教育大学柏原キャンパス

[オンライン] Zoom

<https://us06web.zoom.us/j/87882847439?pwd=OENFM1JYalF1dFVCWlJhU2RqeHM0Zz09>

ミーティングID: 878 8284 7439 パスコード: 111107

#### 1、講演

テーマ：「可能性の種子」

演者：宗 昂馬（一般財団法人 少林寺拳法連盟 会長）

#### 1. Lecture

Theme: "Seeds of Possibility"

Lecturer: Kouma So (Chairperson, Shorinji Kempo Federation)

#### 2、シンポジウム

テーマ：武道授業を起点とした少林寺拳法の教育と普及について

演者：牧野英一（練馬区立開進第二中学校 校長）

中島正樹（富士見丘中学高等学校）

秋元宏介（一般財団法人 少林寺拳法連盟）

司会：高坂正治（国際武道大学）

#### 2. Symposium

Theme: Education and Promotion of Shorinji Kempo Starting from Martial-Arts Classes

Speaker: Eiichi MAKINO (Principal, Kaishin second junior high school, Nerima city)

Masaki NAKAJIMA (Fujimigaoka junior high school and senior high School)

Kosuke AKIMOTO (Shorinji Kempo Federation)

Moderator: Masaharu KOSAKA (International Budo University)

中学校での武道授業は平成24（2012）年度の完全実施から11年目に入りました。少林寺拳法連盟では、同年度から中学校武道必修化プロジェクト委員会（現在：中学校武道授業推進委員会）を設置し、教材研究と指導書の作成、並びに各種指導者研修会を実施し指導者養成に取り組んできました。

平成29（2017）年の学習指導要領改訂に伴い、牧野氏が武道の考え方に触れつつ「生きる力」を育む授業づくりを提案しました。その中で、主体的・対話的で深い学びを目指す学習活動は、部活動や道場での学びにも必要ではないか、また、授業を入り口とした武道普及の可能性も考えられるのではないかという考えに発展しました。そこで、「授業→教室→部活動→道場」という生涯武道のイメージから、秋元氏、中島氏の協力により、武道授業のデータベース化を図るとともに、部活動指導においても活用できるのではないかという仮説を立て、「理法」、「型（法形）」等に基づいたプログラムを開発し、試行しました。武道授業を起点とした教育と普及の展開は、部活動の地域移行への対応のヒントにもなると考えます。少林寺拳法における教育と普及について議論を深めていければと思います。

#### 3、実践報告・実践研究発表

この度、日本武道学会に少林寺拳法専門分科会を立ち上げることができました。これまでも少林寺拳法に関する研究は組織的・個人的に取り組まれてきました。しかし、研究成果の共有や研究の継続・発展に課題がありました。そこで、それぞれに研究されてきた内容を発表いただき、研究成果や問題意識の共有並びに、今後の研究活動を活性化、継続・発展に繋げていきたいと考えております。

## 障害者武道専門分科会企画

Budo for the Disabled Subcommittee  
Symposium

障害者武道専門分科会  
シンポジウム

### Silver Linings:

Positive Lessons from Budo for the Disabled Amidst the Coronavirus Pandemic

新たな武道稽古手法：

コロナ禍で総ての人々に行動制限（障害）があったときに得た新たな武道稽古手法の価値

Coordinators: Kantaro MATSUI (International Budo University)  
Masayasu OHASHI (Association of Budo Culture for the Disabled)

コーディネーター 松井完太郎（国際武道大学）  
大橋 正康（一般社団法人 障害者武道協会）

During the Covid-19 pandemic, gathering up in a closed space, such as a dojo practice, as well as holding competitions, became impossible. However, alternative methods, such as online training, have become increasingly popular. This shift has presented a significant opportunity for the disabled.

As the Covid-19 pandemic ends and we gradually return to our previous routines, we would like to clarify this great opportunity. The benefits extend not only to disabled individuals but also to individuals without disabilities. We would like to provide diverse reports from various locations worldwide.

コロナ禍では、道場練習や大会など、屋内に集うことが不可能になりました。しかし、オンライントレーニングなどの代替手段が普及しました。この変化は、障害者に大きなチャンスをもたらしました。障害者武道専門分科会では、コロナ禍が始まった2020年9月に世界各地からのレポートをお届けしましたが、コロナ禍が終息して徐々に以前の日常に戻っていく中で、今一度、この素晴らしい恩恵を明確にしておきます。この恩恵は障害者だけでなく、健常者にも大きな機会を今後も提供するはずです。

The video-on-demand with English Japanese or Japanese -English subtitles  
オンデマンドビデオ方式

Please see from the following URL (scheduled to be released on September 3).  
下記 URL、QR コードから御覧ください。

<https://youtu.be/8MxOmSGYmT0>



### Speaker:

- 1 Eric Bortels (I-KARATE Global)
- 2 Adrian Magyar (Hungarian University of Physical Education and Sports Sciences)
- 3 Toru Minamisawa (All Japan Karatedo Federation)
- 4 Pontus Johansson (ABCD Budokai SWEDEN)
- 5 Dariusz Mosler (Jan Dlugosz University in Czestochowa)
- 6 Masatoshi Arakawa (postgraduate International Budo University)
- 7 Hidemasa Tokuyasu (Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences)
- 8 Alexander Bennett (Kansai University)
- 9 Chang Liu (International Budo University)

障害者武道専門分科会 会員総会

日時：2023年9月5日（火） 14：30～

場所：大阪教育大学 柏原キャンパス A棟 213教室

総会終了後に、上記オンデマンドビデオについて、日本語での議論を予定しております。

## 学校空手道の推進と空手道全国大会の挑戦的企画

Promotion of Teaching Karate at Schools and Challenging Projects regarding National Karate Competitions

**【Outline】** School Budo Promoters Association in the All Japan Karatedo Federation has been holding instructor training sessions. The purpose of this workshop is to contribute to the development of instructors who teach karate at junior high and high schools, based on our country's unique traditions and culture. This presentation will review the activities of the Committee to date and consider the future prospect.

Karate Week 2023 is the first attempt to hold the All Japan Boys and Girls Tournament, the All Japan Junior High School Tournament, the All Japan Para Games, and the All Japan Weight Classification Tournament in seven consecutive days. In this presentation, we will clarify the achievements and challenges of Karate WEEK 2023 based on the results of a questionnaire survey of the main stakeholders involved in the event: spectators, prefectural federations, management staff, and tournament judges.

全日本空手道連盟の学校武道推進委員会では、その取り組みの一つとして、2022年度までに13回の指導者研修会を行ってきた。この研修会は、日本全国で空手道を指導する中学校、高等学校の指導者を対象に、我が国固有の伝統と文化に立脚した指導者育成に資することを目的としている。この発表では、これまでの学校武道推進委員会の活動を振り返り、学校武道、競技、生涯武道としての空手道を、空手道の歴史に基づき、空手道を取り巻く環境を踏まえて実践へと結びつける、学校武道推進委員会のこれからを考える。

空手 WEEK2023 は、全日本少年少女大会、全国中学生大会、全日本パラ競技大会、全日本体重別大会の4大会を7日間で連続的に行う初めての試みである。本イベントでは、これまで交わることのなかった、小学生・中学生・パラ競技者・国内トップ選手の繋がりや、会場周辺の商店街・信用金庫・中学校との地域連携、パラ空手体験会・体力測定会・環境保護のワークショップなどの空手以外の学びの提供など、多数の新たな試みに取り組むを行う。発表では、大会に関わる主なステークホルダーである、観客、都道府県連盟、運営係員、大会審判員を対象に行ったアンケート調査から得られた回答結果にもとづき、空手 WEEK2023 の成果と課題を明らかにする。

**【司会】** 空手道専門分科会副会長 三村 由紀 **【開会挨拶】** 空手道専門分科会会長 鈴木 浩司 **【講演 1】** 「学校武道推進委員会のこれまでとこれから」 小山正辰（公益財団法人全日本空手道連盟学校武道推進委員会） **【講演 2】** 「全国大会の同一会場での連続開催における成果と課題-空手 WEEK2023 を事例として-」 岡崎 紀創（公益財団法人全日本空手道連盟企画業務課）

# IA-1

## 2022年スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・広島 第1回柔道競技会の構造分析

### Structural Analysis of the 2022 Special Olympics Japan Summer National Games Hiroshima 1st Judo Competition

○中村和裕（福山大学），瀧名智男（日本文化大学），柏崎克彦（国際武道大学名誉教授）

Kazuhiro NAKAMURA (Fukuyama University), Tomoo HAMANA (Nihon Bunka University), Katsuhiko KASHIWAZAKI (Professor Emeritus at International Budo University)

一般  
IA-1  
S  
IA-9

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

In this study, we conducted a structural analysis of the 1st Judo competition, which was held for the first time at the 8th Special Olympics Japan Summer National Games in Hiroshima in 2022. We believe that the results of this study have contributed to the understanding and popularization of Special Olympics Japan Judo, which is in its early days.

【目的】本研究では、2022年11月4日から6日まで行われた、2022年第8回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム・広島（以下「ナショナルゲーム」と略す）において初開催された第1回柔道競技会（以下「競技会」と略す）の構造分析を実施した。何故なら知的障がい者柔道ルールは健常者柔道ルールと異なり、そのルールを達成する上での競技運営も異なる。それらの実際について社会のみならず柔道に携わる者においても理解は限定的である。そういった知的障がい者柔道の理解や周知等の根拠としての明文化は必須と考えたからである。

【方法】競技会の構造分析ために競技会2日間（2022年11月5日・6日）における参与観察とビデオカメラでの撮影を実施した。参与観察について、本研究代表筆者は、ナショナルゲーム柔道競技委員という立場で参画しており、競技会に向けた準備段階から実際の競技運営まで中核的役割を担った。そういった関係から詳細な事前会議資料や当日の競技運営に関する資料を保有しており、実際の現場における進行をそれらの資料に照らし合わせながら競技会の構造を明確にする。また競技会中2日間はビデオカメラでの撮影記録を固定カメラ一台と、担当者一名が様々な視点から撮影した計2台で撮影記録を残しておりこれらの映像データを補完的に活用する。

【結果および考察】柔道競技会の構造分析から、S0の特徴である競争をより近づける行為のディビジョニングを柔道の場合どう行うか、そして柔道競技会全体の運営として全日本柔道連盟傘下の各地域柔道連盟との連携や、ルールの差異による審判法の理解などが明らかとなった。

【結論】近年、知的障がい者に柔道を競技として体験させる試みが盛んになる中で、本研究は、その理念やそれに伴う運営の実際を提示できたことに社会的意義を求める。共生社会が謳われる現代社会の中で知的障がい者理解や社会参加の促進などスポーツが担える役割は多分にある。種々あるスポーツの中で、柔道の独自性である柔道場や柔道衣といった日本文化を継承する環境と、組み合わせ等の柔道体系が知的障がい者にとって有益であることは先行研究からも明らかになりつつある。また知的障がい者でも安全に出来る柔道とは誰しもが取り組める柔道とも考えられる。生涯体育・スポーツとしての柔道のあり方について研鑽を重ねる所存である。



## IA-2

### 大学生柔道競技者における柔道実践の動機づけの因子構造とその信頼性 The factor structure of motivations for university judo athletes and the reliability

○佐々木康允（富士大学）、村山憲男（昭和女子大学）、竹澤稔裕（順天堂大学）、  
伊藤潔（九州共立大学）、廣瀬伸良（順天堂大学）

Yasumasa SASAKI (Fuji University), Norio MURAYAMA (Showa Woman's University),  
Toshihiro TAKEZAWA (Juntendo University), Kiyoshi ITO (Kyusyu Kyoritsu  
University), Nobuyoshi HIROSE (Juntendo University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The questionnaire in the previous studies that Iteya et al.'s judo motivations research (2011) used were not adequately examined for reliability and validity. On the other hand, Sasaki et al.'s study (2020) was ensured high content validity of the items, because that's based on free-text responses of university judo player. However, it wasn't quantitatively examined. Therefore, the purpose of this study was to quantitatively examine the factor structure and reliability of the university student's judo motivations. The results of the factor analysis revealed that motivation was extracted into five factors.

【目的】 射手矢ら（2011）は、柔道継続理由を調査し、因子分析によって5因子を抽出している。また、佐々木ら（2020）は、大学生に対して柔道実践の動機づけについて自由記述で回答を求めた結果、103項目が得られ、KJ法によって7因子にまとめている。しかし、射手矢ら（2011）が参考にした先行研究の質問項目においては信頼性や妥当性が十分に検討されていなく、佐々木ら（2020）の研究は自由記述回答をもとにしているため、項目の妥当性は高いものの、数量的には検討されていなかった。そこで本研究では、大学生柔道競技者の動機づけの多様性を数量的に検討するため、実態を示していると思われる佐々木ら（2020）の項目を用いて調査し、その因子構造や信頼性を検討することを目的とした。

【方法】 無記名で自記式の質問紙調査ないしWeb調査のどちらかで実施した。柔道実践に関する動機づけについて、佐々木ら（2020）で得られた103項目を基に質問項目を作成し、7件法によって回答を求めた。

数量的検討については、調査で得られた柔道実践の動機づけのデータの因子構造を、因子分析を用いて検討した。また、各因子の内的整合性の検討として、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。

【結果および考察】 因子数については、固有値及びスクリープロットより判断し、5因子を採択し、それらの命名と各因子のクロンバックの $\alpha$ 係数は、「目標／達成」因子( $\alpha = .946$ )、「武道としての魅力」因子( $\alpha = .889$ )、「人間的成長」因子( $\alpha = .838$ )「惰性継続」因子( $\alpha = .836$ )、「柔道指導のキャリア形成」因子( $\alpha = .900$ )となった。

【結論】 大学生柔道競技者の動機づけの多様性を数量的に検討した結果、大学生柔道競技者の動機づけは5つの因子からなる事が示唆された。

## IA-3

ドイツにおける柔道教育に見られる柔道技法の捉え方：  
柔道専門コーディネーション・トレーニングの分析を中心に  
The Reception of Judo Techniques within German Judo Education:  
An Analysis of Judo Specific Coordination Training

○マーヤ・ソリドーワル (津田塾大学), 曾我部晋哉 (甲南大学),

Maja Sori Doval (Tsuda University), Akitoshi Sogabe (Konan University)

一般  
IA-1  
S  
IA-9

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This presentation is part of the research project “The Reception of Judo as a Recreational Sports Activity in Germany: With a Focus on Target Group appropriate Teaching Methods” funded by the Japan Society for the Promotion of Science. The aim of this study was to clarify the reception of judo techniques within German Judo Education. In Germany judo techniques are taught as a skill set for solving situations within a specific shiai or randori situation, with the aim of responding adequately to the opponent’s actions. This scientific approach was implemented into a Judo Specific Coordination Training (Lippmann and Susebeek 2006), a training method developed for competitive judo.

**【目的】** 本研究は科学研究費助成基金若手研究事業「ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方：対象者別の指導法を中心に」の一環として、ドイツの柔道教育における柔道技法の捉え方を考察した。

**【方法】** ドイツの昇級昇段規定の中で、柔道の技術がどのように分類されているのか明らかにするために、柔道教育に関するガイドラインの一次資料の分析を行った。次に、競技柔道のトレーニング法として開発された柔道専門コーディネーション・トレーニング (Lippmann と Susebeek 2006)における柔道の技術は、どのような観点から捉えられているのかを先行文献より検討した。また、2023年5月17日から21日にドイツ柔道連盟において現場調査を行い、実際に指導されている柔道専門コーディネーション・トレーニングを視察した。そして、ドイツ柔道連盟教育普及委員長の Ralf Lippmann 氏に聞き取り調査を行い、ドイツの柔道専門コーディネーション・トレーニングが柔道教育においてどのような位置づけであるのかを考察した。

**【結果および考察】** ドイツの柔道専門コーディネーション・トレーニングは、柔道の投技と固技を利用して相手に勝つことを目的とした、対人競技の能力獲得の手段として捉えられている。つまり、柔道の技術は、試合や乱取りのような変化する状況に応じて、コーディネーション・トレーニングの要素として重要な相手の反応や動きに対応し、状況に応じて最も効果的な解決策を選択する方法として解釈されている。この柔道の技術の科学的なアプローチは、昇級昇段規定の基盤にもなっている。

**【結論】** 柔道の技術に対する科学的な考え方は、柔道専門コーディネーション・トレーニングにも柔道ドイツ柔道連盟の新しく導入された昇級昇段規定にも見られる。つまり、ドイツの柔道教育は、競技柔道及び強化柔道において細かい技術の習得よりも乱取りや試合の状況に応じて対応できる能力の獲得を強調する「コンピテンシーモデル」に基づいているといえる。柔道専門コーディネーション・トレーニングは、単に柔道の競技力向上のみならず、柔道の技術の基礎作りとしてのトレーニング法としても使われている。

# IA-4

## 東欧における武道の教育力に関する研究 —ルーマニアの武道実践者を対象として—

Research into the educational power of budo in Eastern Europe  
: Aimed at Romanian budo practitioners

○柴田 直生 (筑波大学大学院), 酒井 利信 (筑波大学), 大石 純子 (筑波大学)

Sunao Shibata (University of Tsukuba Graduate School), Toshinobu Sakai (University of Tsukuba),  
Junko Oishi (University of Tsukuba)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study examined the educational power of budo in Eastern Europe by interviewing two Romanian budo practitioners. Subject A: she had improved her timid mind through budo practice; therefore, we confirmed that she understood the philosophy of "from body to mind", and "life-long budo". Subject B: Through his experience in competitions, he got a different sense of mind-body relationship from Japanese ways, but he also developed a "mind-body correlative dualism".

【研究の背景及び目的】日本発祥の身体運動文化である武道は、現代日本において「人間形成」を目的とする教育力を有するものとして広く親しまれている。一方、海外では武道による「人間形成」の考え方が広まりつつあるものの、日本と異なる認識を持つ人々も多く、宗教、文化的背景の違いから理解されない事例も存在する。しかし近年では特に東欧において武道による「人間形成」への理解の萌芽がみられており、酒井利信はこの現状を踏まえユーゴスラヴィア紛争時のスナイパーの事例を対象として武道の教育力が海外でも通用するかという課題を解き明かしている。これは海外で武道の教育力が認められた事例として非常に示唆の富んだ研究であるが、更に通例的な事例も取り上げることで、海外一般における武道の教育的価値を検証することができると考えられる。以上に鑑み本研究では、東欧における平時の武道実践者たちが武道を通じて「人間形成」を果たしてきたのかという、日本武道の教育力について明らかにすることを目的とする。

【対象と方法】本研究では、武道実践を長年続けてきた中で知識や理解が深く、ルーマニア国内の武道実践状況にも詳しいルーマニア人2名を対象とし、これまでの武道実践の経歴に関する回顧録の依頼とそれを基にしたインタビュー調査を通じて考察を行う。入手した文字テキストを基に従来の文献学的手法に質的データ分析法を援用し、日本の武道教育におけるロジックと照らし合わせることでその詳細を把握していくこととする。

【結果及び考察】対象者Aの事例においては、Aが長年の武道実践を経て、生活や仕事の場面においても不安な気持ちを乗り越え勇敢に挑戦する心を持つようになったとして内面の成長を実感していた。また今後自身の内面を向上させていくには継続して稽古を続けることが重要だと考えており、これらの感覚には稽古での身体修練を通じて心を変えるという禅的な「身体性重視」の思想や、「身体→心」の方向性が垣間見え、生涯にわたる精神修養を自覚している様子は「生涯武道」の考えを受け入れたものだと捉えられる。対象者BにおいてはBが剣道の代表選手としての経験を持つことから、試合経験を通じて感情を制御する方法や相手と心をつなぐ気持ちを理解するという考えを学んできたとして、ここには他者との一体性を感じるという「自他同根」や、この考えを通じて人として立派な存在を志向する「倫理・道徳的精神性」の思想を確認することができた。また心を鍛える為に身体鍛錬が必要だと考える様子は、これらを全体論的に捉える「身心一如」的な感覚とは異なるものの、そこに相互の関連を認める「身心相関の二元論」や、「身体性重視」の考えが存在していると推察された。他の考察や詳細な内容については紙面の都合上割愛する。

# IA-5

## 中国における柔道の研究動向と史料分析 Research trends and historical materials of judo in China

劉 暢 (国際武道大学)  
LIU Chang (International Budo University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study serves as preparatory work to shed light on the development of Judo in China and aims to address the following two issues: ①What specific problems have previous studies on Judo in China focused on, and what have they revealed? ②What types of historical materials related to Judo are available in China?

About issue ①, based on the research of 597 studies related to Judo available at the National Center for Philosophy and Social Science Documentation, it was found that the majority, over 80%, of studies in China focused on Judo as a competitive sport and research related to Judo coaching. Only 27 studies touched upon the development of Judo in China, of which 25 studies were primarily introductory in nature or focused on addressing current issues.

About issue ②, an investigation was conducted on historical materials from the early 20th century, including “Shen Bao” (1872-1949), “Guoshu Zhoukan”, and 41 other magazines. Additionally, period of the People’s Republic of China, “Renmin Ribao” (1946-present) and 10 magazines such as “Xin Ti Yu” were surveyed. Ultimately, a total of 1,950 historical materials regarding Judo in China were identified, consisting of 1,660 newspaper articles and 290 magazine reports.

【目的】本研究は、中国における柔道の展開を明らかにするための準備作業であり、以下の二つの課題の解明を目指している。①中国において柔道に関する先行研究はどのような問題に注目し、何を解明してきたのか。②中国において柔道に関する史料はどのようなものが残されているのか。

【方法】課題①について、中国の人文社会科学の研究成果を網羅した国家哲学社会科学文献センターで柔道に関連する 597 篇を調査した。課題②について 20 世紀前半の史料として『申報』(1872-1949)、『国術週刊』などの雑誌 43 種 (計 379 冊) を、一方、中華人民共和国成立後の史料として、『人民日報』(1946-今日)、『新体育』などの雑誌 10 種 (計 735 冊) をそれぞれ調査した。

【結果および考察】課題①について、柔道のコーチングに関する研究が 231 篇 (38.3%)、競技選手の育成や怪我予防に関する研究が 190 篇 (31.5%)、競技大会や技術の分析に関する研究が 107 篇 (17.8%)、柔道の歴史や他競技との比較が 75 篇 (12.4%) であった。課題②について、20 世紀以降の中国において柔道に言及した史料 1950 点 (新聞記事 1660 点、雑誌報道 290 点) を洗い出した。

【結論】中国において、柔道に関する学術研究は 1981 年以降に始められ、競技スポーツとしての柔道に主眼を置かれていたことがわかった。柔道関連の史料は 1917 年にすでに見られたが、多くの史料 (1847 件、94.7%) は 1980 年代以降に集中しており、年毎の史料件数もオリンピックの開催に従い周期的な変動が見られる。

# IA-6

## ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の取り組み ～ドイツ柔道フェスティバルの視察から～

Judo as a Lifelong Sport in Germany  
～From the Observation of the German Judo Festival

○曾我部晋哉 (甲南大学), マーヤ・ソリドーワル (津田塾大学)

Akitoshi Sogabe (Konan University), Maja Sori Doval (Tsuda University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study is to investigate judo as a lifelong sport with recreational character in Germany. In Germany, the "Recreational Judo Instructor" and "TAISO" instructor qualifications have been newly established as instructor qualifications to promote lifelong sports. The concept of judo as a lifelong sport is also very important for the further development of judo in Japan.

【目的】2020年の出生率は、ドイツ1.53人、日本1.34人と報告されており、両国の少子化の問題は、柔道登録人口減少という観点からも顕在化している。更に、両国の総人口における65歳以上の割合は日本：28.6%、ドイツ：21.8%であり、少子高齢化社会は深刻さを増している。そのあおりを受け、柔道登録者数も激減しており、ドイツでは1995年には224,333人であったものが2020年には132,141人まで減少している。そこで、本研究ではこれまでも柔道フェラインの支援のために、独創的な施策を展開してきたドイツの現在並びに今後の取り組みについて調査し、我が国の柔道施策の参考としたい。

【方法】2023年5月17日～21日にドイツのバッドエムスで開催されたドイツ柔道連盟主催のJUDO FESTIVALを視察した。このイベントは、4年に一度開催され、ドイツにおける最新の情報が集約され幅広く議論されるものである。また、ドイツ柔道連盟のChief Executive OfficerのFrank Doetsch氏、教育普及施策策定の中心メンバーであるWolfgang Dax-Romswinkel氏より、今後の取り組みについての聞き取りを行った。

【結果および考察】ドイツでは、特に7歳から14歳の柔道連盟登録者数の減少が著しい。一方で、41歳からの登録人口の割合は増加傾向にあり、今後の人口動態を鑑みても中年期以降の世代をターゲットとした生涯スポーツとしての柔道の施策はドイツ柔道連盟としても一つの軸となる。そこで、生涯スポーツを推進するための指導者資格として、生涯柔道指導員、護身術指導員、中高年指導員、幼年指導員、暴力対策指導員、健康柔道指導員、形指導員の他、『TAISO』インストラクター資格も新設し、その普及にあたっている。

【結論】我が国では、幼少期から競技スポーツとして柔道に取り組む傾向が強く、大学卒業も生涯スポーツとして継続的に柔道に取り組む人は少ない。また、学校卒業後社会人となってから初めて柔道を始める人は更に少ない。今後、我が国においても深刻な少子高齢化社会を迎えるにあたり、全国民の発育発達、健康維持、転倒予防に寄与できる柔道の要素は非常に価値のあるものであると考える。そのような観点からも幼少期から高齢期まで長期的に継続できる生涯スポーツとしての柔道の取り組みは、我が国においても重要な施策の一つとなると考えられる。

## IA-7

藤田西湖文庫所蔵伝書『大東流合気柔術』（江戸期）の検証  
Verification of “Daito-ryu Aikijujutsu” (Edo period), a book of  
secrets held in the Fujita Seiko library.

○工藤龍太（早稲田大学スポーツ科学学術院）

○ Ryuta Kudo (Faculty of Sport Sciences, Waseda University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study is to examine the contents of “Daito-ryu Aikijujutsu”, a historical document that is believed to have been established in the Edo period, and to clarify the historical position of the book. As a result, it was found that the book was created around 1928 by Morihei Ueshiba or related persons in the process of changing from Daito-ryu to Aioi-ryu.

【目的】現代武道の一種目である合気道の源流とされる柔術の一派・大東流合気柔術は、中興の祖とされる武田惣角（1859-1943）以前の伝承については不明確な点が多い。これまでの議論を概観する限り、大東流は武田惣角が創始したとする説もあるものの、史料実証的な検討がなされたとはいえない状況である。発表者はこれまで、合気道が形成される状況を大東流との関係に注目しながら調査し、合気道創始者・植芝盛平が1928年に著した伝書は大東流の伝書に変更を加えていたことを解明してきた。本研究では、藤田西湖文庫（神奈川県小田原市）に所蔵される伝書『大東流合気柔術』（以下『大東流』）に着目する。同伝書は、江戸時代に成立したとされ、これまでその内容を検討されていない。以上を踏まえ本発表では、『大東流』の内容を検証し、関連資料と比較検討することを通じて、同伝書の大東流・合気道史における位置付けを解明することを目的とする。

【方法】以下の史料を使用し、それぞれの内容を比較した。

- ・ 著者不明（江戸期）『大東流合気柔術』
- ・ 武田惣角（1910）『秘伝目録』（複写史料）
- ・ 武田惣角（1916）『秘伝奥儀之事』（複写史料）
- ・ 植芝盛高（1928）『相生合気柔術秘伝目録』（複写史料）

【結果および考察】『大東流』は題箋に「大東流合気柔術」と記された明朝綴じの冊子本であり、現在確認できる大東流の伝書が卷子本であるのとは異なる装丁である。内容を見ると『大東流』は武田惣角が弟子に授与した『秘伝目録』と『秘伝奥儀之事』という2つの伝書を含んだ二部形式の内容となっている。この点は、植芝が1928年に植芝守高の名で授与した『相生合気柔術秘伝目録』と同じである。『大東流』に含まれる前半部分の『秘伝目録』の内容は、武田と植芝の伝書のそれぞれの内容が混在しているものの、概ね同内容だった。後半部分の『秘伝奥儀之事』の内容は、武田が出した伝書に近い内容が多かった。『大東流』の末尾には、「相生流合気柔術」という表現が確認された。また、『大東流』には、武田が出した伝書には記載されていた清和天皇から武田までの15代の系図が記されておらず、植芝の伝書に見られた「舊倉津藩士 武田惣角源正義 門人 植芝守高」という発行者名も確認できなかった。さらに、『大東流』には武田の伝書に見られた「大東流柔術」の印や植芝の伝書に見られた「合気柔術」の印も確認できなかった。

【結論】植芝盛平は武田惣角から習得した大東流の技術に変更を加え、1928年に自身の武術の名称を相生（流）合気柔術へと変更した。『大東流』は、武田と植芝がそれぞれ発行した伝書の中間の内容を持つことから、江戸時代に執筆されたものではなく、大東流から相生流へと変更される過程で、植芝本人が関係者により昭和初期に創られた伝書であると考えられる。

本研究は JSPS 科研費（22K11643）の助成を受けたものである。

## IA-8

### 『新陰流兵法書』を中心とした江戸柳生初期組太刀仕様の研究

Restoration of the early form of the Shinkage-ryu based on “*Shinkage Ryu Heiho Sho*”

○中嶋哲也（茨城大学）

Tetsuya Nakajima (Ibaraki University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study deal with the early form of the Shinkage-ryu, the ancient swordsmanship, thereby seeks to reconsider about “*Heio Ka Densho*”, the treatise of the political philosophy of the Shinkage-ryu. “*Shinkage Ryu Heiho Sho*” was the one of the oldest specifications of the Shinkage-ryu's form written in 1626. Although the manuscript is not signed, it is pointed out that Tadatoshi Hosokawa copied it from the original written by Munenori Yagyu. From an examination of its manuscript, it was found that in the early Edo Yagyu kata practice multiple patterns per kata were taught simultaneously. In conclusion, it is an achievement to have restored the specifications of the form assumed by the matters described in the “*Heio Ka Densho*.”

【目的】本研究の目的は『兵法家伝書』を再考する手段として、『兵法家伝書』が書かれる前提として江戸柳生初期の組太刀がどのように実践されていたのかを考察することである。これにより、『兵法家伝書』を取り巻く外在的な思想史的背景から読解するのではなく、新陰流の組太刀稽古に内在的な視点から読解する方法を切り拓くことが期待される。

【方法】寛永3（1626）年の作である永青文庫所蔵『新陰流兵法書』に示された組太刀を復元する。同書は江戸柳生初代の柳生宗矩の高弟である細川忠利が写本したものと考えられる。本学会第54回大会で述べたように、同書と同系統の文献に『五巻書』があるが、『五巻書』の末尾に同書が宗矩の作である旨が記されていることから、細川が写本したのは柳生宗矩の原本と考えられる。復元方法としては、国際武道大学で新陰流及び一刀流の復元研究を実施してきた故・吉田鞆男（1942-2021）に学んだ刀法の視点から伝書を読解する方法を用いる。吉田は刀法と組太刀を区別し、前者を各流派における刀の原則的な使い方とした。新陰流において刀法は水月に踏み込む、太刀筋、一拍子の3項目に整理され、組太刀は刀法の範例である。文献に記されていない所作については、現行の尾張柳生の所作で補填した。

【結果および考察】本研究では三学の一本目である一刀両段の復元を示す。現行の尾張柳生では仕太刀は脇構から一旦頭上に袋撓を取り上げ直し、打太刀も清眼から同じく頭上に取り上げ直し、互いに頭をめがけて打ち込むことになっている。一方、『新陰流兵法書』では、打太刀は構え直さず、仕太刀の左腕の肘から拳辺りに物打ちの照準を合わせて近づき、左の肩先から肘、拳をめがけて斜めに打込んでいく。対する仕太刀も脇構から構え直さず、打太刀の右拳へ打太刀と筋交いに打ち込んでいく。注目すべきは、『新陰流兵法書』には一刀両段の仕様が、この他に7~8パターンも付記されていることである。そのため、組太刀といっても一定の方式にしたがって所作を反復するだけではなく、不確定な打太刀の動きに応じて仕太刀が変化していく「砕き」も面太刀の稽古の一環としてなされていたことが考えられる。

【結論】『兵法家伝書』の内容が復元された組太刀にどのように反映されているのか。例えば「一の太刀と二の太刀との間へは、髪一すぢ入るべき間もなく」といった記述は組太刀の所作を踏まえた記述であることなどが現段階でも指摘できるだろう。今後は『兵法家伝書』の神妙剣や大機大用等がどのように組太刀に反映されているのかをより深く考察したい。

# IA-9

新当流における「気」に関する研究  
—『兵法自観照』に着目して—  
Research on "Ki in Shintoryu  
—Focusing on Heihouzikansho—

○森山竜成（筑波大学大学院），酒井利信（筑波大学），大石純子（筑波大学）

Ryusei Moriyama (Tsukuba University Graduate School), Toshinobu Sakai (University of Tsukuba), Oishi Jyunko (University of Tsukuba)

一般  
IA-1  
S  
IA-9

## 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

Mental and inner factors are more important issues in the fighting situation since early modern samurai society, and martial art practitioners have written their issues down in writing. One of these elements that have received a great deal of attention is “ki”. This study aims to clarify the meaning of the description of “ki” found in “Heiho Jikan Sho”.

## 【背景及び目的】

現代剣道は対人競技として行われており、試合の勝敗には技術的な側面以外にも精神的・内面的な側面が大きな影響を及ぼすことを実践者は経験的に理解している。このような精神的・内面的な要素は、近世武士社会における武術・武芸において、より重要な問題であった。近世の武術・武芸における諸流派では、その高度な精神性・心法論が泰平の世において文化的な成熟を為し、文章化されることも多く、それらの伝書は現代武道にも多くの示唆を与えている。そのような近世武芸伝書でも特に重要なキーワードとして、多くの注目を集めてきたのが「気」である。近世武芸伝書における「気」については、これまで主に新陰流系統や一刀流系統などの伝書を中心に考察がなされており、穿った研究成果が提出されてきたが、同じく後世に大きな影響を与えた神道流系統の剣術流派において語られた「気」の特徴については詳細な検討が行われてきていない。以上から、本研究では近世武芸伝書の中でも特に神道流系統の新当流伝書『兵法自観照』を取り上げ、神道流系統に位置づく剣術流派の中で「気」がどのような意味合いで用いられてきたかを明らかにすることを目的とする。

## 【方法】

本研究では、『兵法自観照』（大月関平、1842年）を取り上げ、まずはそこに記されている「気」に関する記述についてデータベース化し、網羅的に把握する。さらに先学で示されてきた分類、「人間の気」「自然の気」「原理としての気」、さらに「人間の気」における「心」「身体」「空間における気」という指標を援用しながら、新当流伝書の中でいかなる意味合いで「気」が用いられているのかについて詳細な検討を行っていくこととする。

## 【結果および考察】

『兵法自観照』に記されている「気」の記述を抽出し、「人間の気」「自然の気」「原理としての気」といった大きな指標に分類を行った。さらに特徴的な記述を抽出し、先学での指摘などと比較・考察を進めている。特に「人間の気」に分類できる記述は多く、敵の動きや気に注意を払い、様々な仕掛けを施すといった技術的記述から、心を静かに無心であることで身体が剛健になるといった自己の内面に関する記述など様々な意味内容を確認することができた。

その他詳細な考察は紙面の都合上割愛する。



# IB-1

## 空手道競技会における救護状況と課題 The Situation and Problems of First Aid in Karate Competitions

○鈴木浩司（日本大学松戸歯学部）、工藤裕仁（目白大学保健医療学部）、水田洋平（伊藤整形外科）、大徳紘也（日本体育大学大学院）、玉田一敬（東京都立小児総合医療センター）、三村由紀（防衛大学校）、谷木龍男（東海大学体育学部）

Hiroshi Suzuki (Nihon University), Hiroki Kudo (Mejiro University), Yohei Mizuta (Ito Orthopedics), Hiroya Daitoku (Nippon Sport Science University), Ikkei Tamada (Tokyo Metropolitan Children's Medical Center), Yuki Mimura (The National Defense Academy), Tatsuo Yagi (Tokai University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to survey the injury situation at karate competitions and to discuss the issues. The important issues are the creation of a first aid system, prevention of concussions, and control of infectious diseases. We will attempt to find solutions within our limited resources.

【目的】（公財）全日本空手道連盟（全空連）の基本理念から組手においては直接打撃を禁じた寸止めを大前提に、決められた部位に突きや蹴りをコントロールし、重ねたポイントの大小によって勝敗を決している。しかし、偶発的に相手に当たってしまうことも多く、特に素面で行われる競技会では外傷の発生頻度が高い。そこで、演者らが救護スタッフとして参加している空手道競技会における最近の外傷様相を示し、今後の課題について検討した。

【方法】東京 2020 大会以降の演者らが携わった素面での大会である全日本空手道選手権（個人戦、団体戦）、全日本体重別空手道選手権、プレミアリーグ福岡大会の 6 大会における外傷結果に基づき調査した。

【結果および考察】調査した 6 大会の総外傷数は 165 件であった。外傷数は 10 年前に比べ総数は減少傾向を示している。これは審判技術の向上や防具の改良によるものと思われる。しかしながら重症化は避けられない。そこで今後の課題を考えた。最も大事なものはシステムの構築である。競技会の救護において全空連医科学委員会は基本的に市販薬品で対応し、それを超える場合、救急搬送あるいは後方病院への受診を指示している。この判断は大事であり、事前のミーティングにて全スタッフが共通認識を持つことが必要である。次に注意が必要なのが脳震盪対策である。脳震盪に対し全空連はガイドラインを作成し、選手の安全に配慮しているが、復帰プログラムの作成までには至っていない。医科学委員会としてもこの作成は急務と考えている。一方、救護の感染対策も重要である。先日の競技会では重症事例により救急搬送対象の選手に体調等を尋ねていると発熱を認め、問診の中で家族が COVID19 に感染し自宅療養中であることがわかった。選手の体調管理は自己申告のみであり、これは十分とは言えない。感染症への対応はこれから多々求められる新事項である。

【結論】大会救護の課題を上げたらきりが無いが、選手、観客、スタッフの安全を担っていることから、しっかりと計画と準備、スタッフのスキルの向上が大事である。まずは重要度と緊急度を考え、限られた資源の中で解決を試みたい。

## IB-2

### 剣道稽古中のマスク着用は生理学的負担になるのか Is wearing a mask during kendo practice physiological burdens?

○高橋健太郎（関東学院大学理工学部健康科学・テクノロジーコース）  
○Kentaro Takahashi (Kanto Gakuin University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to determine how wearing a mask during kendo practice affects physiological responses such as heart rate. The results showed that the heart rate during kendo practice tended to be significantly lower when the mask was not worn than when the mask was worn.

#### 【目的】

現在、全日本剣道連盟では個人の判断に委ねるとしているが、未だ剣道用面マスクと飛沫飛散防止のための面シールドのどちらかを着用することを薦めている。これまで、面マスク着用による熱中症発生リスク等の注意喚起がなされているが、面マスク着用による剣道動作や運動強度への影響がどの程度あるかなどの検証はあまり行われていない。先行研究において、Roberge ら(2021)はサージカルマスク着用での歩行運動では、心拍数、呼吸数、経皮二酸化酸素分圧において有意に増加しており、マスク着用が生理的負荷になりうると報告している。しかし、Keely ら(2022)は、運動中にフェイスマスクを着用しても、筋や血液中の酸素動態へ有害な影響はないと報告しており、一致した見解は得られていない。

そこで、本研究の目的は剣道の稽古中に面マスクを着用することで、心拍数などの生理学的応答へどう影響するかを明らかにすることを目的とした。

#### 【方法】

被検者には、剣道着の下にウェアラブル心拍センサ)を装着させ試技中の心拍数、三次元加速度を 5Hz にて測定した。センサで測定されたデータは、Bluetooth を介して PC へ送信し記録した。試技内容は、一般的な剣道の対人稽古としておこなわれている、切り返し、打ち込み、互角稽古を連続的におこなうトータルで約 15 分とした。試技は面マスク、面シールド両方着用、面シールドのみ着用の 2 種類とし、使用した面マスクは、スポーツマスクとして市販されているポリエステル製のものを使用した。なお、面マスク着用、未着用時の試技は別日を設定し、気温は両日ともに摂氏 23 度であった。

#### 【結果および考察】

剣道練習中の心拍数は、面マスク着用時に比べ未着用時には低い傾向が見られた。特に打ち込み時、面マスク着用時の心拍数が高く平均でおよそ 180bpm まで上昇していた。マスクを着用した剣道の素振りに関する研究では、初心者を対象とした場合、短時間の運動中の心拍数や RPE には剣道マスク着用の影響はない、と報告されている。しかし、切り返し以降、マスク着用時にはすべて有意に高い値を示していた。また、稽古後の休憩時に心拍数が減少しにくい傾向が見られた。よって、マスク着用時には休憩時間を長めにとるなどといった工夫が必要であると思われる。

# IB-3

剣道選手におけるプライオメトリクスが跳躍能力および面打ちに及ぼす効果

○佐々木陽一朗 (筑波大学), 鍋山隆弘 (筑波大学),  
有田祐二 (筑波大学), 谷川聡 (筑波大学)

Yoichiro Sasaki (Tsukuba University), Takahiro Nabeyama (Tsukuba University),  
Yuji Arita (Tsukuba University), Satoru Tanigawa (Tsukuba University)

## 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to examine how prescribing plyometrics to kendo players affects their jumping ability and men strike. 6 weeks of plyometrics exercises were prescribed and the jumping ability and men strike were measured pre and post exercises.

As a result, post training the RJ-index and standing long jump values improved, and the men strike time was shortened.

【目的】 剣道選手においては、下肢の爆発的なパワー発揮能力と面打ちの打突時間に有意な相関関係があることはいくつかの研究で明らかにされてきたが、プライオメトリクスを実施し、跳躍能力および打突に及ぼす影響を検討した研究は数が少ない。そこで本研究は、大学男子剣道選手を対象とし、プライオメトリクスを実施し、跳躍能力および異なる条件下での面打ちに及ぼす効果を明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象者は、T大学剣道部に所属する男子部員のうちトレーニングに意欲を示し、実験全日程に参加可能であった8名とした。トレーニング期間は全6週間、週3回の頻度で実施した。トレーニング内容は、1・2週間目を前期、3・4週目を中期、5・6週目を後期と期分けし、段階的に強度が高くなるように設定した。トレーニングの種目は、片脚縄跳び(前後移動)、前二重跳び、ドロップジャンプ、ドロップリバウンドジャンプ、両脚階段ジャンプ、片脚階段ジャンプ、段差リバウンドジャンプ、ホッピング、ジャンピングスクワットの全9種目で構成した。トレーニング前後で跳躍能力および面打ちを以下の方法で測定した。

跳躍能力は、リバウンドジャンプ(以下:RJ)、両脚および片脚垂直跳び、両脚および片脚立ち幅跳びを用いて測定した。分析項目は、RJは跳躍高、接地時間、RJ-index、各脚のStiffness。両脚および片脚垂直跳びは、跳躍高、両脚および片脚立ち幅跳びにおいては、跳躍距離とした。

面打ちは、選択の有無に加え、2つの打突開始距離、身長×1.35(以下:1.35)、身長×1.4(以下:1.4)から測定を行なった。分析項目は選択無しにおいては、打突時間、選択有りにおいては打突時間、反応時間および総打突時間とした。

実験を開始するにあたり、全ての対象者に本研究の目的、方法、および実験に伴う安全性を十分に説明し、実験参加のための同意を得た。

【結果および考察】 跳躍能力においては、RJ-index、左右脚Stiffness、右脚垂直跳び、両脚および左右片脚立ち幅跳びにおいてトレーニング後に有意に高い値を示した。

面打ちは、選択無しの面打ちの打突時間において、1.35ではトレーニング後に有意に短い値を示し、1.4では有意に短い傾向が認められた。選択を伴う面打ちでは、1.35の総打突時間で、トレーニング後に有意に短い傾向が認められ、反応時間においては、いずれの打突開始距離においても有意な差は認められなかった。これらの結果から、プライオメトリクスによって、RJ-index、Stiffness、両脚および片脚立ち幅跳びの跳躍能力が向上し、垂直および水平方向への大きな力発揮が可能となり、面打ちの打突時間の短縮に繋がる可能性が示唆された。

## IB-4

### “なぎなた”の運動習慣が中高齢者の健康度・生活習慣に与える影響 Effects of “Naginata” exercise habits on health levels and lifestyle of middle and elderly people

○田中ひかる (近畿大学), 木村有里 (天道流), 宮田尚美 (名古屋市立南光中学校)  
Hikaru Tanaka (Kindai University), Yuri Kimura (Tendo-ryu), Naomi Miyata (Nagoya  
municipal nankou junior high school)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to clarify the relationship between the amount of weekly physical activity and "health levels and lifestyle" among middle-aged and elderly people. The results showed that for people aged 65 and over, the amount of physical activity per week tended to be at low and moderate intensity levels. And the amount of physical activity was significantly correlated with the level of social health.

【目的】なぎなたは、老若男女、年齢や個々の体力レベルに応じて様々な運動強度で実施できることから、体力の向上、健康増進に適していることが考えられる。様々な運動・身体活動と生活習慣の関連について、なぎなたを含む運動部活動所属者は、非所属者より生活習慣が高い(田中ら, 2023)ことから、異なる運動強度および身体活動量は健康度・生活習慣の維持と向上に関係があると考えた。そこで、本研究は“なぎなた”の運動習慣をもつ中高齢者における1週間の身体活動量と健康度・生活習慣の関係について明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は、長期にわたりなぎなたを継続している中高齢者男女160名(M11, F149)とした。本調査は、国際標準化身体活動質問票(IPAQsv)をもとに「軽い活動」の質問項目を加えた調査(IPAQsv+低強度:田中ら, 2023)と健康度・生活習慣診断検査(徳永, 2005)を用いた。健康度・生活習慣診断検査は、3尺度(運動・食事・休養)12因子(健康度3因子, 運動2因子, 食事3因子, 休養4因子)47個の質問項目から構成されている質問調査である。分析方法において、身体活動量と健康度・生活習慣の関係はピアソンの相関係数を用いて算出した。各因子の比較は1元配置の分散分析で解析し、Bonferroniの多重比較をおこなった。各群間の差の検定は危険率5%未満を有意水準とした。

【結果および考察】1週間における身体活動量と健康度・生活習慣の関係は、「運動」と「社会的健康度」のみに有意な相関関係( $P<0.05$ )を示した。活動強度別に見た結果、低強度が $33.2\pm 18.5$ メッツ・時/週( $n=13$ , 65.2 $\pm$ 13.7歳), 中強度が $54.3\pm 42.6$ メッツ・時/週( $n=72$ , 66.9 $\pm$ 11.4歳), 高強度が $86.1\pm 55.4$ メッツ・時/週( $n=75$ , 59.1 $\pm$ 10.4歳)であった(高>中, 低: $P<0.001$ ,  $P<0.01$ )。1週間の身体活動量別にみた結果、低身体活動量が $18.7\pm 8.7$ メッツ・時/週( $n=18$ , 63.2 $\pm$ 13.4歳), 中身体活動量が $32.3\pm 9.9$ メッツ・時/週( $n=59$ , 64.2 $\pm$ 11.6歳), 高身体活動量が $102.5\pm 47.8$ メッツ・時/週( $n=83$ , 62.3 $\pm$ 11.5歳)で3群ともに有意な差がみられた(高>中>低: $P<0.001$ )。さらに、健康度・生活習慣の関係は「運動」のみ低身体活動量より高身体活動量のほうが有意に高値を示した( $p<0.01$ )。厚生労働省(2013)は、身体活動量が23メッツ・時/週が生活習慣病に対するリスク軽減を示している。本研究の被験者は、全体のおよそ9割の者が1週間の総身体活動量は中程度から高いレベルの身体活動量で実施しており、運動意識が高い者が多くいたことがわかった。

【結論】なぎなたの運動習慣をもつ中高齢者における1週間の身体活動量は、65歳以上の者が低・中強度レベルで活動をしている傾向を示した。この中高齢者の身体活動量(メッツ・時/週)は、社会的健康度と有意な相関関係がみられた。

# IB-5

## 「コンタクトスポーツ難聴」予防のための頭部衝撃低減サポーターの開発 DEVELOPMENT OF A HEAD PROTECTOR FOR CONTACT SPORTS HEARING LOSS

○濱西伸治（東北学院大学）

Shinji HAMANISHI (Tohoku Gakuin University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

Some publications reported that many contact sports players suffered from hearing loss in kendo, boxing, and American football. We recently proposed these cases as “contact sports hearing loss”. Our hypothesis that it is caused by excessive and long-term bone conduction, which is vibration transmitted through the skull and brain. In this study, we propose head impact reduction supporter to prevent excessive bone conduction. Impact tests showed that proposed supporter significantly reduced impact acceleration. These results indicates that the proposed supporter will possibly be widely used as head protector to prevent hearing loss as well as concussion in contact sports.

【目的】剣道・ボクシング・アメリカンフットボールなどのコンタクトスポーツを長年愛好している人において難聴患者が多数報告されており、我々はこのような難聴を「コンタクトスポーツ難聴」として新たに提唱した。この発生メカニズムとして、頭部に繰り返し打撃や衝撃が加わることで、頭蓋骨を伝わる振動である「骨導」が大きな要因となっている可能性に着目し、本研究では、過大な骨導を防ぐための頭部衝撃低減サポーターを提案する。

【方法】剣道面防具用のサポーターは、追い込みなど特に頭部への激しい打突を伴う稽古での衝撃を緩和することを目的とした「蜘蛛の巣状」の構造で、厚さは10mmである。アメフトヘルメット用のサポーターはハニカム構造を層状に重ねたもので、厚さは45mmである。いずれも、3D-CAD (SolidWorks)を用いて設計したのち、3Dプリンタを用いてポリウレタン樹脂で作成した。打撃実験は、石膏で作成した頭部模型を用い、打撃装置で一定の打撃力を与えた際の頭頂部での加速度を計測し、記録した。

### 【結果および考察】

いずれのサポーターも大幅な衝撃低減効果があり、特にアメフト用のサポーターについては、既存のアメフト用ヘルメットに用いられているサポーターと比較すると加速度を84.8%も低減することができた。

### 【結論】

3Dプリンタ技術によって新たに提案したサポーターは、面の打撃頻度が多い稽古時などに使用することで過大な骨導を抑え、難聴や脳震盪の予防に効果的である。

科学研究費補助金（基盤研究C）研究課題 21K11416

科学研究費補助金（基盤研究C）研究課題 17K01775

## IB-6

### 大学剣道選手におけるアキレス腱の特性の左右差とジャンプパフォーマンスとの関連 The Relationship between Achilles tendon Characteristics and Jump Performance in University Kendo Athletes

○岩本寧々（筑波大学人間総合科学学術院），向井直樹（筑波大学体育系），  
有田祐二（筑波大学体育系），高橋英幸（筑波大学体育系）

【PURPOSE AND CONCLUSIONS】 The purpose of this study was to investigate the relationship between Achilles tendon characteristics and jump performance in university kendo athletes. The findings of this study revealed the presence of asymmetry in the Achilles tendon and suggested a potential correlation between Achilles tendon characteristics and jump performance measurements.

【目的】 剣道競技において、アキレス腱傷害は発症頻度の高い傷害の一つであり、特に、左足での発症頻度が極めて高い。剣道競技では、左足が常に蹴り足となり、左アキレス腱に対してより多くの伸張負荷が繰り返されることで、左右のアキレス腱で異なる適応が生じている可能性が考えられるが、それらを明らかにした研究は少ない。さらに、剣道選手におけるアキレス腱特性、および、関連するジャンプパフォーマンスとの関係を検討した研究はない。そこで、本研究では、アキレス腱障害メカニズム解明や予防策立案のための基礎的知見として、大学剣道選手におけるアキレス腱特性の左右差とジャンプパフォーマンスとの関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】 対象者は、剣道競技歴 10 年以上の大学剣道選手 10 名(男性 5 名、女性 5 名)とした。磁気共鳴画像法(以下、MRI)を用いて、左右アキレス腱の矢状面、横断面を撮像し、アキレス腱の横断面積、長さ、体積を測定した。また、組織硬度計(MyotonPRO)を用いたアキレス腱の弾性(スティフネス)測定、多用途筋機能評価運動装置(BIODEX system4)を用いた足関節等尺性底屈筋力の測定を実施した。さらに、ジャンプパフォーマンスとして、リバウンドジャンプ(以下、RJ)の接地時間、跳躍高、RJ 指数(跳躍高/接地時間)と片脚ホップテストの跳躍距離を測定した。すべての測定は、片脚ずつ、両脚を対象として実施した。

【結果および考察】 アキレス腱の最大横断面積は右脚よりも左脚の方が有意に高値を示した(右:  $1.21 \pm 0.061 \text{ cm}^2$ , 左:  $1.39 \pm 0.075 \text{ cm}^2$ ;  $p=0.029$ )。このことは、左足関節で多く反復される短時間高強度運動によるアキレス腱の形態的適応を表していると考えられる。一方、アキレス腱の弾性(スティフネス)には左右差は認められなかった。測定項目間において、右脚においてのみ、アキレス腱の最大横断面積と RJ 指数、RJ 跳躍高、片脚ホップ距離との間に有意な正の相関が認められた(それぞれ、 $r=0.731$ ,  $p=0.016$ ;  $r=0.710$ ,  $p=0.021$ ;  $r=0.756$ ,  $p=0.011$ )。以上のように、剣道選手におけるアキレス腱形態、および、形態とジャンプパフォーマンスとの関係の左右差が明らかとなったが、そのメカニズム解明にはさらなる検討が必要になる。

【結論】 大学剣道選手において、MRI で測定された左側のアキレス腱最大横断面積は、右側よりも大きいこと、そして、アキレス腱の形態特性とジャンプパフォーマンスとの間には一定の関係、および、左右差がある可能性が示された。

# IC-1

## 柔道の頭部外傷を予防する大外刈に代わる大外落の検討

### A Study of *Osoto-otoshi* as an Alternative to *Osoto-gari* to Prevent Head Injuries in Judo novices

○林弘典 (びわこ成蹊スポーツ大学), 穴田賢二 (石川工業高等専門学校),  
石川美久 (大阪教育大学), 生田秀和 (大阪体育大学)

Hironori Hayashi (Biwako Seikei Sport College), Kenji Anata (National Institute of Technology, Ishikawa College), Yoshihisa Ishikawa (Osaka Kyoiku University), Hidekazu Shoda (Osaka University of Health and Sport Sciences)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study aimed to investigate *Osoto-otoshi* as an alternative to *Osoto-gari* for preventing head injury in judo novices. This study suggested that *Osoto-otoshi* was more effective than *Osoto-gari* in preventing head injury.

#### 【目的】

2015～2020年の柔道の頭部外傷において、急性硬膜下血腫が8件、脳脊髄液減少症1件、外傷くも膜下血腫1件、脳震盪11件が報告されている。2021年には、脳震盪と併発した脳挫傷1件、脳震盪6件が報告されている。2022年には、脳震盪7件、急性硬膜下血腫5件が報告されている。全日本柔道連盟の懸命な安全対策にも関わらず、重篤な頭部外傷が続いていることから、初心者における大外刈による頭部外傷は不可避であるかもしれない。したがって、柔道初心者に対する大外刈の掛け方を改善する必要がある。そこで本研究は、柔道初心者の頭部外傷を防止するための大外刈に代わる大外落を検討することを目的とした。

#### 【方法】

被験者は大学柔道部の男性熟練者10名とした(年齢 $19.9 \pm 0.74$ 歳、身長 $169.8 \pm 2.90$ cm、体重 $73.2 \pm 5.69$ kg、頸部前屈筋力 $13.3 \pm 3.18$ kg、段位 $1.8 \pm 0.42$ 段)。被験者を投げる実験補助者は同柔道部に所属する大外刈の得意な男性熟練者1名とした(年齢20歳、身長174cm、体重81.6kg、初段)。実験補助者はヘッドギアを付けた被験者を一般的な大外刈と柔道の頭部外傷を予防する大外刈に代わる大外落(以下、大外落)でそれぞれ3回マットの上で投げた。その際、加速度計(MVP-RF8-GC, MicroStone社)と慣性式モーションキャプチャ(MVN Analyze, Movella社)で被験者の挙動と頭部角速度を測定した。本研究は、びわこ成蹊スポーツ大学図書・学術委員会学術研究倫理専門委員会承認されたものである(成ス大第17号)。

#### 【結果および考察】

大外落による投げられた者の頭部角加速度( $199.1 \text{ rad/s}^2$ )は一般的な大外刈( $231.1 \text{ rad/s}^2$ )よりも有意に低かった( $p=0.043$ )。これは投げる者が投げられる者の軸足を刈らずに刈り足を畳について相手を捻るように投げていることが原因であると考えられる。

#### 【結論】

本研究の大外落は、大外刈よりも頭部外傷の予防に有効であることが示唆された。

#### 【付記】

本研究は、びわこ成蹊スポーツ大学2022年度研究課題促進助成費および2022年度カシオ科学振興財団第40回研究助成を受けたものである。

#### 【利益相反】

本研究に関して、開示すべき利益相反状態は存在しない。

## IC-2

柔道療育における身体、精神、社会的効果に関する質的研究  
：保護者を対象として

A qualitative study on the physical, mental, and social effects of Judo-therapy  
： Questionnaire for parents of participants

○小崎亮輔（鹿屋体育大学）、棟田雅也（鹿屋体育大学）、佐々木康允（富士大学）、  
小澤雄二（鹿屋体育大学）

OZAKI Ryosuke (National institute of fitness and sports in Kanoya), MUNEDA Masaya (National institute of fitness and sports in Kanoya), SASAKI Yasumasa (Fuji university), OZAWA Yuji (National institute of fitness and sports in Kanoya)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This research conducted a survey targeting parents of children using Judo-therapy in after-school day care. Judo-therapy is a developmental support activity that utilizes judo. The survey was conducted using a free-response questionnaire on Google Forms. The free-response questions were divided into four categories: physical effects, mental effects, social effects, and others. They are based on the study results of Ozaki et, al (2023). The survey was conducted at five after-school day care locations nationwide that offer Judo-therapy. The number of collected questionnaires was 33. The content of the free responses and the analysis results will give on the day of the presentation.

### 【目的】

柔道療育とは、障害を有している又は有する可能性のある小学生から高校生を対象として実施される、柔道を活用した発達支援活動である。そこで本研究では、柔道療育を利用している児童及び生徒の保護者が感じている身体、精神、そして社会的な効果を質的調査から明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

本研究では Google Form を利用した質的調査を実施した。インターネット調査の項目は小崎ら（2023）の結果から浮かび上がった柔道療育の効果（身体、精神、社会）の3つに「その他」を付し、合計4設問とした。回答は自由記述形式とした。2022年9月から10月にかけて、柔道療育を実施している放課後等デイサービスにコンタクトをとり、調査の依頼と説明を実施した結果、全国に点在する放課後等デイサービス5施設が調査協力を了承した。その後、調査協力を得た5ヶ所を利用している児童及び生徒の保護者へインターネット調査のQRコードが配布された。インターネット調査の配布から1ヶ月を回答期限とし、回答を締め切った。以上の一連の本研究は鹿屋体育大学倫理審査委員会の承認を得ている。

### 【結果】

質的なインターネット調査については33名の保護者から回答を回収することができた。柔道療育を利用している児童及び生徒の基本的な属性について、年代は小学1年生から高校2年生の保護者が対象となった。内訳として小学生25名（内、通級指導教室の在籍が6名、特別支援学校の在籍が3名）、中学生6名（内、特別支援学校の在籍が2名）、高校生2名（内、特別支援学校在籍が2名）であった。利用児が有する、またはその可能性のある障害については発達障害が19名（ADHD、ASD等）、知的障害2名、ダウン症が2名、その他が10名であった。柔道療育の効果に関する自由記述の結果については、運動能力の向上や落ち着きのなさの改善、社会生活能力の獲得に関する記述が多くみられた。



## IC-3

### 柔道初心者の頭部外傷を予防する後ろ受け身の効果的な指導法の検討 Effective Methods of Teaching Backward Breakfall to Prevent Head Injuries in Novice Judo Practitioners

生田秀和 (大阪体育大学), 穴田賢二 (石川工業高等専門学校),  
石川美久 (大阪教育大学), 林弘典 (びわこ成蹊スポーツ大学)

Shoda Hidekazu (Osaka University of Health and Sport Sciences), Anata Kenji (National Institute of Technology, Ishikawa College), Ishikawa Yoshihisa (Osaka kyoiku University), Hironori Hayashi (Biwako Seikei Sport College)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study aimed to investigate an effective teaching method of backward breakfall to prevent head injury in novice judo players. The maximum angular head acceleration and the degree of fear of the participants were measured and compared. The results revealed the following. The results suggest that teaching novices to perform backward breakfall at an angle of inclination is expected to improve their skills more than the general method of teaching backward breakfall. The results also suggest that an effective angle of inclination is 20 degrees.

【緒言】柔道の頭部外傷の多くは、受け身の技能の未熟な初心者に発生している。特に、真後ろに投げられる大外刈りで後頭部を打撲し、死亡事故や後遺障害が起きている。初心者と熟練者を対象にした後ろ受け身の研究 (Hayashi et al., 2022, 2023) において、不意な状態と不意でない状態の頭部角加速度を比較した結果、不意な状態における頭部外傷のリスクが高いことが報告されている。つまり、不意な状態を再現し、効果的な後ろ受け身の指導法を検討することが重要であるといえる。そこで本研究は、柔道初心者の頭部外傷を予防する後ろ受け身の効果的な指導法を検討することを目的とした。

【方法】本研究の対象者は、男子大学生柔道初心者 10 名とした。対象者は補助者 2 名が持っている柔道衣の帯を握り、傾斜をつけた板の上で蹲踞の姿勢になって後ろ受け身を行った。その際、補助者 2 名は握っている帯を離すタイミングを対象者に知らせずに帯を離し、不意な状態を再現した。各傾斜角度 (0 度, 20 度, 30 度, 40 度) において、対象者が後ろ受け身を行った際の X 軸まわりの頭部角加速度を評価した (MVP-RF8-GC, MicroStone 社製)。各傾斜角度において、対象者が後ろ受け身を実施するたびに、恐怖度 (1=全く怖くない, 2=少し怖い, 3=怖い, 4=とても怖い, 5=怖くて実施できない) を回答させた。なお、本研究は大阪体育大学研究公正委員会研究倫理審査部会の承認 (22-34) を得て実施された。

【結果】各傾斜角度で後ろ受け身を行った対象者の最大頭部角加速度を比較したところ、傾斜角度 0 度と比較して 20 度, 30 度, 40 度の最大頭部角加速度は有意に高くなった。各傾斜角度における後ろ受け身を行った際の対象者の恐怖度について、傾斜角度 0 度と比較して 20 度の恐怖度と有意な差がないことが明らかとなった。しかし、0 度と比較して 30 度と 40 度の恐怖度は有意に上昇することが明らかとなった。以上のことから、20 度は 0 度よりも負荷が高く、恐怖心は 0 度と変わらないことが明らかとなった。

【結論】本研究における傾斜角度を付けた初心者に後ろ受け身を行わせる指導法は、平地 (0 度) において単独で行う後ろ受け身の指導法よりも技能向上が期待できると考えられる。また、その際の効果的な傾斜角度は 20 度であることが示唆された。

#### 【利益相反】

本研究に関して、開示すべき利益相反状態は存在しない。

# IC-4

## 柔道大内刈りの効果的な掛けの方向

### Effective *Kake* direction for Judo *Ouchigiri*

○石井直人 (秋田工業高等専門学校), 三戸範之 (秋田大学)

Naoto Ishii (National Institute of Technology, Akita College),

Noriyuki Sannohe (Akita University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to examine the effective direction of *Kake* in Judo *Ouchigiri*. The *Kake* direction was classified into three: "diagonally upward," "rearward," and "diagonally downward." One-way ANOVA demonstrated that the "diagonally downward," was the most effective, followed by the "rearward," and the least effective was the "diagonally upward."

【目的】本研究は、柔道大内刈りにおける効果的な掛けの方向について検討することを目的とした。掛けの方向は、「斜め上方向」、「真後ろ方向」および「斜め下方向」の3方向に分類した。3つの掛けの方向の比較によって得られた知見は、柔道熟練者だけでなく柔道初心者や学校教育における柔道授業での大内刈りの練習法・指導法へ示唆を与えるものとする。

#### 【方法】

##### (1) 被験者

被験者は、柔道部所属の大学生17名、すべて柔道歴8年以上の柔道熟練者である。予備調査を行い、被験者全員が対象の投げ技である大内刈りの試技が可能であることを確認した。

##### (2) 掛ける方向の分類

掛ける方向は、掛けの曲面に着目して、「斜め上方向」、「真後ろ方向」および「斜め下方向」に分類する。技を掛ける局面において、引き手および釣り手を保持していることとする。

##### (3) 手続き

体格が近い被験者の組を取り、受け、支えの3人で作り、3人打ち込みで大内刈りの試技を行う。試技は、3方向について各方向1回行う。全ての方向の試技が終了次第取り、受け、支えを交代し全員が全ての役割で試技を行うことにする。試技を行う際には、掛ける方向以外は、普段の3人打ち込みの練習同様に行うこととする。試技後、取り、受け、および支えのいずれも、掛けの効果について質問紙に回答する。

##### (4) 質問紙

質問紙は試技ごとに、取り、受け、および支えが、3つの掛けの方向について、5段階評価で回答した。質問紙における5段階評価は取りが、「(5)とても効果的」、「(4)効果的」、「(3)どちらかといえば効果的」、「(2)あまり効果的でない」、「(1)効果的でない」とした。受けが、「(5)とても効果的に力が伝わっている」、「(4)効果的に力が伝わっている」、「(3)どちらかといえば効果的に力が伝わっている」、「(2)あまり効果的に力が伝わっていない」、「(1)効果的に力が伝わっていない」とした。支えが、「(5)とても効果的」、「(4)効果的」、「(3)どちらかといえば効果的」、「(2)あまり効果的でない」、「(1)効果的でない」とした。

##### (5) 分析

大内刈りの試技において、「斜め上方向」、「真後ろ方向」および「斜め下方向」の掛けの効果について、取り、受け、支えそれぞれの評価得点の平均値の差を比較する。有意差の検定は、分散分析を用いる。

【結果および考察】分散分析の結果、取り、受けおよび支えいずれにおいても、平均の差は有意であった。3方向の効果についてLSD法による多重比較を行い、「斜め下方向」がもっとも効果的、次点が「真後ろ方向」、もっとも効果的でなかったものが「斜め上方向」であった。柔道大内刈りの掛けにおいて、「斜め下方向」に掛けることがもっとも効果的であることが示唆された。

# IP-1

学生柔道選手における競技力と Grade Point Average および知能指数の関係

○高野当（皇學館大学）、大木雅人（皇學館大学）、松田悠佑（皇學館大学）、  
佐藤武尊（皇學館大学）

Takano Ataru (Kogakkan University), Oki Masato (Kogakkan University), Matuda Yusuke  
(Kogakkan University), Sato Takeru (Kogakkan University)

## 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

In the Records of the Grand Historian (Shiki), written over 2,000 years ago by China's Sima Qian (Shiba Sen), he suggested that athletes should aim to improve both their academic and competitive ability simultaneously. This study aimed to consider this idea and clarify the relationship between the academic and competitive abilities of university athletes. The result of our research using academic performance and ability measures suggest no relationship between academic and competitive ability. However, based on other previous studies, we believe that the attitude of trying to improve academic performance can be considered helpful for university athletes to compete more effectively.

【目的】 司馬遷の「史記」から、スポーツ競技者は学力の向上と競技力の向上を目指し、それらを同時に実現する必要があると考えられる。しかし、学力や体力および IQ（知能指数）を含めた相関関係について、小児期を対象として明らかにした研究は散見するものの、大学生を対象とした学力を含む学業成績と、体力と運動能力を含む競技力の関係について言及された研究は見当たらない。そこで本研究では、大学生アスリートを対象として、学力を含む学業成績と体力と運動能力を含む競技力の間を明らかにすることを目的とした。

【方法】 東海学生柔道連盟加盟大学である A 大学の選手 20 名を対象とした。本研究では、学修能力の計測方法として、当該大学内で評価の基準とされている Grade Point Average（以下、GPA）と IQ（知能指数）テストを使用した。GPA については、Google form によるアンケート調査を行い、評価が高い順に順位付けを行い検討に用いた。IQ については、国際 IQ テストを使用して IQ を計測した。この方法により、得られた被験者の IQ を GPA の順位付け同様に、評価が高い順に順位付けを行い、検討に用いた。また、柔道選手の「競技力」について、その選手を知る複数人の専門家が、試合の結果や普段の練習の様子から総合的に判断し、競技力の順位付けを行った。順位付けされた体力を含む競技力と学力を含む学業成績の関係を評価するために、Spearman の順位相関係数 (rs) を求めた。なお、統計学的有意水準は、危険率 5%未満 ( $P < 0.05$ ) とした。

【結果および考察】 大学生アスリートの競技力と GPA および IQ（知能指数）には、有意な相関は認められなかった。ところが、先行研究によると、小児期を対象とした研究では学力と体力に有意な相関が認められている。また、体力水準の高い子どもたちほど、物事に対する意欲や効力感、主体性などが高く、意欲やねばり強さなど脳の活力と密接に関係している。さらに、スポーツ実施の頻度が高く且つ長く実施している子どもは、自己効力感が高いことが明らかにされている。その為、これらの先行研究の内容と本研究の結果を踏まえてみると、単に学業成績が高ければ競技結果もよくなるということではない。本研究の結果から、学業成績を向上させようとする姿勢こそが、大学生アスリートが競技を行う上で求められていると考える。

# IP-2

## OpenPose を活用した投の形の動作評価システムの開発

### Development of Nage no Kata evaluation system with OpenPose

○横山 喬之 (摂南大学), 久保田誠也 (摂南大学), 坂本 道人 (福岡大学)

Takayuki Yokoyama (Setsunan University), Seiya Kubota (Setsunan University),  
Michito Sakamoto (Fukuoka University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study is to compare and analyze the movements of Nage no Kata, Ukiotoshi and Tori between experts and beginners using OpenPose, and to verify whether OpenPose can be used to evaluate Kata competitions in the future. As a result, we were able to confirm that OpenPose is useful for evaluating Kata competition movements. In the future, we will develop a method for locally detecting motions that should be improved, and verify the motions of Uke and other techniques.

#### 【目的】

形競技の練習環境の課題の一つとして、コーチング環境が乏しい点が挙げられる。乱取柔道の練習環境とは違い、形競技の練習環境は個人の練習が中心で形指導者による直接的な指導環境が整っていない。したがって、形競技者は国際柔道連盟形競技評価基準規定(2022)を熟読し文言を理解し、加えて動画共有サービスなどにアップロードされている優秀な選手の演技を参考にして練習を行っている。また、セルフコーチングを行うため、ビデオカメラなどを用いて動画撮影し、振り返りを行う。しかし、多くの形競技者にとって、この方法がコーチング環境の限界であり、このような課題を改善すべく、形指導者がいない環境でもカジュアルにコーチングができることが、今後の形競技の普及発展につながると考える。そこで、本研究では、姿勢推定ライブラリである OpenPose によって検出された体の部位を表すキーポイントを用いて、形競技の熟練者と初心者の動作を比較・分析することで、将来的に OpenPose を形競技の動作評価に活用することが可能であるか検証することを目的とした。

#### 【方法】

本研究では、投の形の「浮落・取」の動作を分析対象とし、形熟練者のペア 1 組と形初心者のペア 3 組による各 2 回ずつの浮落の施技中の様子を正面から撮影した動画像を分析に使用した。分析手法の手順としては、まず OpenPose を用いて動画像からキーポイントを検出し、検出されたキーポイントから一連の動作中の背中や首、腕の傾きなどの指標を算出する。次に、形熟練者と形初心者での各指標の動作中の連続的な変化の類似度を、動的時間伸縮法(Dynamic Time Warping, DTW)の近似手法である fastdtw を用いて算出する。

#### 【結果および考察】

fastdtw を用いて算出した姿勢変化の類似度を比較したところ、形初心者の施技のうち姿勢が悪いものは特に形熟練者の施技との類似度が小さい結果となった。受が投げられている際は、受の動作が速くなるだけでなく、取と受の画像上での重なりが大きくなるため、キーポイントの検出精度が低くなる。そこで、事前学習済みの姿勢推定モデルに対して転移学習を行うことで、キーポイントの検出精度が向上し、受の動作の評価も可能と考えられる。

#### 【結論】

本研究での検証より、形競技の動作評価への OpenPose の有用性を確認することができた。今後は、改善すべき動作を局所的に検出するための手法の開発、受の動作および他の技での動作を対象とした検証を行う。

# IP-3

UK 法から考える勝利達成条件 - 柔道競技の場合 -

Winning conditions considered from the U-K method - In the case of judo -

○内村 直也 (大阪産業大学)・横山 喬之 (摂南大学)・齋藤 正俊 (日本 UK 法・人間理解研究会)・船越 正康 (大阪教育大学名誉教授)・保井 智香子 (立命館大学) ・東山 明子 (大阪商業大学)

Naoya Uchimura (Osaka Sangyo University), Takayuki Yokoyama (Setsunan University), Masatoshi Saito (Nihon U-K method and Society of human understanding), Masayasu Funakoshi (Professor Emeritus, Osaka Kyoiku University), Chikako Yasui (Ritsumeikan University), Akigo Higashiyama (Osaka University Commerce)

## 【PURPOSE AND CONCLUSION】

In the Uchida-Kraepelin test (U-K method), type 8 and type 3 -1 d are common, and the sports world has a similar trend. In the case of judo in particular, not only are there two types by far the most common, but these two types are considered the most suitable for judo. However, considering that curvilinear tendencies are more important than personality types, we decided to focus on curvilinear tendencies and consider the conditions for winning in judo. They found that if the curve showed an upward trend, Olympians were more likely to win medals.

**【目的】** 内田クレペリン検査 (UK 法) では、一般的にも人柄類型で 8 型と 3-1d 型が多く、スポーツ界もそれに準じて同様傾向にある。特に柔道の場合には 2 つの型が多数派を占めるだけでなく、この 2 つの型は柔道適性が高いと考えられるが、人柄類型よりも曲線傾向がより重要であり、心的なエネルギーの発露があとになるほど増加する上昇曲線が意味するラストスパートの強さや粘り強さ、試合を重ねることでパフォーマンスが上がるという勢いの上昇が重要であると考えられる。北京オリンピックにおいては上昇・平坦傾向と下降傾向における戦績の差が顕著に現れており、意欲・勢い・粘りを示す上昇傾向か、冷静・安定を象徴する平坦傾向を示す代表選手 7 名中 6 名がメダルに達している。そこで、曲線傾向に着目して柔道競技の勝利達成条件について考えてみることにした。

**【方法】** 対象データは、オリンピック代表選手、世界選手権代表選手の UK 曲線で、複数枚の検査結果がある場合には人柄類型、最高健康度、最高作業量段階、上昇曲線の順に高いデータを採用した。男女計の総計を基数として出現比の検定を  $2 \times 3 \cdot 2 \times 2$  の  $\chi^2$ -検定で確認する。2 数間比の検定には臨界比 (CR) を用い、有意水準は 5% 以下を取り上げる。オリンピック代表選手は、オリンピックのみ出場、オリンピックと世界選手権の両方に出場した選手とした。世界選手権代表選手は世界選手権のみに出場した選手とした。

**【結果と考察】** 曲線傾向：オリンピック代表選手の曲線傾向は、戦績 (1 位, 2.3 位, 他)  $\times$  曲線傾向 (上昇, 平坦・下降) において、上昇傾向は 1 位 16 名 (34.0%), 2.3 位 22 名 (46.8%), 他群 9 名 (19.1%) で、平坦・下降傾向は 1 位 14 名 (35.9%), 2.3 位 9 名 (23.1%), 他 16 名 (41.0%) であった。戦績 (メダル群, 他)  $\times$  曲線傾向 (上昇, 平坦・下降) において上昇傾向のメダル群は 38 名 (80.9%), メダルなし群 9 名 (19.1%), 平坦・下降傾向のメダル群は 23 名 (59.0%), メダルなし群は 16 名 (41.0%) で、いずれも差が認められ、上昇傾向にメダルなしが少なく、平坦・下降傾向はメダルを逃したものが多かった。オリンピック代表は、曲線傾向が上昇傾向を示した場合、安定してメダルを獲得する率が高いと考えられる。勝利を達成するためには十分な体力の蓄積と持ち堪えるに十分なスキルの熟練、さらには自分のパフォーマンスに対する自信や信頼が不可欠であり、エネルギー系やスキルのトレーニングに加えて、選手を認め、受け入れ、自己効力感を育む指導者の態度が求められると思われる。

## IP-4

大学男子柔道選手におけるジャンプ能力と競技力の関係  
—片脚4方向ジャンプとバーティカルジャンプに着目して—

○石橋剛士, 高橋恭平 (熊本学園大学)  
小澤雄二 (鹿屋体育大学), 大川康隆 (東海大学)

Goshi Ishibashi, Kyohei Takahashi (Kumamoto Gakuen University), Yuji Ozawa (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya), Yasutaka Ohkawa (Tokai University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to clarify the relationship between jumping ability and performance in university male judo athletes. Twenty-eight subjects performed three types of vertical jumps using a mat switch twice at maximum effort. We also measured the number of single-leg four-way jumps for 20 seconds. As a result, the high-performance group had a significantly higher vertical jump than the normal group. On the other hand, no significant difference was observed in single-leg four-way jumps.

### 【目的】

柔道の競技特性において、相手の重心を崩して担ぐ、刈る、跳ねるなどにより相手を投げる、または技を掛けられた際にバランスを保ちながら耐える局面が多く見られる。このような局面では下肢の運動能力や体重支持能力が重要視され、柔道選手の体力測定項目としてこれらを評価できる「片脚4方向ジャンプ」が採用されている。しかしながら、その他、陸上競技などで用いられているマットスイッチを用いた一般的な下肢運動能力の測定は、男子柔道選手においてほとんど実施されていない。そこで本研究では、男子柔道選手を対象に、片脚4方向ジャンプとマットスイッチを用いたバーティカルジャンプについて、競技力との関係を明らかにし、比較検討することを目的とした。

### 【方法】

対象者は、K大学柔道部に所属する男子28名(年齢:19.1±0.8歳、身長:170.5±4.9cm、体重:84.7±19.2kg)とした。片脚4方向ジャンプは、有賀ら(2005)の方法に基づき、20秒間前後左右の各エリアへ順に片脚で着地した回数を、休憩を挟み両脚とも測定した。またバーティカルジャンプにおいては、マットスイッチを用いてマット上にて上肢および下肢の反動を使って跳ぶ垂直跳、手を腰に添えた状態から下肢の反動のみで跳ぶカウンタームーブメントジャンプ、手を腰に添えた状態でスクワットポジションをとり、反動を使わずに跳ぶスクワットジャンプを2回ずつ行い、それぞれ跳躍高の高い方を採用した。統計処理について、県大会3位入賞以上の実績を持つ対象者(以下:県3位群)とそれ以外の対象者(以下:一般群)における片脚4方向ジャンプおよびバーティカルジャンプの比較には、対応のないt検定を用いた。また、重量区別(軽量級・中量級・重量級)毎に比較するため、一元配置分散分析を行った。なお有意水準は5%未満とした。

### 【結果および考察】

片脚4方向ジャンプの回数において、県3位群と一般群間に有意差は認められなかった。しかし重量区別に検証したところ、重量級は軸足・非軸足とも軽・中量級より有意に低かった。一方バーティカルジャンプの跳躍高では、すべてのジャンプ種において、県3位群が有意に高く、また重量級は軽量級より有意に低かった。このことから競技レベルとの関係性を測るジャンプ測定としては、マットスイッチによるバーティカルジャンプの測定も合わせて実施することが有効であると考えられる。

## IP-5

血流制限下におけるトレーニングが血中酸素飽和度に与える影響  
-大学男子柔道選手を対象として-

The effects of resistance training with vascular occlusion on oxygen saturation in college male judo players

○大川康隆（東海大学），塚田真希（東海大学），宮崎誠司（東海大学），  
石橋剛士（熊本学園大学），小澤雄二（鹿屋体育大学）

Yasutaka Ohkawa (Tokai University), Maki Tsukada (Tokai University),  
Seiji Miyazaki (Tokai University), Goshi Ishibashi (Kumamoto Gakuen University),  
Yuji Ozawa (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study investigated the effects of resistance training with vascular occlusion on oxygen saturation. There is significant difference between the control group and experimental group in oxygen saturation. It is assumed that the training with vascular occlusion causes the lower oxygen saturation locally in limbs, which may lead to the mechanism of vascular occlusion training.

### 【目的】

いわゆる高地トレーニングは、低圧・低酸素環境下においてトレーニングを行うことで身体はより多くの酸素を取り込もうとし、最大酸素摂取量の増加につながると考えられている。この利点から、常圧低酸素環境でトレーニングを行う研究も進められている。加圧トレーニングは四肢の基部を専用のベルトで圧迫し行うトレーニングであり局所的には低酸素環境にあることが考えられる。本研究では血流制限下におけるトレーニングが全身的・局所的な血中酸素飽和度に与える影響を検討することである。

### 【方法】

被験者は大学男子柔道選手 10 名とする。①加圧時の測定では加圧ベルトを装着し、②非加圧時の測定では加圧ベルトを装着しない。③血中酸素飽和度の全身性と局所性を比較するために片腕のみ加圧ベルトを装着する。アームカールを 15kg のバーベルを用いて行う。1 セット 30 回のトレーニングを 30 秒間のインターバルを挟んだのち 3 セット行う。この 30 秒間のインターバルにて血中酸素飽和度（NISSEI : B0-650 を使用）を測定する。

### 【結果および考察】

加圧群と非加圧群の血中酸素飽和度において有意な差が見られた。また、片腕を加圧した状態で行ったトレーニングでは加圧ベルトを装着した腕と非装着の腕の血中酸素飽和度において有意な差が見られた。このことから低酸素化は全身性のものではなく局所的なものであり、この局所的な低酸素化が血流制限トレーニングの効果の一端を担っていると考えられる。

### 【結論】

血流制限下におけるトレーニングでは血中酸素飽和度が有意に低下することが明らかになった。これは全身性の低酸素状況とは異なり、加圧ベルトを装着した先、つまり四肢の局所的な現象であることが示唆された。

# IP-6

## 世代別による柔道の必要性の調査

The necessity and the understanding of judo by generation

○吉田岳（東海大学大学院），位高駿夫（東海大学・株ハイクラス），中矢力（東海大学），熊代佑輔（国際武道大学），井上康生（東海大学），上水研一朗（東海大学）

Gaku Yoshida(Tokai University), Toshio Itaka(Tokai University, Highclass Inc.), Riki Nakaya(Tokai University), Yusuke Kumashiro(International Budo University), Kosei Inoue (Tokai University), Kenichiro Agemizu(Tokai University),

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to clarify the necessity and the understanding of judo by generation. In conclusion, it became clear that it is needed by society not only for competitive sports but also for education, courtesy, physical fitness, self-defense, and injury prevention. It is required to educate judo from various perspectives.

【目的】柔道は2021年の東京五輪において計11個のメダルを獲得し、日本全体のスポーツ競技の中では世界トップクラスの競技力を有していることが窺える。1964年よりオリンピックの正式種目となって海外への普及が進んできたが、その反面、競技人口は年々減少傾向にある。この要因には、柔道自体に怪我の危険性や苦しいなどの否定的なイメージがあることが考えられる。柔道のイメージについて中学生や高校生、保護者など対象者を絞った報告はあるが、高齢者など幅広い世代での調査は行われていない。そこで本研究は、世代別の柔道に対する必要性や考え方を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者はオンライン上も含めた依頼で同意が得られた男女521名とした。対象者は、男性328名、女性193名であり、10歳代が69名、20歳代が155名、30歳代が60名、40歳代が81名、50歳代が86名、60歳以上が70名であった。また、対象者の柔道経験については、経験者が221名、未経験者が300名であった。質問内容は自分自身が柔道を行った際に習得したいこと、柔道が必要であると感じる分野、柔道が社会に対して貢献できると感じる分野の3項目を中心に自作した質問紙を用いて、匿名の調査を行った。得られた結果は性、年代別に分析し、カイ二乗検定などで比較を行った。

【結果および考察】柔道を競技スポーツとして必要とした人の割合は79.9%であったのに対し、護身術として必要な人が88.3%、教育・礼儀として必要な人が84.7%であった。また、柔道に対して人格形成を求めている人の割合は80.3%であったのに対し、体力向上を求める人が89.6%、怪我予防を求める人と不審者対策を求める人がどちらも69.9%であった。実際に行われている柔道の多くは競技スポーツとして実施されているが、それ以外の目的を狙った柔道の実施がより多く求められることが明らかとなった。これらの知見を活用しながら、柔道の新たな普及方法の検討を多方面から実施していくことも有効な普及啓発に繋がる可能性があることが示唆された。

【結論】柔道が競技スポーツとして発展する一方で、依然として現代社会においても、教育・礼儀、体力向上、護身術、怪我予防などの面でも必要とされていることが明らかとなった。今後の柔道の実施および普及啓発などを考える際には、多側面からのアプローチによって必要性を教授していくことが必要である可能性が示唆された。



## IP-7

### デジタル技術を用いた武道史研究：『校友会雑誌』の計量テキスト分析 The study of Budō history using digital techniques: metrological text analysis of "alumni association magazine"

○佐藤皓也（順天堂大学）

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study is to accumulate the results of martial arts history research using digital technology, and to quantitatively clarify the contents of "alumni association magazine" in Daichi High School under the old education system in order to quantitatively view martial arts history. The significance of this study is that it quantifies the changes in various elements (techniques and ideas) in martial arts history before and after the war, and that it can be easily communicated to people outside the field.

#### 【目的】

デジタル人文学という呼称はすでに広く用いられ、最近ではデジタル技術を用いることで人文科学を探究できる新たな可能性が国内外で論じられている（京都大学，2021）。その一つには、計量テキスト分析（コンピュータを使った統計的なテキスト分析技術）が挙げられる。この分析の利点はテキストを捉える正確性や説明の客観性が向上することにある。一方、課題の一つは従来のテキスト化ソフトにおいて、旧字旧仮名や特殊なレイアウトを含む史料の文字をほぼ認識できないことにあった。したがって、これまでは手動でテキスト化を実行し、膨大な時間がかかっていた。それは日本の人文科学において、史料の計量テキスト分析に関する有効性は指摘されているものの（濱野，2020；片瀬，2021）、そうした研究が少ない要因の一つとなっている。

史料のテキスト認識は近代史料のテキスト化ソフト（以下，FROG AI-OCR）が2022年に開発されたことで解決に向かっている。これによって近代史料でも容易に計量テキスト分析が可能となった。こうしたデジタル技術の導入は上記の利点や新たな研究視点を提供するために必要不可欠である。そこで発表者は、デジタル技術を用いることで武道史をさらに深く、客観的に探究できる可能性や研究の限界を2023年の論文（佐藤皓也，2023）で発表した。

当論文では、旧制第三高等学校（以下，三高）の『嶽水會雑誌』を分析した。その結果、計量テキスト分析では三高を取り扱った先行研究（佐藤皓也，2021）の成果を担保し、競技性と伝統性という先行研究に基づく性質（榎本鐘司，1988）を可視化することに成功した。次の課題は、剣道の競技スポーツ化を推進した三高とは取り組みが異なる旧制第一高等学校（以下，一高）の『校友会雑誌』を分析することにある。

以上から、本研究はデジタル技術を用いた武道史研究の成果を蓄積し、武道史を量的に俯瞰するために、一高における『校友会雑誌』の内容を量的に明らかにすることを目的とする。本研究の意義は、戦前・戦後の武道史における諸要素（技術や考え方）の変化を定量化し、専門外の人々にもよりわかりやすく伝えられるという点にある。

#### 【方法】

「KH Coder3.Beta.03i」（樋口，2020；以下，KH Coderと略す）を使用し、『校友会雑誌』の剣道部記事を分析する。当ソフトの標準搭載辞書IPADICは「近代文語Unidic」（小木曾ほか，2013）という近代文語用の辞書プログラムに取り替えた。分析の準備としては、まず剣道部記事をFROG AI-OCRを使ってテキスト化し、Excelに挿入した。なお、FROG AI-OCRが誤認した文字や認識しなかった文字は提携企業と連携し、目視で修正した。

【結果および考察】と【結論】については、学会当日に発表する。

# IP-8

## 一刀流中西派の組太刀遣方について

—中西派聞書と思われる資料から—

The Kunitachi Method of Ittoryu Nakanishi-ha Kenjutsu.

○立木幸敏（国際武道大学）

Yukitoshi Tatsugi (International Budo University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

In this study of the Itto-ryu document "Kendo Hisho" from the Tokyo National Museum collection, which is considered to be the kunitachi method taught by Tsuguhiro Nakanishi (3rd generation), It is thought that the "Omote 50-hon" method changed during the course of the transmission of "Ono-ha Itto-ryu" to "Nakanishi-ha Itto-ryu" and "Hokushin Itto-ryu".

【目的】筆者（2021, 2022）は一刀流中西家について奥平中津藩士であることとその家格を明らかにした。また一刀流小野家の伝書である春風館文庫<sup>吉田 2007</sup>に小野家4代・忠一から同日に発行された奥平大膳大夫（奥平昌成）宛、中西忠太宛本目録の控えがあることを報告した。しかし当時の中西家の一刀流組太刀の遣方（仕様）についての資料は今まで見当たらなかった。本研究では今回発見された東京国立博物館に収蔵されている『剣道秘書』に掲載されている一刀流組太刀が中西家の遣方であることについての検討を行った。

【方法】東京国立博物館収蔵の一刀流文献『剣道秘書』、鈴鹿家文書ならびに日本武道大系に掲載されている「北辰一刀流組遣様口伝書」、津軽家の『剣術組遣形覚書』<sup>吉田 2007</sup>等について比較検討した。

【結果および考察】『剣道秘書』は徳川宗敬氏より寄贈された綴本である。一刀流の組太刀表五十本の遣方が「一刀流兵法組数目録兼遣方辨書口伝」として“一ツ勝”から掲載されており、術伝の継承を小野忠明、忠常、忠於、忠方、中西子定、子武、子啓、子正との記述がある。また組太刀の仕様の最後に「右一刀流剣術遣方本師子啓先生口伝・・・」とある。一方「北辰一刀流組遣様口伝書」には「以上北辰一刀流、剣術の組太刀にして、小野派一刀流の組太刀より出たるもの也。我師元祖、千葉成政君少し直したる処ありて、北辰一刀流組太刀とする也」とあり、中西派の遣方を参考として記されている。参考として記されている伝書が『中西派聞書』とされており、内容は『剣道秘書』に書かれていることと同一である。ただし『剣道秘書』は“地生の相下段”までで中略となっているが『北辰一刀流組遣様口伝書』にはその後の組太刀（巻返、発、順彼）があり『中西派聞書』からの引用で「中西派では」と解説が行われている。よって『剣道秘書』は『中西派聞書』からの抜粋であると考えられる。また吉田（2007）は小野派一刀流の伝承過程における根本技法である「切落」の変遷について言及しているが、本研究では表五十本中の二本目の組太刀に変化が見られた。

【結論】東京国立博物館収蔵の一刀流文献『剣道秘書』が中西家三代・子啓の教えによる組太刀遣方（『中西派聞書』）であると考えられる。

また津軽家の『剣術組遣形覚書』にある組太刀二本目は小野家九代・業雄に教えを請けた山岡鉄舟の無刀流（『史談無刀流』）の遣方に類似点が見られるが、『剣道秘書』『北辰一刀流組遣様口伝書』では遣い方に変化が見られる。よって、小野家の一刀流・表五十本は中西家が、さらに北辰一刀流では千葉周作成政が工夫するなど、表五十本の遣方が変化していったと考えられる。

## ⅡA-1

### 小学校低学年児を対象とした嘉納柔道思想教育の試み

#### The Case report on Kano Judo Philosophy Education for Early Elementary School Children

○稲川郁子（日本体育大学）

INAGAWA Ikuko (Nippon Sport Science University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This presentation is a case report: in first year, I taught the rules of judo based on the Kano Judo philosophy, and in second year, I had the opportunity to teach the Kano Judo philosophy itself to early elementary school children. I confirmed that by adapting the development to the children's level of understanding, I could convey the Kano Judo philosophy to the children.

【目的】柔道の修行においては、技の習得だけではなく嘉納思想の理解が重要となるため、多くの指導者は初学者に対し精力善用・自他共栄に代表される嘉納の思想を説く。発表者は、2019年と2020年の2年にわたり、A県B地区の小学校低学年の児童を対象としたイベントにおいて、1年目は柔道の理念に基づくルール（審判規定）の説明を、2年目は嘉納柔道思想そのものを伝達する機会を得た。本発表は本事例の報告を目的とする。

【方法】文献的考察と事例検討を行った。

【結果】1) 2019年度 親子柔道教室「柔道のルールを学ぼう」（児童41名、大人30名参加）

A県B地区柔道協会からの依頼を受け、小学校低学年の児童に対し柔道のルールの説明を行った。これは、今後試合に出場するようになる児童と、柔道のルールを知らない保護者に需要があったことから企画された。講習は、ルールを教えるだけでなく、児童に「なぜこの行為が禁止されているのか」を考えさせる構成とし、資料もその意図を踏まえ作成した。これにより、個々の禁止事項を説明するのではなく、「頑張りが足りないこと」、「ずるいこと」、「危ないこと」、さらに「柔道精神に反すること」に対し反則が与えられることを、演劇の要素を交えつつ説明した。高校柔道部員に罰則行為を演じさせ、「どちらの頑張りが足りないですか」などの問いかけ、また「首が折れてしまったら体が動かなくなったり、命を落としたりすることがあります。この姿勢は危ないですね」などの声かけをし、考えさせることで理解を促した。保護者からも「なぜその行為が反則となるのかわからない禁止事項があったが、理由や背景が理解できた」などの声があった。

2) 2020年度 親子柔道教室「嘉納治五郎先生について学ぼう」（児童25名、大人16名参加）

前年度のルール講習会を受け、嘉納思想についてより深く学ばせたいとの要望から企画された。嘉納の生い立ちや功績、柔道の理念を、児童にもわかるような内容でプレゼンテーションソフトを用い説明し、随所にクイズを交え確認するものとした。なお、クイズは道場を走り回ったり、児童どうしがペアで移動したりするなど、身体運動を伴うよう配慮した。

【考察および結論】初年度の取り組みより、低学年児にも嘉納思想の一定の理解は可能であると考え、翌年は嘉納思想に特化した展開とした。クイズ形式で仲間と遊びながら学び、楽しい記憶と併せて知識が定着するような学習の達成を目指した。なぜ丁寧に礼をしなければいけないのか、なぜ柔道衣をきちんと着用すべきのかなど、嘉納思想に結びつけて理解させることで行動の変化が期待できるものと思われたが、効果測定は今後の課題である。小学校低学年児に対する嘉納思想教育は、理解力に合わせた展開とすることで成立し、勝負偏重、勝利至上主義と批判され全国大会が中止されるなどした少年柔道においては、いま一度立ち返る価値がある取り組みであると思われた。

## IIA-2

精力善用国民体育の教育的効果とは何か

The effect of Seiryoku-Zenyo-Kokumin-Taiiku especially for educational aspect.

○大辻新恭（関西大学大学院）

Ohtsuji Niina (Kansai University Graduate School)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This research focuses on martial arts, especially judo, in order to resolve the confusion in the education field of junior high school health and physical education. I will consider what kind of educational effect Kano expected from visible "national sports" at the time. The conclusion will be left to the presentation materials on the day.

### 【はじめに】

平成 20（2008）年の学習指導要領の改訂により、中学校の保健体育科で武道の必修化が導入された。その際、「武道の特性や成り立ち、伝統的な考え方、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする」と書かれていたものの、その「伝統的な考え方」については十分な議論が尽くされておらず、何を教えるべきかについて教育現場の混乱は現在も解消されていない。

柔道はその創始者である嘉納治五郎によって、大正 11（1922）年に講道館文化会を創設され、「精力善用、自他共栄」を掲げ、日本の伝統のなかでも良い部分を受け継ごうとしてきた点で本研究の課題にとって見習うべきところが大きい。

### 【目的】

本研究は、前述の混乱を解消するために、武道のなかでも特に柔道に焦点を当て、1920 年代から 1930 年代にかけて「精力善用、自他共栄」を掲げて嘉納が提唱した「国民体育」に着目した。明治 15（1882）年に柔道が誕生してから約 40 年後に「精力善用国民体育」が考案された背景には何があったのか、体操とも柔道の形とも見える「国民体育」に嘉納は当時どのような教育的効果を期待していたのかを考察する。

### 【方法】

「国民体育」の原型となった「擬働体操」を嘉納が提唱した明治 42（1909）年から「国民体育」の普及が唱えられた 1930 年代にかけて「体操」や「国民体育」について嘉納が書いた文章を調べ、さらにその嘉納の主張に対して行われた周囲の反応を検証する。

### 【考察】

現段階において、明治 27（1894）年に日清戦争、その 10 年後の明治 37（1904）年に日露戦争を経験した中で、嘉納が明治 42（1909）年から IOC 委員を務め、同年に国民体育の原型となる擬働体操を考案したことは関連が深いと考える。また、嘉納が IOC 委員となった後、国際平和運動でもあるオリンピックが第一次世界大戦（1914～1918）により中断したこともあった。昭和 5（1930）年に「精力善用国民体育」が発表された背景には、当時の歴史状況がある。一般大衆に体育を普及させるため考案されたとされる「国民体育」は「柔の理」を含む「精力最善活用」が原理となっているが、この原理にどのような教育的効果があると嘉納が考えていたかを、同じ時期に始まった「ラジオ体操」等と比較しつつ、資料に基づき考察する。

### 【結論】

当日の発表資料にゆだねる。

## IIA-3

### 明治期前半における武道教育に関する研究 —教育雑誌に着目して—

A study on education of budo at the first half of Meiji era: A focus on educational journals.

○幕田 熙 (筑波大学大学院), 酒井利信 (筑波大学), 大石純子 (筑波大学)

Satoru MAKUTA (graduate school, University of Tsukuba), Toshinobu SAKAI (University of Tsukuba), Junko OHISHI (University of Tsukuba)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose is to elucidate the aspect of education of budo in the first half of Meiji era, especially focusing on educational journals published until 1894. Budo was treated as worthless in physical activity but worthy in spiritual training as patriotism and loyalty to the emperor. I confirmed that some educators asserted the value of "bushido thought" earlier than some previous research already mentioned.

#### 【背景及び目的】

武道は日本古来の身体運動文化として長い歴史の中で発展を遂げており、現代では教育材としての効果が認められている。武道が教育に位置づく大きな契機となった明治期に関して先学においては、明治 27 年以降に日清戦争でナショナリズムが高揚し武道が復活の兆しをみせたことが示されてきたが、明治 27 年以前の武道教育については公的文書や刊行された書籍等の文献史料不足のため詳細な考察はなされてこなかった。しかし明治期における武道教育の様相を詳細に明らかにするためには、明治 27 年以前からいかなる思想が形成されてきたのかを紐解く必要があるといえる。そこで本研究では教育的な組織の活動や思想について多く発信を行っていた教育雑誌に着目する。そこには当時の武道教育に関する論説が多くみられるが、先学においてそれらの記述を網羅的に考察したものはない。よって本研究では、明治 27 年以前に発行された教育雑誌にみられる武道に関する論説から、明治 27 年以前の武道教育の様相を明らかにすることを目的とする。

#### 【方法及び史料】

本研究は、教育雑誌にみられる武道に関する記述を網羅的にあたり、それらを「身体活動」「精神修養」「武士道思想」に分類しつつ考察を行う、いわゆる文献学的手法をとる。具体的な文献資料としては、それぞれ明治 27 年以前に発行された、文部省「文部省雑誌」(明治 6 年)、汎愛社「教育新誌」(明治 10 年)、大日本教育會「大日本教育會雑誌」(明治 16 年)、東京教育社「教育報知」(明治 18 年)、開発社「教育時論」(明治 18 年)を用いる。

#### 【結果及び考察】

「身体活動」としての武道は、伊沢修二らが軍事的実力に過ぎないものとしており、また大日本私立衛生會が全身の発育を目指す上では不十分とする見解を示していたことから、教育材としては不適切なものともみられていたことが窺えた。しかし「精神修養」の面では伊沢らによって愛国心や忠誠心を涵養するうえで武道による教育的効果が認められていた。その背景には明治 15 年に下賜された軍人勅諭による影響が示唆された。また「武士道思想」に関しては、加藤弘之や重野安繹らによって先学が指摘するよりも比較的早い段階から、教育界における武士道の必要性が語られていたことが明らかになった。

その他詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

## II A-4

### 大和から伝わる琉球の鎌術(鎌之手 カマヌティー)

Ryukyu sickle technigue handed down&nbsp;from Yamato 「Japan」

#### ○ 早坂義文

古武道研究会

YoshifumiHAYASAKA

Kobudou research society

#### 【Conclusion】

It is a false theory that peasants fought with sickles and hoes to counter the bad government during the unification of the three mountains during the Ryukyu Warring States period. This technique was perfected in the early modern period, and the technique of defending yourself from capture and attacking and defending with two sickles was devised from the martial arts of Yamato, passed down to Matayoshi Shinpo, and he correctly transmitted it to me

#### 【序文】

私は、半世紀以上に渡って沖縄の武術を修行してきました。「琉球の鎌術」を知ったのは47年前、祝嶺制猷先生の「空手鍛錬三ヶ月」の著書でした。この本の影響で、沖縄に行き、鎌術を習得しました。しかし、この武術は、比較的、新しいもので、琉球三山戦国時代まで、遡ることは出来ない近代のものであることが研究の結果、判明しました。

#### 【琉球の農耕器の歴史】

琉球国は、四方を海で囲まれた、南国です。その豊かな自然の中には多くの食材が豊富に有りました。そのため、近代農耕器が18世紀半ばまで伝わらず、蔡温さいおん（具志頭親方くしちやんうまーかたにぶんしやく若）が農作業の手引き書『農務帳』（1734年）を發布し、さらに、稲刈り鎌、鋏などの鉄製品を大和から輸入し、農民に与えられそれまでは、木製の鋏に刃の部分だけつけた粗末な物でありました。

また、鎌は、手で握れるほどの柄に菜切包丁の様な刃がついた物であり、これを使って、一揆や合戦に出るのは難しいと思料されます。

#### 【大和から伝わった武技】

##### 1 薩摩藩の武術

琉球王朝は1609年から徳川政権の下、薩摩藩が統治しました。しかし、それ以前から薩摩とは交易が有り、相互に往来がありました。その中で、示現流、薩摩天流、楊心流などの武術交流があり、琉球の侍が免許を得たり、また、免許を発行していました。

##### 2 琉球の鎌術(鎌の手)

琉球の鎌術は、蔡温の改革でこの道具が琉球に入り、侍の中から天流に伝わる小太刀、鎖鎌などの技法を琉球の環境にあうように工夫して、完成されたものであります。

その技法の特徴は、大和の武術にはない投網破り、投網外し、二枚切、掛け切、鎌刃後部打ち、飛鎌など、琉球独特の武術です。

#### 【結論】

琉球三山戦国時代の三山統一時に、悪政を正すため、百姓が鎌、鋏などを取り戦ったというのは、虚偽説です。この道具は、近世になって伝わり、武術が完成し、安慶名直方から学んだ又吉真光が実子眞豊に伝え、保存継承し、私に伝えてくれました。

## IIA-5

### 安政年間における槍術修行記録について

長尾 進

Susumu NAGAO (Meiji University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

Study on the records of a so-jutsu (spearmanship) fighter's training travel in Kyushu and western Japan in the 6th year of Ansei period(1859). One point worth noting is : Already at that time, the terms *shushin* (chief referee) and *fukushin* (assistant referee) were used in so-jutsu matches.

#### 【目的】

天保期（1830 - 44）の他流試合解禁以降、剣術や槍術の廻国修行は各藩「遊学」の一環として藩命を帯びて行われるようになり、ルートや受け入れ態勢もシステマティックになっていった。槍術の廻国修行についての研究は村林正美氏をはじめとして、近年では森本邦生氏による天保期～幕末期における多くの槍術廻国記録や受け入れ側の記録が明らかにされ、この頃の槍術修行の実態が明らかになってきている。演者がここで紹介するのは、安政年間（1854 - 60）における槍術修行記録（「武術試合覚」上・下2冊）であり、これを分析することにより、近世後期における槍術試合の実態をより明らかにするための一史料を提供しようとするものである。

#### 【方法】

本史料は明治大学特定個人研究費の支援を得て、東京都世田谷区の有限会社キヌタ文庫より2023年3月に演者が入手し、演者研究室において保管しているもので、縦13cm・横18cmの和綴じ冊子で、上・下2冊のいわゆる芳名録スタイルのものである。現在全文を翻刻途上であるが、虫食い箇所やくずしの難解な部分もあり、今回の発表では、まずは本史料のアウトラインと特徴的な事項を中心に発表する。

#### 【結果および考察】

「上」の巻頭見開き部分1ページ目には、「筑後柳川藩 大島流 加藤善右衛門」とあり、同2ページ目には、「肥前平戸藩 古新流鎗術 市山恒八門人 土肥亦助」とあるが、そのあと4ページ目からあらたに、「南筑柳（川）藩 大島流 加藤善右衛門 門人」として加藤善蔵以下門人名が他藩からの入門者も含めて6ページにわたって記され、その最後には、「安政六歳未九月五日 於加藤導場試技」とある。また、加藤善右衛門の氏名の右肩に小さく「主審」、市山恒八の右肩に同じく「福（副）審」と書かれている。字体や墨の色からして、あとで書き加えられたものと推察されるが、この時代に「主審・副審」の用語が使用されていたとすれば興味深い。これらから総合的に判断すると、筑後柳川藩の槍術師範で全国的にも著名であった大島流・加藤善右衛門の道場で、肥前平戸藩・古新流の槍術師範である市山恒八が弟子（土肥亦助1名か複数かは不明であるが）を伴って試合（試技）を行い、加藤が主審、市山が副審を務めたと推察される。また、本史料の所持者は、土肥亦助であった可能性が高い。

#### 【結論】

前出・森本氏の研究には、「大島流槍術加藤善右衛門『旅弟子姓名録』についての考察」（2008年）があるが、同姓名録からは安政3年（1856）正月までに加藤に入門していた他藩門人の姓名がわかる。今回紹介する「武術試合覚」とは3年の開きがあるが、これらを比較してみると、安政期の九州・西日本地方における槍術廻国修行の実態がより明らかにできると考える。

## IIA-6

### 島村右馬丞の日記にみる幕末土佐藩の居合について

Regarding Iai in Tosa Domain during the Late Edo Period, from the diary of Shimamura Umanojo

○森本邦生（貫汪館）

Kunio MORIMOTO (Kan ou-kan)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study is to clarify how Iai was practiced in the Tosa Domain during the late Tokugawa period by deciphering the diary of Shimamura Umanojo. SHIMOMURA was a disciple of Seisaku Tsubouchi, but he also had a close relationship with both the teacher of his teacher, Kyuzo Yamakawa, and Emori Shimomura, a brother disciple of his teacher. It seems that they had a clan connection. However, the iemoto system was not adopted, and Umanojo Shimamura himself issued densho.

In the diary, Shimamura describes day long practice sessions as well as practice sessions in which the Kata are repeated a thousand times.

【目的】土佐藩では長谷川流と称される居合が盛んに稽古されており現代まで続いている。土佐藩の居合については『教授館總宰餘業記録』にみる土佐藩の居合について（2016）で教授館総裁により見分された居合の演武および土佐藩の長谷川流の起源について言及した。土佐藩郷士である島村右馬丞（1816-1870）は居合、砲術、柔術、軍楽、軍太鼓の修業をし、居合は文政9年（1826）坪内長順の門人となり無雙神傳英信流（通称長谷川流）を修行、文久2年（1862）に居合取立役に任じられている。また子の善馬（細川義昌）も慶応3年に居合取立役に任じられた。本研究は島村右馬丞の日記から土佐藩の幕末の居合についてその一部を明らかにしようとするものである。

【方法】島村右馬丞は天保5年（1834）から明治2年（1869）まで日記を書き残しており、ほぼすべての年の日記が細川家から高知市立自由民権記念館に寄託されている。江戸時代の日記から居合に関する記述を抜き出し、細川家の他の史料も用いながら検討していく。

【結果および考察】島村右馬丞は師の坪内清作長順と師弟関係にあるだけでなく坪内の師である山川久蔵からも指導を受けている。また、山川の門人下村衛守とも交流をもっていた。坪内・山川・下村は上士である。身分にかかわらず一門という意識があったように感じられる。家元制はとっておらず、右馬丞自身も伝書を発行している。形の稽古にあたっては終日稽古が行われたり、千本抜が行われた記録があることから形を繰り返し数多く抜く稽古も行われていたようである。右馬丞が居合取立役を御免となつてからは子の善馬が役を与えられるよう門人たちが藩に働きかけている。

【結論】土佐藩では居合の稽古にあたって一門という意識がみられたが、職制上の指南役、導役、取立役という区分には身分が関係していたように思われる。どのような役割があったのかは今後の課題である。稽古は形を繰り返し数多く抜くことも大切にされたようであるが、「木太刀（太刀打）」「詰合」といった剣術的な形の稽古を行っているにもかかわらず、袋撓や防具を用いた稽古は行われていない。「浜稽古」「川原居合調練」も行われており、西洋式の調練との関係が考えられるものの、その実態はわからず今後の課題である。



一般  
IIA-1  
S  
IIA-12



## IIA-7

### 大日本武徳会の武道教育に関する研究 —設立当初に着目して—

A Study of Martial Arts Education in the Dainippon Butokukai  
-Focusing on the Early Years of the Society-

○筒井雄大 (国際武道大学), 酒井利信 (筑波大学), 大石純子 (筑波大学),

Yudai Tsutsui (International Budo University),  
Toshinobu Sakai (University of Tsukuba), Junko Ohishi (University of Tsukuba),

**【PURPOSE AND CONCLUSIONS】** This study will clarify how “bujutsu education” was formed in the Dainippon Butokukai at the time of its establishment. By analyzing the circumstance of bujutsu’s positioning and pecking order in the Butokukai during the same period, it is apparent that Responding to “youth” began to be more important. In addition, it is thought that the “youth”, mainly school students and students, were positioned as an important target of the “bujutsu education” advocated by the Butokukai, and that various projects were developed for them.

**【研究の背景及び目的】** 元来戦いの技術として成熟してきた武道がなぜ、現代において「人を育てる」運動文化として存在するのかについては、武術の存在価値を国民の教育に求めた近代武道の動きを中心として研究が進められてきた。その中でも、武術を近代教育へと位置付けた大日本武徳会の活動は注目に値する。そこで、本研究では先学において提示されてきた武徳会関係史料を中心に、特に日清戦争終戦から間もない設立当初の武徳会を対象とし、武徳会の「武術教育」がいかに形成されたのかについて明らかにする。

**【先行研究と問題の所在】** 設立当初の武徳会における特筆すべき点として挙げられるのが、「現今實用ニ適スル者」として武術を位置づけ、「軍事の実用性を最大の価値基準」として武術の序列化を行ったことである。しかし、この点については軍事的側面にのみ注目され、その背景について詳細な分析は行われてこなかった。また、同時期の武徳会は青年大演武会を行うなど、武術奨励を行う対象として「青年」を位置づけていくが、「青年」という概念は明治初期に誕生し、時代によって変化したことが先学において指摘されている。しかし、「青年」が武徳会にとってどのような存在であったのかについては分析の対象とはされてこなかった。

**【研究方法】** 本研究では、武徳会設立から日露戦争終戦直後までを研究対象とし、先行研究で主として用いられてきた『日出新聞 (京都日出新聞)』に加え、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』を中心に分析を行う。また、明治期の教育社会の状況を把握しつつ、武徳会にとって「青年」がどのような存在であったのかについても考察を行う。

**【結果および考察】** 本研究では、特に「武術教育」の必要性を主張し始めた設立当初の武徳会について、その対象として「青年」が位置づけられていくことに着目し分析を行った。その結果、「現今實用ニ適スル者」として武術を位置づけ、序列化を行う 1898 (明治 31) 年までの経緯において、「青年」への対応がかなり重要視されはじめることが窺え、武徳会が主張する武術の「実用性」にも、それに関連した内容が散見された。このことから、武徳会における「青年」への武術奨励を重要視する動きはこの辺りから始まったと言える。その後、1899 (明治 32) 年には武徳会商議員であった渡辺昇が中心となり青年大演武会が開催され、「武術教育」の対象として「青年」への武術奨励が本格的に進められていく様子が窺えた。

## IIA-8

### 剣道の竹刀操作に関する史的考察

#### A Historical Study on How to Operate a Shinai in Kendo

○坂本太一（中部学院大学）、古澤伸晃（日本体育大学）  
新里知佳野（日本体育大学）、大井理緒（環太平洋大学）

Taichi Sakamoto (Chubu Gakuin University), Nobuaki Furusawa (Nippon Sports Science University), Chikano Shinzato (Nippon Sports Science University), Rio Ohi (International Pacific University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study focuses on Hidezo Mitsuhashi's kendo textbooks. It aims to illustrate the relation among the shape of his shinai in existence, his descriptions on the normal shape of a shinai, and the history of techniques concerning how to operate a shinai such as how to hold it, and how to swing it up and down.

#### 【目的】

近代スポーツ史をより深く理解するためには、用具がどのような変遷をたどって現在に至ったのかを明らかにすることが重要なテーマの一つで（堀田弘司、1999）、技術の時代的意味を理解する技術観を追求したうえで、スポーツ技術史を展開することが期待されている（岸野雄三、1972）。

剣道は、竹刀を媒介として、打つ・突く・かわすという技術的特性を持ち、竹刀を操作する人間の動きが竹刀によって表現されている（村山輝志、國分国友、1976）。そして、使用する竹刀は時代背景や規則等と関連しながら長さや重さを変化させ、その形状の違いが往々にして新しい技術や戦術を生み出してきた（坂本太一、2014）。つまり、竹刀の操作法を歴史的にひも解いていくためには、書籍に記された身体の遣い方と併せて竹刀にも焦点をあてて検討を行う必要がある。

竹刀操作に関する史的研究は、三橋秀三（以下、三橋と略記する）が旧蔵する2本の竹刀（昭和40年代に使用）の分析と三橋が戦後に書き下ろした剣道書を対象に考察がなされている。研究によれば、柄の長さが約36cmの竹刀を用いて、間合いに応じ両手の間隔を合理的に使い分ける方法が明らかにされている（坂本太一、2017）。しかしながら、本稿は三橋が戦後に書き下ろした指導書と2本の竹刀に限定した論説に留まったもので、時代を通してその変遷が吟味されたわけではない。

そこで、本研究は、三橋秀三が著した剣道指導書を中心に、竹刀操作（＝竹刀の持ち方、振り上げ、振り下ろし動作）の技術的変遷及び竹刀に関する記述と竹刀の現物史料に着目して検討を行うことを目的とする。

#### 【考察】

戦時中、三橋によって刊行された指導書では、竹刀を持つ「右手は鐙元より僅かに離して眞上より持ち、左手は…中略…櫛頭を僅かに餘して握る」とあり、現在の指導書に明記されている「左手の小指を柄頭いっぱいにかけて」握る持ち方との相違が確認できた。また「柄は一般に長すぎるやうであるが、柄の長いものを使用すると、正しい斬突動作が出来ない」という記述から、柄の長さや技術の関係性についても言及されていることが分かる。加えて、蒐集した竹刀を計測した結果、戦後の竹刀は、柄の長さが約36cmで節取りの位置も類似したものが多かった。その他、竹刀操作及び竹刀の詳細は大会時に発表する。

# ⅡA-9

## 大日本武徳会武徳祭大演武会に関する新史料の発見とその意義： 剣道史研究の視点から

The Discovery and Significance of New Source Materials on the Dai-Nippon Butokukai  
Butokusai Dai-Enbukai: From the Perspective of Historical Research on Kendo

○矢野 裕介 (愛知淑徳大学)

Yusuke Yano, Ph.D. (Aichi Shukutoku University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This presentation clarifies the contents of the reports prepared by the Dai-Nippon Butokukai, including the first Butokusai Dai-Enbukai (1895) and discusses the significance of these reports. These newly discovered reports will contribute to a fuller understanding of the Butokusai Dai-Enbukai that has not been fully explained so far.

#### 1. はじめに

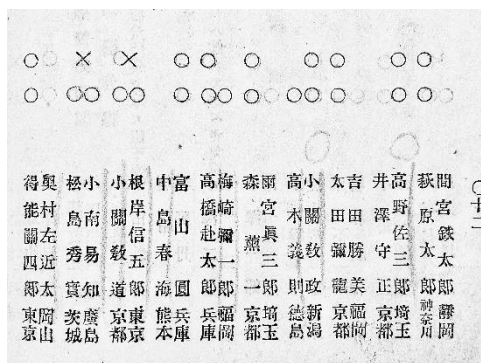
2023年に第119回大会を迎えた全日本剣道演武大会(旧京都大会)のはじまりは、1895年に大日本武徳会によって開催された第一回武徳祭大演武会に求められる。しかし、全日本剣道連盟(2004)の調査研究(『通算100回大会記念出版 全日本剣道演武大会のあゆみ―明治期にみる武徳祭大演武会―』)によれば、「第一回大演武会以降、明治期における組合せ番組の所在が、〔第七回(明治三十五年)と一引用者注〕第八回(明治三十六年)を除いて確認できず」と指摘されているように、そのほとんどが「所在未詳」のため、当該期における武徳祭大演武会の様相はいまだ詳らかではない。

そうした中、筆者は大日本武徳会(1895~1906)によって作成された『第一回武徳祭報告』、『第二回武徳祭報告』、『第三回武徳祭報告』、『大日本武徳會第四回武徳祭記事』(第一報、第二報、第三報、第四報)、『第五回武徳祭報告』、『第八回武徳祭報告』、『第十回武徳祭報告』を新たに発見した(いずれも筆者蔵)。

そこで本研究発表では、上述した新史料の内容を報告するとともに、これら史料のもつ意義について剣道史研究の視点から検討することを目的とする。

#### 2. 新史料の内容(詳細については大会時に発表する)

大日本武徳会(1895)は設立当初から「毎年一回武徳殿ニ於テ武徳祭ヲ舉行シ神靈ヲ慰メ奉ル事」、「武徳祭ニハ全國ノ武道家ヲ會シ武道ヲ講演シ以テ武徳ヲ永遠ニ傳フル事」などを会の目的として掲げていたように(『大日本武徳會設立趣旨及規則』)、武徳祭と大演武会を一体として実施していった。そのため、先に触れた新史料の内容も、武徳祭と大演武会の詳細が報告されているが、とりわけ後者においては、「劍術」をはじめとする扱われた種目の参加者すべての人名とその組合せ(勝敗結果を含む)、審判員、および試合・審判方法などが記載されている。



『第一回武徳祭報告』にみる  
「劍術(第一號組合)」の勝敗結果(一部)

#### 3. 結論

今回新たに発見した史料の内容は、これまで不明とされてきた初期の大日本武徳会武徳祭大演武会の全容解明に資することはもとより、近代剣道の実体の究明につながるものとなる。

## IIA-10

### 武道実践者の礼儀に関する研究

－大学剣道及び柔道部員と一般学生の挨拶に関するアンケート調査より－

A Study on the Courtesy of Martial Arts Practitioners  
-A Questionnaire Survey on Greetings among Kendo and Judo Clubs,  
and General Students of the University-

○中山佳子（早稲田大学スポーツビジネス研究所），  
射手矢岬（早稲田大学スポーツ科学学術院），  
米山哲弘（早稲田大学スポーツ科学研究科），金明燮（早稲田大学スポーツ科学研究科）

Yoshiko Nakayama (Waseda University), Misaki Iteya (Waseda University),  
Tetsuhiro Yoneyama (Waseda University), Myungsub Kim (Waseda University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study aimed to determine whether martial arts practitioners are polite. A greeting questionnaire was administered to university kendo and judo club members and to general students. The results showed that kendo and judo club members actively greeted those in higher positions or others. In conclusion, it was revealed that martial arts practitioners were polite.

【目的】本研究では、礼儀正しい行動の一つとして「挨拶」を取り上げ、武道実践者と一般人の挨拶の傾向を比較調査することで、武道の経験を通して礼儀の習得が図られているかを明らかにする。

#### 【方法】

- 1) 調査対象者：大学剣道部員 269 人、大学柔道部員 355 人、学校の授業以外で柔道を 1 年以上習ったことのない一般学生 140 人、合計 764 人
- 2) アンケート調査期間：2021 年 10 月～2023 年 6 月
- 3) データ収集方法：Google フォームを使用したインターネット調査
- 4) 質問方法：4 件法を使用し、「自分からいつもする」「自分からだいたいする」「自分からすることはあまりしないが、されたら返す」「挨拶をすることはほとんどない」という選択肢を設けた。
- 5) 質問内容：「職場」、「学びの場」、「大学内」、「道場/スポーツの場」の 4 場面に分け、それぞれの場面について、挨拶の対象者を「立場が上」、「立場が対等」、「立場が下」、「距離のある他者」と設定した。

【結果】武道実践者である大学剣道・柔道部員と、一般学生のいずれも挨拶を積極的にしているという回答が 9 割以上であった質問項目は、対象が「職場の上司」「道場/スポーツの場の指導者」「道場/スポーツの場の先輩」であった。一方、大学剣道・柔道部員が一般学生と比べ、積極的に挨拶をする割合が高かったのは、「大学の先生」及び「距離のある他者」の質問項目の中の「清掃従事者」「守衛・受付」「道場/スポーツの場の知り合いでない来客」であった。

【結論】挨拶を礼儀正しい行動の一つと捉えた場合、立場が上の人や、距離があっても関係のある人に対して挨拶を武道実践者は積極的にしていることから、武道実践者は武道を通して礼儀の習得が図られていると言える。

## IIA-11

### 弓術流派日置流印西派「秘歌」について About the Heki-ryu Inzai school's "Hika"

黒須 憲(東北学院大学)  
Ken Kurosu (Tohoku Gakuin University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The 12 "Hika" transmitted from Heki Danjo mainly describe the mental attitude of Kyudo training. As a theme "Syuitumuteki" 2, "Jiman" 3, "Momijikasane".

【目的】弓術流派日置流印西派で伝えられている「秘歌」の内容について考察する。

【方法】目録などその他、文献資料による考察。

【結果および考察】武道の伝授形態として技術、理合、心構え、教訓、戒めなどに関する内容を、57577の36文字で表現し、歌として伝える事がある。弓術流派日置流印西派の免許皆伝は「目録、無言歌、神道巻」とされている。印西は、「神道巻」一卷と「目録」と「秘歌」を合わせ一卷とし、「無言歌」一卷を追加して、全三巻を印西派の印可とした。「秘歌」は修行の心構えについて述べられ、日置弾正より伝えられた。「無言歌」は指導者としての注意事項について述べられ、印西によって作られた。秘歌は十二首伝えられているが、今回は最初の一首を紹介する。解釈は浦上栄の解説を参考7に、目録の研究結果を踏まえ、新たな解釈を紹介する。秘歌全体には共通のテーマがあり、目録で述べられている、「主一無適」、「紅葉重」、「自慢」が表現されている。



1、「分のものただ一とかたに見定めてはなつ矢先にあたらぬはなし」分の物とは物を分けてみるという事で、例えて言えば鳥の多く群れているのを射るにもその内これと心をこめていなければ中らぬという事。的前に於いては常に的の星の真中を射るつもりで見定めて射よという事である。(浦上栄) .狙いに関する技術的な教えで、目録内の「雪の目付」や「矢切」が意味する一点を狙う教えである。と簡単に説明している。分のものとは、部分という意味で、目当て物がどんな形であろうと大きさであろうと中心の一点を狙うことに集中し、多少失敗したとしての周辺には中る、中らずといえども遠からず。を意味している。また、戦場において甲冑を着ている敵を射る場合兜や胴などで防御されている部分を狙っても意味がない、目、喉、腋の下、脚の付け根など効果的な部分を狙わなければいけない。との意味である。分別という意味で、分とは身分、分際、分限、分をわかまえるなどの分で、戦場にては大勢の中の大將とか指揮する者を良く見分け射なければならない。一心決定した矢先にあたらぬはなしとの意味である。目録第三十七條 槍脇射様の事に(飛具、長兵、騎兵、旗本、聴馬、殿、雑兵他、矢頃の事口傳深し、常に人を見る心得は悪しきなり)、とあり、兵隊にも身分があり役割がある。また甲冑具足を着ると普段見慣れている人間でも解らなくなってしまい判断がつかなくなる。鎧の緘、毛色にて判断し、混雑の時には敵味方しっかりと見分けて射倒すべし。と述べている。箆には上差し矢と言って雁股や透かしのある平根の矢を二本必ず差している。皮膚や筋肉、腱や血管を射切る事が目的で、大將や確実に射止めなければいけない敵に使う矢である。雑兵を射る征矢で大將が射られた場合、流矢に中ったと言う。分流、流派という意味で吉田流から分派した印西派を意味する。日置流は吉田家を中心に分派活動がおこなわれ、印西派は嫡流との確執もあったが庶流にも拘わらず、徳川將軍家の当流として採用された。その印西派を中心に修行する大切さを主張しているのではないだろうか。後段の中らぬはなしは非常に強い表現で、意味は的中、上達、出世、成功、外すことは無い、必ず中るということである。目録第五十四條、主一無適の射、一を主として他に主とすべきものなし。秘歌の1番目に掲げ、印西派に邁進するように戒めているのではないだろうか。

## IIA-12

### 弓道稽古着の普及と定着に関する考察

#### A STUDY ON THE POPULARIZATION AND ESTABLISHMENT OF KYUDO WEAR

○松尾牧則（筑波大学）

Makinori Matsuo (University of Tsukuba)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study aims to reveal how the modern kyudogi came to be widely approved today. After the National Sports Festival in 1955, the momentum to establish a standard uniform for kyudo grew remarkably. Thus, the Japan Kyudo Federation began to promote kyudogi and hakama as such official attires. The promotion by the Japan Kyudo Federation, which was considered to be a major factor in the eventual outcome, continued for nearly 15 years, until white kyudogi and black hakama finally became the standard uniforms for kyudo around 1970.

【目的】現代弓道の稽古及び競技におけるの服装は、弓道衣・袴・帯・足袋の着用が当然のものとなっている。弓道実施の服装として弓道衣が一般的になった、その経緯を明らかにするため、服装に関する弓道界での論議や日本弓道連盟（のち全日本弓道連盟）の対応について文献記述を確認し、弓道の稽古着の普及と定着について考察する。

【方法】日本弓道連盟（全日本弓道連盟）発行の機関誌『弓道』を中心として服装に関する記述を確認する。弓道における服装について、当時の様相と服装を定めることに関する論議を確認する。日本弓道連盟は弓道の服装に関してどのように対応したのかについて明らかにする。記述を確認する機関誌『弓道』は、昭和28年11月号（42号）～昭和45年12月号（247号）までを対象とした。

【結果及び考察】戦後は、スポーツの要素を強調しながら再スタートした弓道であったが、弓道を行う際のユニフォーム的なものの必要性が説かれた。賛否と共に、和装か洋装かについても、時代の流れと伝統との狭間で両方の意見があった。普段の稽古や大会において紋付き・袴は、時代にそぐわないのではないかと考えられた。日本弓道連盟は「弓道衣」の斡旋を始めたが、『弓道』昭和30年12月号掲載の斡旋広告記事が初見である。弓道衣斡旋広告は価格改定の報告を経ながら、『弓道』昭和43年8月号まで不定期に継続された。『弓道』昭和45年11月号の記事にて弓道衣の斡旋を中止することが告げられた。高校弓道における服装には経済的負担軽減の配慮がなされたが、一般弓道では弓道衣・袴の弓道着は広く普及していった。結果、弓道衣は弓具店でも扱うようになったこともあり、全日本弓道連盟で斡旋する必要がなくなったものと考えられる。昭和36年の第12回全日本弓道大会、また昭和36年の全国理事会、地連会長会議、評議員会での議題、報告等を通じて、全日本弓道連盟は弓道衣の着用を推進することを加速させていった。以後、次第に一般弓道では白弓道衣、高校弓道では白シャツにズボンまたはスカートという服装が弓道実施の定番となっていった。

【結論】昭和30年の国体後、弓道における標準的な服装として日本弓道連盟による弓道衣・袴の斡旋が始まった。弓道衣・袴の斡旋は、昭和45年頃まで約15年にわたり継続された。白弓道衣・黒袴の着装が弓道の標準的な服装として定着していったのは日本弓道連盟の斡旋が大きく関わり、昭和31年～昭和45年頃までに定着したと結論づけることができる。そこには、受け入れられるための状況が弓道界にあり、その上に連盟による斡旋があったことが、弓道の標準的な衣装としての「白弓道衣・黒袴」が定着した要因として大きいといえる。弓道衣の「白」、袴の「黒」については、標準的な服装としての制定・普及には、特別な意味はなかったが、普及とともに、「白」に清潔感、すがすがしさを想起されることに意味を持たせ、「黒」とのコントラストも含め、弓道の象徴的な着装として定着していった。

## II B-1

### 剣道試合の Time-motion 分析 : 簡便ゲーム分析における移動測定の信頼性の検証 Time-Motion Analysis of Kendo Matches: Verifying the Reliability of Movement Measurement in Simple Match Analysis

○川井良介 (日本大学文理学部), 廣野準一 (信州大学), 奥村基生 (東京学芸大学)  
Ryosuke KAWAI (Nihon University, College of Humanities and Sciences),  
Junichi HIRONO (Shinshu University), Motoki OKUMURA (Tokyo Gakugei University)

**【PURPOSE AND CONCLUSIONS】** We focus on movement in kendo matches and aim to devise a simple and quantitative kendo match analysis method that is not affected by examiners' knowledge and ability. As a first step, this study's purpose was to examine the measurement reliability of individual kendo players' movement trajectories.

**【目的】** これまでに剣道試合を研究対象とし、定量的な観点から検討を加えた研究が多く報告されている。その多くは試合中に展開された攻防や有効打突、発現した技等について検討を加えるため、剣道の専門的な知識が必要不可欠である。また、試合分析を行った後に提示されるデータは検者の能力に依存する部分があるため、正確かつ再現性の高い分析が難しいといった問題を有する。一方、他競技では、競技者の試合中の移動に着目して傷害発生やパフォーマンスの評価に役立てられている (M. Hodun et al. 2016)。剣道でも移動軌跡に着目した研究が数件ほど報告されているが (巽ら, 1992, 1995, 1996, 2001), これらの先行研究で用いられた分析には力学等の専門的な知識が必要となる。近年、移動軌跡を簡便に分析可能とするゲーム分析ソフトウェアが開発され、様々な場面で活用されており (WJ Kraak et al. 2011), 我々は剣道の試合における移動に着目し、検者の知識や能力に左右されない簡便で定量的な剣道の試合分析方法を考案することを目指している。そのための第一歩として本研究では、剣道競技者個人の移動軌跡の測定信頼性に関する検討を行うことを目的とした。

**【方法】** 検者は剣道経験を有する男性 2 名と有さない男性 1 名の計 3 名とした。すべての検者は、本研究までにゲーム分析の経験が無く、分析前に実施方法と操作確認をし、15 分程度の練習後に測定を実施した。本研究では、第 68 回全日本剣道選手権大会の決勝と準決勝 2 試合の合計 3 試合における試合者 (6 名) を分析対象とした。分析にはゲーム分析ソフトウェア (ダートフィッシュ・ソフトウェア Pro S) を使用した。すべての検者は、試合者の移動軌跡について、2 種類の位置 (試合者の両足の midpoint または頭頂部) を追跡し、得られた軌跡から総移動距離と平均移動速度を算出した (追跡をする際、1 コマを 0.2 秒に設定し、分析を実施)。なお、検者が分析を行う試合や試合者の順番は検者によって入れ替えた。以上の結果を基に、①異なる検者が両足の midpoint を追跡した際の検者間信頼性、②異なる検者が頭頂部を追跡した際の検者間信頼性、③それぞれの検者が異なる部位を追跡した際の結果の信頼性について級内相関係数 (ICC) を用いて、有意水準を 5% 未満とし、比較検討を行った。

**【結果および考察】** 本研究の分析対象とした試合時間は  $312.3 \pm 93.7$  秒であった。①②の結果については現在分析中のため、大会当日に発表する。検討の結果、③の場合には、すべての検者において総移動距離と平均移動速度の両方で、十分な信頼性は担保されなかった。分析対象とする部位によっては結果が異なり、頭頂部を追跡した場合には両足の midpoint に比べて、約 2~3 倍大きな総移動距離や平均速度の値を示した。したがって、追跡する部位によって得られる結果が大きく異なるため、試合映像を用いて移動分析を行う際には、研究目的に適した追跡部位を慎重に設定する必要がある。

## ⅡB-2

### 韓国における剣道競技の映像判定システムについて Video Judging System for Kendo in Korea

○金明燮（早稲田大学スポーツ科学研究科），射手矢 岬（早稲田大学スポーツ科学学術院）

Myungsub Kim(Waseda University), Misaki Iteya(Waseda University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to investigate the awareness and clarify the actual conditions of the implementation of video judgment. A total of 150 people were surveyed, and 112 games were analyzed for video analysis. As a result, both students and referees expressed positive opinions, and the video judgment was used 33 times (29.5%) out of 112 games, of which 16 times (48.4%) the judgment was overturned.

#### 【目的】

スポーツ界には映像判定システム(以下;映像判定)が存在するが、剣道では、唯一韓国が誤審の減少、公平性の確保及び審判の資質向上を目的として使用している。映像判定が導入されたことによって、肯定的な意見が現れ、適用範囲を拡大していくことで、今後の剣道競技の発展のきっかけとなることを期待しており(HU et al. ,2022)、大韓剣道連盟は、主導的な役割を取り、早急に世界選手権大会にも映像判定が導入されることを望んでいる(大韓剣道連盟 HP)。

しかし、韓国剣道の映像判定導入の実態はあまり知られていない。これらを調査することは、今後競技化して行く中で、剣道においても映像判定導入が検討される際に役立つ研究と考える。

そこで本研究は、韓国剣道の映像判定導入による意識調査と導入実態を明らかにすることを目的とする。

#### 【方法】

- 1) アンケート調査：韓国の大学剣道部員 98 名、審判員 52 名を対象とし、Google フォームを使用したインターネット調査を実施した。質問内容は、「映像判定におけるメリット・デメリット」「世界剣道への導入」に関する項目であった。回答形式は、「強くそう思う」「そう思う」「どちらでも良い」「思わない」「あまり思わない」とし、それぞれに対する自由回答も設けた。
- 2) 映像分析：映像判定が利用された 2022 年の 112 試合を分析対象とし、試合データは大韓剣道連盟公式サイトで公開されている試合映像を用いた。分析項目は、有効打突と認められた件数、認められず取り消された件数を打突部位ごとにカウントした。

#### 【結果および考察】

アンケート調査では、学生においては、映像判定導入に関して「メリット」と答えた学生が 74.5% であり、世界大会への導入に対しては「強くそう思う」「そう思う」の回答が 90.8% であった。審判員においては、映像判定導入に関して「メリット」が 44.2%、「メリット・デメリットの両方」が 46.2% であり、世界大会への導入では、「強くそう思う」「そう思う」の回答が 55.8% であった。

映像分析では、映像判定が使われたのは 33 回(29.5%) であり、有効打突数は、面が 8 本、小手が 4 本、胴が 4 本、突きが 1 本であり、有効取り消し数は 16 回で、面が 13 本、小手が 2 本、胴が 1 本、突きが 0 本であった。映像判定が用いられた試合の内、約 48.4% の判定が覆った。

#### 【結論】

- 1) 意識調査では、映像判定導入に対して学生は、肯定的な意見が 8 割を占めており、審判員で、「メリット」が 44.2%、「メリット・デメリットの両方」が 46.2% ずつ示された。
- 2) 導入実態では、112 試合中の内 33 回(29.5%) 映像判定が使われ、その内 16 回(48.4%) の判定が覆った。



## II B-3

### ゴールデンスコア導入後の全日本柔道選手権大会の競技分析

三宅 恵介 (中京大学), 早川 太啓 (中京大学)  
佐藤 武尊 (皇學館大学), 横山 喬之 (摂南大学)

Keisuke Miyake (Chukyo University), Hiroaki Hayakawa (Chukyo University),  
Takeru Sato (Kogakkan University), Takayuki Yokoyama (Setsunan University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to analyze in the All-Japan Judo Championships to identify the characteristics of matches decided by Golden Scores. It was found that matches decided by Golden Scores in the All-Japan Judo Championships were characterized by many matches from the quarterfinal to the final rounds, and many of the wins by penalty scores.

【目的】全日本柔道選手権大会 (以下「全日本選手権」) は、伝統的に講道館柔道試合審判規定で行われていたが、2011年大会から国際柔道連盟試合審判規定が用いられ、2017年大会からはゴールデンスコア (以下「GS」) が導入された。本研究では GS 導入後の全日本選手権の競技分析を行い、全日本選手権のデータベースを作成しながら、GS 決着の試合の特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】研究対象は、試合時間が4分間になった2018年から2023年の全日本選手権6大会252試合とした。全日本柔道連盟のホームページで公開された全日本選手権の公式結果から、決着時間 (本戦 or GS), ラウンド (1回戦から3回戦 or 準々決勝戦から決勝戦), 勝利方法 (技スコア or 罰則スコア), 勝利スコア獲得技 (投技68本 or 固技32本) を一試合ごとに記録し集計した。その後、決着時間とラウンド, 勝利方法, 勝利スコア獲得技の間で $\chi^2$ 検定と残差分析を行った。統計処理の有意性は、危険率5%で判定した。

【結果および考察】決着時間は、本戦が52.0%、GSが48.0%であった。勝利方法は、技スコアが73.0%、罰則スコアが27.0%であった。勝利スコア獲得技は、「内股」が13.6%、「大外刈」が8.2%、「横四方固」が6.5%、「背負投」が5.4%、「払腰」が4.9%の順に多く、分類別では「足技」が46.2%、「手技」が15.2%、「抑込技」が15.2%、「腰技」が8.7%、「横捨身技」が5.4%の順に多かった。なお、決着時間とラウンドの間には有意な関係が認められ ( $\chi^2=5.4$ ,  $df=1$ ,  $p<0.05$ ), 本戦の1回戦から3回戦 (89.3%) とGSの準々決勝戦から決勝戦 (22.3%) が有意に多く、本戦の準々決勝戦から決勝戦 (10.7%) とGSの1回戦から3回戦 (77.7%) が有意に少なかったことから、GS決着の試合は、準々決勝戦から決勝戦の試合に多いと考えられる。また、決着時間と勝利方法の間にも有意な関係が認められ ( $\chi^2=56.5$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ), 本戦の技スコア (93.1%) とGSの罰則スコア (48.8%) が有意に多く、本戦の罰則スコア (6.9%) とGSの技スコア (51.2%) が有意に少なかったことから、GS決着の試合は、罰則スコアで勝利する試合に多いと考えられる。一方、決着時間と勝利スコア獲得技の間に有意な関係は認められなかった。

【結論】2018年から2023年の全日本選手権におけるGS決着の試合は、1回戦から3回戦よりも準々決勝戦から決勝戦に多く、技スコアよりも罰則スコアで勝利する特徴があることが明らかになった。

## ⅡB-4

### 大学女子柔道選手における競技力向上のためのコンディショニングサポート ～ウエイトトレーニングに着目して～

Conditioning Support for Improving Competitive Performance in College  
Female Judo Athletes ～Focusing on Weight Training～

○清水伸子, 山本利春, 笠原政志, 森実由樹, 矢崎利加 (国際武道大学), 林田和孝 (東海大学柔道部)

Nobuko SHIMIZU, Toshiharu YAMAMOTO, Masashi KASAHARA, Miyuki MORI, Rika YAZAKI  
(International Budo University), Kazutaka HAYASHIDA (Tokai University Judo Team)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

This study examined whether efforts aimed at solving the problem of "improving the muscle strength per body weight of individual athletes in the upper and lower limbs," which was an issue for improving the competitiveness of the women's judo team at University B, were effective in solving the problem. Although improvement in the maximum lifting weight of each measurement item does not necessarily lead to improvement in competitiveness in judo competitions, it is necessary to improve the maximum muscle strength of the whole body from the viewpoint of prevention of sports trauma and injury, and the effect of conditioning support based on physical fitness measurement is considered to have been observed.

#### 【目的】

本研究では、B 大学女子柔道部の競技力向上に向けた課題である「上肢及び下肢における選手個人の体重当たりの筋力向上」の課題解決を目的として、体力測定を実施し、トレーニングプログラムの作成・実施をする取り組みが課題解決に有効であったかを検討した。

#### 【方法】

対象は B 大学女子柔道選手 13 名 (身長 157.62±5.17cm、体重 62.31±9.39kg) を対象に、2022 年の期間において、年間 2 回 (試合期終了後の 7 月および 12 月) にスクワット、ベンチプレス、デッドリフトの最大挙上重量の測定を実施し、測定結果をもとにトレーニングプログラムを作成・実施した。測定項目は、体重、最大筋力 (ベンチプレス、スクワット、デッドリフトの最大挙上重量) とし、各種目の最大挙上重量 (絶対値) を体重で除して体重値に換算した。

#### 【結果および考察】

ベンチプレスでは、最大挙上重量の絶対値および体重値ともに、中量級と重量級で向上がみられた。スクワットでは、最大挙上重量の絶対値で中量級と重量級で向上がみられ、体重値では軽量級のみ向上がみられた。デッドリフトでは、最大挙上重量の絶対値で全階級において向上がみられ、体重値では軽量級と重量級のみ向上がみられた。柔道競技は階級制の競技であり、試合において階級内での体格 (身長や体重) は重要であるが、相手を投げたり、技を掛けられた際に耐えるなど、最大筋力や筋パワーが求められることを踏まえると、体重あたりの最大挙上重量を上げることが競技力向上には必要不可欠である。このことから、日々の体重コントロールを徹底することは勿論のこと、体重 (階級) に見合った筋力を維持することが必要であると考えられる。また、本研究において競技力向上の評価指標となる 2022 年度の試合結果では、飛躍的な結果向上とはならなかったが、2022 年度以前の競技結果を維持していると言える結果であった。

#### 【結論】

各測定項目の最大挙上重量の向上が必ずしも柔道競技の競技力向上に繋がるとは限らないが、スポーツ外傷・障害予防の観点から考えても全身の最大筋力向上は必要であると考えられ、体力測定に基づいたコンディショニングサポートの効果は見られたと考えられる。

## II B-5

大学柔道競技者の異なる稽古順がもたらす神経内分泌反応  
: テストステロンとオキシトシンからみた精力善用・自他共栄

### Unraveling The Neuroendocrine Dynamics in Collegiate Judo Athletes: The Impact of Practice Sequences on Testosterone and Oxytocin Production

○ 松井 崇、船橋大介、内沢彰子、近藤衣美、下山寛之、  
平岡拓晃、増地克之、岡田弘隆（筑波大学）

Takashi Matsui, Daisuke Funabashi, Akiko Uchizawa, Emi Kondo, Hiroyuki Sagayama,  
Hiroaki Hiraoka, Katsuyuki Masuchi, Hiroataka Okada (University of Tsukuba)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

We delved into the neuroendocrine dynamics, particularly testosterone (T) and oxytocin (OT) levels, in collegiate judo athletes, focusing on the influence of their practice sequences. Our findings highlight the significant impact of judo practice order on neuroendocrine responses in these athletes. Initiating practice with standing techniques increased T levels, predominantly in males, which could amplify individual competitiveness and physical conditioning. Conversely, commencing with grounding techniques elevated OT levels, potentially fostering team cohesion and competitiveness. Our findings underscore the intricate interplay between judo practice sequences and neuroendocrine responses, offering novel insights into optimizing athletic performance and team dynamics.

【背景】人間の闘争心やチームワークは、男性ホルモン・テストステロン(T)や絆ホルモン・オキシトシン(OT)などの神経内分泌反応に大きな影響を受け、その逆もまた然りである。私どもは、昨年、大学柔道競技者の稽古、特に寝技から始める稽古が選手の性別を問わず OT の分泌を促すことから、他者への共感に基づくチームワーク醸成、すなわち「自他共栄効果」をもたらす可能性を報告した(松井ら、2022)。一般的に、OTとTは相反関係にあると考えられるが、柔道の稽古やその順序がもたらす効果は性差を含めて不明である。

【方法】T 大学柔道部所属選手 35 名(男子 24 名、女子 11 名、平均年齢  $19.6 \pm 1.1$  歳)を対象に、内容順の異なる約2時間の稽古を別日に1回ずつ実施してもらった(1回目:立技→寝技、2回目:寝技→立技)。稽古前、前半終了時、後半終了時、稽古終了 30 分後の4時点において唾液を採取した。唾液はすぐに凍結し、後日 T とコルチゾル(CO)の濃度を ELISA 法により定量した。各測定項目について、性別毎に稽古の内容順と時点の 2 要因分散分析を行った( $P < 0.05$ )。

【結果および考察】男子の T 濃度は、立技から始める稽古により上昇したが、寝技から始める稽古では変化しなかった。女子の T は、稽古順によらず変化しなかった。CO 濃度は性別によらず、立技から始める稽古では減少する一方、寝技から始める稽古では変化しなかった。筋コンディショニングや闘争心と関係する T と CO の割合は、立技から始める稽古で性別を問わず上昇し、特に男子でその傾向が強かった。

【結論】大学柔道競技者における稽古の内容順が神経内分泌反応に影響することが初めて明らかになった。立技から始める稽古は、特に男子において、T を通じて個人の闘争心や筋コンディショニングを高める、いわゆる「精力善用効果」を引き出す可能性がある。寝技から始める稽古は、OT を通じたチーム内の絆とチーム外のライバルへの闘争心の醸成に有効かもしれない。

## II B-6

### 柔道練習時の発汗量と水分摂取量の関係

Relationship between sweat and fluid intake during judo practice

○市川龍之介（東海大学大学院），位高駿夫（東海大学・株ハイクラス），  
中矢力（東海大学），熊代佑輔（国際武道大学），井上康生（東海大学），  
上水研一朗（東海大学）

Ryunosuke Ichikawa (Tokai University), Toshio Itaka (Tokai University, Highclass Inc.), Riki Nakaya (Tokai University), Yusuke Kumashiro (International budo University), Kosei Inoue (Tokai University), Kenichiro Agemizu (Tokai University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to clarify the relationship between sweat and fluid intake during judo practice. Subjects were 13 male judo athletes, and body composition measurements and fluid intake were investigated. Although there are large individual differences, the average values of sweating and weight loss were clarified. In the future, it was suggested that an increase in the number of samples was necessary.

【目的】柔道は屋内で実施される競技でありながら、学校における運動時の熱中症発生頻度が高い競技であるとされている。競技特性として、体格により発汗量が変わることが考えられ、水分補給の時間を一律に取ることは最適ではないと思われるが、柔道練習中の水分補給は全員が同じタイミングで行われているケースが多い。運動能力の低下について、発汗量とパフォーマンスとの関連を見た研究では、練習後の体重減少率が2%を上回ると集中力やスキルレベルの低下などの影響が発生するとされており、体重減少をコントロールすることはパフォーマンス維持の観点からも重要である。そこで本研究は、柔道練習時の発汗量と水分摂取量の関係性を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は20から24歳までのT大学男子柔道部の現役選手13名（軽量級：5名・重量級：8名）とした。部活動における練習の前後で体組成（InBody770）の測定と質問紙調査を行った。体組成測定は着衣しない状態で行い、練習前の測定では排便排尿後に実施することを促した。質問紙調査では、乱取り練習の時間と練習中の水分摂取量および摂取内容名を中心に調査した。なお、練習環境の気温と湿度の計測も行った。

【結果および考察】これまでのべ54名の測定および調査を実施した。体重減少量と水分摂取量を合算し発汗量とした結果、平均で2.4Lの発汗量となり、その量の体重比は2.6%であった。また、練習前後での体重減少率は平均1.1%であった。乱取稽古の時間の増加に伴って、発汗量も増加する傾向が確認されたが、個人差が大きいことも明らかとなった。水分摂取量を発汗量で除した水分摂取量の割合の平均値は59.2%であったが、最小値26.4%、最大値が109.0%となり、個人の嗜好性が大きいことも明らかとなった。さらに、個人要因だけでなく、気温や湿度などの環境要因や練習相手などによってばらつきが大きくなることが想定されるため、同一対象者での試行回数を増加させる

【結論】本研究は、柔道選手の練習中の発汗量と水分摂取量の関係性の実態について明らかにすることを目的とした。その結果、平均発汗量とその体重比、水分摂取量等を明らかにすることができた。しかしながら、個人差の影響が明らかとなり、個人差も考慮した傾向をつかむためには、さらなる同一対象者での試行回数を増加させる必要がさらに求められる。

## II C-1

### 「かた」学習を導入した剣道授業の計量テキスト分析による 学習効果の検証と抽出

#### Verification and Extraction of Learning Effect by Quantitative Text Analysis of Kendo Lessons Introduced “Kata” Learning

○菊本智之（常葉大学）

KIKUMOTO Tomoyuki (TOKOHA University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this research is to conduct a quantitative text analysis on the learning effects of classes that introduce kata learning of kendo, verify the effects of kata learning in kendo classes conducted in a limited number of hours, and extract learning content. In the first period, many words related to skills from a personal perspective are used, but from the second period onwards, the effect of acquiring interpersonal non-cognitive skills such as awareness, thinking, and situational judgment is increasing.

#### 【目的】

中学校の保健体育では、平成 20 年 3 月の中学校学習指導要領の改訂で、中学校の 1, 2 年生で「武道」領域の必修が明記された。また平成 29 年 3 月の改訂では、基本的には平成 20 年度改訂の学習指導要領を踏襲する形で改訂が行われ、令和 3 年度からは、現行の学習指導要領が全面的に実施されている。中学校保健体育の武道領域で「剣道」を単元として行う場合、単元に割りあてられる時間数、授業者の専門性、防具を着装した授業内容の難しさなど、今なおその効果的な授業づくり、教材開発には多く課題が残されている。GIGA スクール構想で中学校のほぼ 100%に近い学校に普及したタブレットを活用し、授業教材用に作成した剣道の「かた」学習を導入し、その剣道授業の学習効果について計量テキスト分析を行い、限られた時間数の中で行われる「剣道」の授業における「かた」学習の有効性を検証し、効果的な学習内容について抽出していくことを目的とする。

#### 【方法】

中学校の剣道授業用に作成した「かた」の動画教材を使った学習プログラムを A 県 B 市の C 中学校（公立）の第 1 学年の男子 86 名、2 年生男子 70 名を対象として、令和 4 年 10 月から 11 月にかけて 10 時間の授業実践を行い、授業実施後に毎時間、独自に作成したワークシートを用いて、「自らの技能」と「相手との関係における技能」について自由記述を記入させた。ワークシートから得られたテキストデータを KH Coder 3 を用いて、頻出語の抽出、特徴語の抽出などを行い、KWIC コンコーダンスによる使用語の文脈の確認、共起ネットワークによる分析、対応分析などを行った。

#### 【結果および考察】

第 1 期には、「危ない」「難しい」「できていない」「礼儀」「形」などの個人的（一人称的）な視点からの技能に関する語が頻出しているが、第 2 期以降には、「動きを合わせる（動きが合う）」「息を合わせる（息が合う）」「相手」「仲間」「お互い」「間合」「教え合う」など、意識や思考、状況判断など、対人的（二人称的）な非認知的技能の獲得に有効性が窺える結果となった。また、別のペアの評価や学び合いの授業方法を取り入れたことによる三人称的な思考の高まりについても有効性が認められることが示唆された。

## II C-2

### 中学校保健体育科における武道領域のこれからの可能性について On the future possibilities of BUDO field in junior high school physical education.

○太田順康（大阪教育大学） 金森昭憲（手島西小学校） 石川美久（大阪教育大学）  
由留木俊之（山直中学校）

Ota Yoriyasu(Osaka Kyoiku University) Kanamori Akinori (Teshima Nishi Elementary School)  
Ishikawa Yoshihisa(Osaka Kyoiku University) Yuruki Toshiyuki(Yamadai Junior High School)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

Considering the future possibilities for success of the BUDO field in junior high school physical education class, we investigated how KATA is useful on physical education class in the BUDO field. Aided by the ICT technology, we demonstrated that face-to-face relationship in BUDO is especially significant for the success of proactive, interactive, and deep learning on physical education.

【目的】中学校保健体育科で武道が必修化されてから10年以上が経ち、武道の授業実施も様々に取り組みられている。平成29年に学習指導要領の改訂が告知され、学校での学び方のものが変わり、保健体育科での学習内容・方法も大きく変化している。武道でもこの変化をどのように捉え、どのように対応していくのかが求められている。そこで、今回の改訂のねらいや次代の改訂に向け、どのように取り組みが重要であるのかをこれまでの実践研究をもとに検討していく。

【方法】2020～2022年に0教育大附属中学校で外部指導員（授業協力者）が実施した剣道授業の研究成果を基に、日本武道学会で「中学校武道必修へ「型」の考え方を取り入れた授業づくり」「中学校保健体育科「剣道」授業において「剣道形」導入の可能性について」「剣道形を取り入れた中学校剣道授業実践について ～オンライン授業研究会の実施」を発表してきた。これら一連の実践の総括として、データを統合・分析し、今後の保健体育科での武道領域の授業の可能性について検討した。

【結果および考察】2020年以降、コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響もあり、剣道具の共用が不可、ペアを固定する必要など制約があり、従来のように「剣道具中心の授業」が行なえなかった。そこで「剣道形の導入」「ペア学習の促進」などを積極的に取り入れた。また近年のICT教育促進により、必携となった「iPadの活用」を取り入れた。授業時のアンケート結果から、生徒同士での「師と弟子」の関係による学び合い、息を合わせるなど武道で重要な合気関係や武道用語などの記述が、「形」授業時の振り返りに多く、「形授業で対人性」が意識されていた。また「ペア学習」では、「仲間同士で教え合うことも良いと思う」「友達と教え合いながら学習を進めることは楽しかった」という意見が得られた。iPad活用については、「自分がやっている感覚だけでは自分がどうなっているかわからなかったけれど、iPadを使って動画を撮ることで客観的に自分自身を見ることができ、深い学習になった」という意見が得られ、今回の取り組みは生徒に肯定的に受け入れられていた。

【結論】武道は伝統や文化を学ぶ教材としてはもちろん、武道の対人性は主体的・対話的で深い学びの視点から学ぶ上で適した素材でもある。

本研究は日本学術振興科学研究補助金（基盤研究（C）課題番号\*18K02619 太田順康）の助成を受けたものである

## ⅡC-3

中学校なぎなた授業に関する研究  
—体育教師のなぎなたイメージに焦点をあてて—  
Research on Junior High School Naginata Classes  
-Focusing on the image of the naginata by physical education teachers-

○今浦千信（摂南大学非常勤講師），太田順康（大阪教育大学）

Chinobu Imaura (Setsunan University), Yoriyasu Ota (Osaka Kyoiku University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to compare junior high school physical education teachers' images of naginata before and after class, and to examine the introduction of the class. Significant differences were found in the images of “pleasant,” “clean,” “neat,” and “friendly.”

#### 【目的】

本研究では、中学校体育教師の「なぎなた」認知度や意識を踏まえ、授業実施前後でのイメージに焦点をあてて比較検討し、今後授業採択校の増加を目指した一考察とすることを目的とした。

#### 【方法】

本調査は、2021年度なぎなた授業実施校に協力依頼文書を送付し、協力回答のあった学校を対象に質問紙を郵送した。調査対象者は、なぎなた授業を実施した中学校体育教師計53名（男性26名、女性27名）であり、その内なぎなた経験者が25名、今回初めて授業を行う者が28名であった。イメージ測定には、SD法を用い両端に反対の意味の形容詞を配置し4を中心としてどちらに強いイメージを示すかを7段階で評価させ平均値でイメージプロフィールを作成し授業前後の比較を行った。分析方法は、未記入があったサンプル1を除外し52対で対応のあるt検定を実施した。統計処理は統計解析ソフトIBM SPSS Statistics 29を用いて有意水準を5%未満とした。

#### 【結果および考察】

体育教師のなぎなたの認知度は88.7%、武道種目の中で6番目であった。なぎなた授業を実施すると決めた理由の上位は「地域の外部指導者が来てくれる」58.5%、「生徒にとって初めての種目で新鮮である」52.8%であった。全体の授業前後のイメージでは、「気持ちの良い—気持ちの悪い」「頼もしい—頼りない」「きれいな—きたない」「きちんとした—だらしない」「親しみやすい—親しみにくい」など50項目中15項目に有意差がみとめられた ( $p < .005$ )。なぎなた経験者群では授業前後での有意差がみとめられなかったものの、未経験者群では「気持ちの良い—気持ちの悪い」「頼もしい—頼りない」「きれいな—きたない」「きちんとした—だらしない」「親しみやすい—親しみにくい」など13項目に有意差がみとめられ、授業実践によりイメージに変化があることが示された。

#### 【結論】

授業実践を通して「気持ちの良い」「頼もしい」「きれいな」「きちんとした」「親しみやすい」イメージを「なぎなた」にもつことが示された。「生徒にとって目新しく興味関心を引き出す授業」の実践につなげていくために、授業実施の前後に変化のみとめられたなぎなたのイメージを広報し、なぎなたの認知度を高め、中学校体育授業として採択しやすくなるための取り組みの強化を図ることが今後の課題であると考えられる。

## II C-4

### 剣道における指導法に関する事例研究

～自己観察と他者観察を通して～

#### Case Study on Teaching Methods in Kendo

～Through self-observation and observation of others～

○米山哲弘(早稲田大学大学院スポーツ科学研究科), 中川原知波(早稲田大学大学院スポーツ科学研究科), 中山佳子(早稲田大学スポーツビジネス研究所), 射手矢岬(早稲田大学スポーツ科学学術院)

Tetsuhiro Yoneyama (Waseda University), Chinami Nakagawara (Waseda University),  
Yoshiko Nakayama (Waseda University), Misaki Iteya (Waseda University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study is to clarify the similarities and differences in awareness of self-observation and shared observation of others in kendo, and to examine effective methods of teaching kendo through movement observation. Participants in the experiment were asked to describe the paper medium through self-observation and observation of others. As a result, similarities in awareness were mainly related to bodywork, while the differences in awareness were mainly related to striking technique. Therefore, instructors need to be aware of these differences.

#### 【目的】

指導者は学習者の動きを見抜いて適切な指導を行うことが求められることから指導者は優れた観察能力が重要になると考えられる。マイネル(1981)によれば、運動観察の手法は2つに大別される。自身の運動を主観的に観察する「自己観察」と自己や他者の運動を客観的に観察する「他者観察」である。剣道の研究において運動観察の論文は少なく、自己観察を介入した研究は見当たらない。そこで本研究では剣道において自己観察と他者観察を共有した際の意識の類似点、相違点を明らかにし、運動観察を通じた有効な剣道の指導法について検討する。

#### 【方法】

実験参加者は長野県のK高校の剣道部に所属する学生5名(学習者)、剣道部の顧問1名(指導者)を対象とした。期間は2023年3月20日～4月17日までとした。観察対象は部活動の打突全般とし、約2週間の中で2週間目に6日間の自己観察と他者観察を介入した。データ収集は学習者が自己観察シート、指導者が他者観察シートを記述した。また、共有後、互いが意識の類似していた点・相違していた点を「共有シート」に記述した。分析はソフトウェアの「KHCoder3」を用いて文章を単語に区切って頻出する語を抽出するテキストマイニングの「共起ネットワーク分析」にて行った。

#### 【結果および考察】

学習者と指導者両者のテキストデータより、「意識の類似点」として、体捌き、癖、指導、竹刀操作の4つのカテゴリーに分類され、「意識の相違点」として、打突の技術、体捌き、振り、意識、指導の5つのカテゴリーに分類されることが示された。意識の類似点では主に体捌きに関する単語が抽出されたことから、カテゴリーに含まれる重心や距離の意識は伝わりやすいことが示唆された。一方、意識の相違点では主に打突の技術に関する単語が抽出されたことから、カテゴリーに含まれる強い打突などの打ち方の意識が伝わりづらいことが示唆された。したがって打ち方の意識に留意して指導することが重要であると考えられる。

#### 【結論】

剣道における自己観察と他者観察では打突の技術に関する意識が相違しやすいと考えられる。そのため、指導者は以上の相違点に留意する必要がある。



## II C-5

1年間のなぎなた授業を通して感じた、最も強い「構え」について

The strongest 'Kamae' and reasons, as considered through a year of Naginata classes in university students.

○木村有里 (天道流), 木村恭子 (天道流)

Yuri Kimura (Tendo-ryu), Yasuko Kimura (Tendo-ryu)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to decipher university students' thoughts and understandings from their reasons for their 'strongest Kamae'. This will be a resource used for future teaching and outreach. The results showed that the number one most powerful posture was Hasso-no-kamae, followed by Chudan-no-kamae. The reason for this was that both were aggressive. They also captured the characteristics of each of the different Kamae. It was suggested that understanding the original strengths and characteristics of the naginata through its stance is an effective teaching method for drawing interest in the naginata.

【目的】構えとは、自分を守り相手を攻撃するための基本動作である。なぎなたには、中段・下段・八相・脇・上段の5つの構えが有る。それぞれに左右の構えがあり(新なぎなた教室, 2003)、これらを用いて多様な技を繰り出すことが薙刀の魅力の一つである。成人の年齢において、初めて経験する武道を行う場合、必ずしも試合競技志向の人が入門するとは限らない。薙刀は長物であるので、取り扱いを誤れば身体への負荷が高いが、基本正しく動きを習得することが出来れば、力の弱い女性でも体力の強い者と戦うことが出来る武器である。薙刀愛好者を増やし、稽古継続を狙うにあたり、長物であること、構えや打突部位が多くて変幻自在の動きが出来ること、というような魅力を伝えることが必要と考える。そこで、どのようにして興味を持って楽しく稽古することが出来るかを試行する為、毎回の授業において、実施する実技の理合を講義したうえで実技を行った。1年間30回の授業後に、構えに対する考えや理解を「最も強いと思う構え」への理由から読み解き、今後の指導および魅力発信に用いる資料とすることを目的とする。

【方法】「対象者」東京都内女子大学1年次科目でなぎなたを2020年から2022年までの3年間に受講した194名であった。事前に行った学生の運動歴、なぎなたの認知および経験の有無の調査結果、回答者の98%が初心者かつその半数が当初なぎなたを知らないで受講していた。「調査内容」最も強いと感じる構えおよびその理由(自由記述)。「調査方法」30回の授業最終回においてアンケートを実施した。「分析方法」最も強いと思う構えの理由についての文字テキストデータ(自由記述)は、テキストデータに対して分析を可能にするテキストマイニングツールAIテキストマイニング(株式会社ユーザーローカル)を用いて実行した。

【結果および考察】授業では初回から5つの構えの稽古を始め、打ち返し、しかけ応じ、すね当てを使用した簡易試合およびリズムなぎなたを実践することで、それぞれの構えから繰り出される攻防に親しんだ。授業の終了時に感じた最も強い構えは、八相が最も高く45.8%、次いで中段が42.7%であった。ついで上段、下段、脇構えの順であった。理由として最も出現率が高いワードは、八相(17.5%)、中段(19.1%)ともに「攻撃」であった。出現率1~6位の言葉を組合わせて文にすると、八相は「直ぐに脛を打つことが出来る攻撃的な構え」で、中段は「基本の構えであり、相手に対応して攻撃出来る」ことが最も強いと思う理由であった。両者とも「攻撃」に軸を置きながらも、構えがもつ攻防の特性を捉えていることが分かった。

【結論】初心者の大学生が30回の授業を受けた後に、最も強いと思う構えの1番は八相、次いで中段の構えであった。そう感じた理由はどちらも攻撃力にあったが、それぞれの構えがもつ特性を捉えていた。構えを通じて薙刀が元来もつ強みや特性を理解することは、薙刀への興味関心を引き出すための指導法として有効であることが示唆された。

## II C-6

### 高次脳機能障害者への剣道指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～ その6 心理面の変化に焦点をあてて

The potential of Budo as seen through Kendo instruction for a person with higher brain dysfunction.

From a competitive society to a co-creative society

Part 6: Focusing on psychological changes

○三苫保久（滋賀県立大津清陵高等学校）、淵上博昭（心合武館）、田川良帆（びわこバリアフリー剣道クラブ）、櫻井美子（秋田工業高等専門学校）、東山明子（大阪商業大学）

Yasuhisa Mitoma (Otsu Seiryō Correspondence High school), Hiroaki Fuchigami (Shinaibukan), Ryoho Tagawa (Biwako Barrier-Free Kendo Club), Yoshiko Sakurai (National Institute of Technology, Akita College), Akiko Higashiyama (Osaka University of Commerce)

#### 【Purpose and Conclusions】

The presenters have been running the Biwako Barrier-Free Kendo Club (hereafter referred to as 'the club') for eight years. The club aims to realize an inclusive and co-creative society by teaching Budo to people with disabilities, foreign students, and students who have not attended school. The present study examines the psychological impact of Kendo on a young man (23 years old, male, 1 year and 1 month of Kendo experience) who had a higher dysfunction due to a traffic accident. Two questionnaire-based tests, the GHQ28 and the STMI, were administered immediately after the intervention and 11 months after the intervention. As a result, participation in the club significantly reduced depressive symptoms and provided psychological stability.

【はじめに】発表者らは、障害者、留学生、不登校生等への武道指導を通して共生・共創社会の実現を目指す「びわこバリアフリー剣道クラブ」（以下クラブとする）を主宰し8年目を迎える。今回は、交通事故により高次脳機能障害をもつに至った青年T（23歳男性、剣道経験歴1年1ヵ月）が剣道を始めて心理面に与えた影響について検討する。

【研究方法】GHQ28とSTMIの2つの質問紙法検査を介入直後と介入11ヵ月後で比較した。

#### 【結 果】

GHQ28	Pro	Post	STMI	Pro	Post
A:身体的症状	6点	↘ 4点	特性不安	66	↘ 54
B:不安と不眠	4点	↘ 2点	状態不安	62	↘ 34
C:社会的活動障害	1点	↗ 3点			
D:うつ傾向	3点	↘ 0点			

↘ :改善 ↗ :改悪

【考 察】クラブへの参加が、うつ症状を大幅に軽減し、不安傾向そのものも低下し、精神的安定をもたらしたことが推察できる。クラブがTにとって安心できる居場所で帰属する場となったと思われ、剣道の稽古がTの心理面に大きな影響を与えたことがわかった。

## II P-1

### 高齢者の柔道教室参加による柔道への印象変化に関する検証

#### Verification of changes in impressions of participation in judo classes by elderly people

○大村康太（東海大学大学院），位高駿夫（東海大学・株ハイクラス），中矢力（東海大学），熊代佑輔（国際武道大学），井上康生（東海大学），上水研一朗（東海大学）

Kota Omura (Tokai University), Toshio Itaka (Tokai University, Highclass Inc.), Riki Nakaya (Tokai University), Yusuke Kumashiro (International Budo University), Kosei Inoue (Tokai University), Kenichiro Agemizu (Tokai University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to verify the changes in impressions of participation in judo classes by elderly people and to clarify the safety in judo. As a result, participation in the class did not change the impression of safety in judo. However, it became clear that the contents of judo classes should be improved in the future.

#### 【目的】

柔道は競技の特性上、怪我や危険などの印象を持たれていることが多い。しかしながら、我々柔道家は受身によって柔道での多くの危険な場面を回避している。受身は怪我から身体を守るという点では、柔道だけでなくその他のスポーツや日常生活における活用の可能性を秘めている。日常生活での怪我の危険要因の1つに転倒が挙げられる。日本人高齢者の転倒による介護や寝たきりなどは社会問題化している。その中で、柔道の受身の体得によって、転倒による怪我の重症化予防の貢献に期待できる可能性があるが、そのような報告はなされていない。そこで、本研究は高齢者による自身の身体を守ることを目的とした柔道教室を実施し、印象の変化を検証していくことで、柔道の安全性を明らかにすることを目的とした。

#### 【方法】

本研究の対象者は55歳から82歳までの男女24名（男性9名、女性15名）の柔道教室参加者とした。その内、柔道経験者は男性2名であった。調査は柔道に対する印象についての質問紙調査を柔道教室の前後で講師の指示により実施した。なお、本教室はスポーツクラブの1つのカリキュラムとして柔道教室を実施し、教室内容の実施は任意とし、一部を見学する参加者もいた。実施前後の印象は、カイ二乗検定もしくはt検定での比較を行った。

#### 【結果および考察】

柔道教室の実施前後で、柔道への危険な印象については有意な変化は認められなかった。転倒の重症化に受身は役立つかという質問に対して、66%の人が「とても役立つ」と回答していた。転倒の重症化予防のために受身を習得したいかという質問に対して、全員が「習得したいと思う」と回答していた。柔道の必要性についての項目では、身体を守る護身としての必要性に対して、約8割の人が「とても必要である」と回答していた。

#### 【結論】

日常生活の出来事である転倒に柔道の受身が有用であるかについて、全員から「役立つ」と回答を得られたため、柔道が他の競技とは違う、危機管理の分野における活用の可能性が示唆された。しかしながら、参加者から柔道に対する安全な印象への変化を得ることができなかったため、今後、柔道教室の内容の調整や回数を増やすなどさらなる改善が課題である。

## II P-2

### 中学校武道授業の学習成果に関する検討 —保健体育科教員養成課程学生に対する回顧的調査から—

○京林由季子（岡山県立大学），平田佳弘（IPU 環太平洋大学）

Yukiko Kyoubayashi (Okayama Prefectural University)  
Yoshihiro Hirata (International Pacific University)

**【PURPOSE AND CONCLUSIONS】** The purpose of this study is to clarify how health and physical education teacher training course students perceive the learning outcomes of martial arts classes experienced in junior high school through a retrospective questionnaire survey. As a result, the survey subjects of this study gave positive answers about learning outcomes. In addition, differences were seen in some items of learning outcomes depending on the type of martial arts. It will be necessary to consider training education that captures the characteristics of the types of martial arts.

**【目的】** 武道必修化以降に中学校で武道授業を経験した保健体育科教員養成課程学生が、自身が経験した武道授業の学習成果をどのように捉えているか、回顧法による質問紙調査により明らかにすることを目的とする。

**【方法】** (1) 調査対象は、I 大学教員養成課程（保健体育）の 2023 年度「保健体育科指導法 II」受講生とした。(2) 調査方法は、無記名の Web アンケートとした。調査にあたっては、回答結果が個人の評価に関係しないことを説明し、調査に同意した者のみに回答を依頼した。その結果、回答が得られた 138 名を分析対象とした。全員、武道授業必修化以降に中学生であった年代にあたる。(3) 調査内容は、①回答者属性、②授業条件に関する調査項目：10 項目、③学習成果に関する調査項目：関ら（2023）の調査項目 5 カテゴリー 17 項目、④体育教員として取り組みたいこと（自由記述）より構成した。学習成果に関する調査項目の回答は 4 件法（思う 4 点～思わない 1 点）とし、カテゴリー平均得点と項目平均得点を算出した。

**【結果および考察】** (1) 授業条件は男女別修が 70.3%，担当者数は体育教員 1 名が 81.9% という回答であった。(2) 学習成果のカテゴリーの平均得点は、全体では 2.9～3.1 の範囲であった（表 1）。男性群（95 名）と女性群（41 名）、中学校以前の武道経験の有群（25 名）と無し群（108 名）、武道種目の柔道授業群（87 名）と剣道授業群（35 名）のそれぞれについて、カテゴリーの平均得点に有意差は見られなかった。項目別では、「態度」カテゴリーの“愛好的態度”の項目、「知識」カテゴリーの“武道の特性”と“技の名称や行い方”の項目について、武道種目の柔道授業群が剣道授業群よりも平均得点が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

**【結論】** 本研究では、関ら（2023）の先行研究よりも学習成果について肯定的な回答が得られた。また、武道種目により学習成果の一部の項目に違いが見られた。対人格闘技であるそれぞれの武道種目の特性およびおもしろさを捉えた教員養成について今後も検討していく必要がある。

（引用文献）関伸夫，川田裕次郎，中村充（2023）中学校武道授業の必修化前後における学習成果の変化，体育学研究，68：409-423.

Table 1 学習成果のカテゴリー平均得点

	全体 (n=138)	武道種目	
		柔道授業群 (n=87)	剣道授業群 (n=35)
技能	2.9	3.0	2.8
態度	3.3	3.4	3.1
知識	3.1	3.2	2.9
思考・判断	3.1	3.2	2.9
方向目標	3.1	3.2	2.9

## II P-3

柔道授業における「自由練習」の有無が生徒の学習成果に及ぼす影響  
～「伝統的な考え方」に迫る安全な授業展開を目指して～

### Influence of the presence or absence of “JIYU RENSYU” in judo class on student learning outcomes

～Aiming to develop safe classes approaching “traditional ways of thinking”～

○由留木俊之(岸和田市立山直中学校) 太田順康(大阪教育大学) 石川美久(大阪教育大学)  
Yuruki Toshiyuki(Kishiwada Municipal Yamadai Junior High School)  
Ota Yoriyasu(Osaka Kyoiku University) Ishikawa Yoshihisa(Osaka Kyoiku University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

By verifying the difference in the learning outcomes of traditional ways of thinking depending on the course development, we examined the course development so that even teachers who do not specialize in martial arts can approach traditional ways of thinking. As a result, it was found that JIYU RENSYU is necessary for effective learning of traditional ways of thinking. In addition, it was found that instructors should be conscious of touching on traditional ways of thinking when conducting JIYU RENSYU. Furthermore, it was found that the traditional way of thinking can be learned by free practice regardless of standing or sitting position, but it was found that the standing position enables more effective learning.

【目的】柔道の授業展開の違いによって伝統的な考え方の学習成果にどのような差が生まれるのかを検証し、武道を専門としない教員でも伝統的な考え方に迫ることのできる授業展開を検討する。

【方法】令和4年度、大阪府下Y中学校において柔道授業を受けた中学生を対象に山本ほか(2019)が開発した「柔道授業における心理社会的学習成果評価尺度」を用いたアンケート調査をおこなった。クラスは1年生男子の「投げ技自由練習あり(N=59)」1年生女子の「固め技自由練習あり(N=64)」2年生男子の「固め技自由練習あり(N=48)」2年生女子の「礼法・受身のみ(N=57)」の4群である。なお、武道を専門とする教員が1年生男子の授業を担当し、その他のクラスは武道を専門としない教員が担当した。得られたデータをもとに Microsoft Excel2021を用いた一元配置分散分析と Ryan 法による多重比較をおこなった。

【結果および考察】山本ほかの開発した尺度の下位尺度のうち「礼儀作法」尺度の質問項目において、各クラス間での有意差が認められた。特に伝統的な考え方に関わる質問項目「相手に対する思いやりの気持ちをもって、練習に取り組めるようになった」において1・2年生女子に対して1年生男子の点数が優位に高い値(vs1年生女子  $p<0.05$ 、vs2年生女子  $p<0.01$ )を示した。一方、2年生男子については2年生女子との間に有意差( $p<0.05$ )が認められたが、1年生女子との間には有意差が認められなかった。これは、1年生女子の授業者は自由練習の際に礼の考え方には触れなかったが2年生男子の授業者は自由練習の際に礼の考え方について触れながら授業を展開したことによる差と思われる。

【結論】以上から、伝統的な考え方を効果的に学習させるためには自由練習が必要であることがわかった。また、授業者が自由練習を行う際に伝統的な考え方について触れる意識を持つべきであることが示唆された。さらに、立位・座位を問わず伝統的な考え方に触れる意識を持ったうえで自由練習をすれば伝統的な考え方について学習できることがわかったが、立位の方がより効果的に学習できることがわかった。

## II P-4

柔道指導者が施す礼法に関する研究：立礼時腰部前傾角度に着目して

A Study on Rei by Judo Instructors  
: Focusing on the Forward Tilt Angle of the Waist During Ritsu-Rei

○佐藤 武尊 (皇學館大学), 三宅 恵介 (中京大学), 横山 喬之 (摂南大学)

SATO Takeru (Kogakkan University), MIYAKE Keisuke (Chukyo University),  
YOKOYAMA Takayuki (Setsunan University)

### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

The purpose of this study was to clarify the forward tilt angle of the lower back during the “Ritsu-Rei” when performed by Judo instructors. Judo instructors thought that the mean value of the forward tilt angle of the waist during the “Ritsu-Rei” was 32.1 degrees ( $\pm 8.0$ ). In addition, the mean value of the forward tilt angle of the waist when Judo instructors performed the bow was 49.6 degrees ( $\pm 8.9$ ), which was significantly different from the anteversion angle as knowledge ( $P < 0.05$ ).

【目的】柔道において、より良い礼法指導の確立を目論むのであれば、より多くの対象者に焦点を当て、多角的な視点から礼や礼法に関する研究がなされる必要があると考えている。それにも関わらず、礼法の「良し悪し」を評価した研究は少なく、中村ほか (2010) が行ったものと佐藤ほか (2021) が行った研究以外見受けられない。今後の礼法指導の在り方を考える上で、礼法について動作分析的な評価を取り入れて検討する事は重要なことであると考えている。加えて、柔道を指導する立場のものが施す礼法を、客観的な視点で捉えて知る事は、「より良い礼法は何か」を検討する上で重要な資料になると考えている。そこで本研究では、柔道指導者の礼法、特に立礼時の腰部前傾角度について、知識として有している角度と実際に立礼を行った際の角度を明らかにすることを目的とした。

【方法】被検者は、いずれかのカテゴリーにおいて日常的に柔道の指導を行なっている指導者 14 名 (そのうち、当時時点で全日本柔道連盟連盟指導者ライセンス保有者 13 名) とした。被検者には、撮影の趣旨を説明し、各被検者が、①立礼を知っていること、②立礼を指導した事がある事、③撮影時腰部自覚痛は無くいつもどおり立礼ができる事を事前に確認し、参加の同意を得た。その上で、「立礼時の上体の前傾角度 (腰部前傾角度) を計測する事を伝えずに」「あなたの思う正しい柔道の立礼を行ってください」という条件のみを伝えて立礼を行わせ、その様子を撮影した。撮影は、iPhone12 Pro に搭載されているカメラアプリケーションを用いて、側方一方向から行った。撮影後に、「日頃、立礼指導時に腰部前傾角度は何度にするべきだと思って指導にあたっているか」を聴取し、各指導者が知識として有している柔道の立礼時腰部前傾角度 (以下、知識前傾角度) として扱った。撮影した映像を、iOS 用 my Dartfish Express Ver. 10. 0. 1 を用いて、立礼時腰部前傾角度 (最大傾斜角) について二次元動作分析を行い、指導者が実際に行った立礼時腰部前傾角度 (以下、実際前傾角度) を測定した。得られた各データの平均値を算出し、対応のある t 検定を行った。なお、統計学的有意水準は、危険率 5% 未満 ( $P < 0.05$ ) とした。

【結果および考察】柔道指導者の知識前傾角度の平均値は、32.1 度 ( $\pm 8.0$ ) であった。また、実際前傾角度の平均値は、49.6 度 ( $\pm 8.9$ ) であり、知識前傾角度と有意 ( $P < 0.05$ ) な差が認められた。このことから、指導者が礼法の指導をする際に、自身が認識している腰部前傾角度を体現できていない可能性がある事が示唆された。

## II P-5

### 大学柔道選手が指導者から受ける非言語的行動の印象と頻度に関する調査 A study on the impression and frequency of nonverbal behaviors that college judo players receive from their coaches

○熊代佑輔 (国際武道大学), 前川直也 (国際武道大学),  
廣瀬伸良 (順天堂大学大学院), 伊藤潔 (九州共立大学)

Yusuke KUMASHIRO (International Budo University),  
Naoya MAEKAWA (International Budo University),  
Nobuyoshi HIROSE (Graduate School of Health and Sports Science, Juntendo  
University),  
Kiyoshi ITO (Kyushu Kyoritsu University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

In this study, a questionnaire survey was conducted on 383 college judo players (268 male and 115 female). The purpose of this study was to clarify the actual impression and frequency of nonverbal behaviors that college judo players receive from their coaches.

#### 【目的】

本研究の目的は、大学柔道選手が指導者から受ける非言語的な行動の印象と頻度についての実態を明らかにすることである。

#### 【方法】

2023年4月～6月に全日本学生柔道連盟に所属する大学柔道選手を対象に郵送法にて調査を行った。571名の回答の中から調査用紙の記載項目に不備なく回答した383名(男268名、女115名)を分析対象とした。

調査内容については、石塚ら(2017)の先行研究をもとに、①基本属性(学年、性別、競技経験年数、最高競技実績)、②指導者(1名の指導者を選出)との心理的關係(親密さ、信頼、やる気)を調査する3項目を5件法(「ない」、「ややない」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばある」、「ある」)で回答を求めた。さらに、石塚ら(2017)の先行研究で用いたノンバーバルコミュニケーションに関する36項目に対する印象と体験頻度の評価を求めた。指導者が各項目についての行動をとった場合の印象について、「悪い」、「やや悪い」、「どちらでもない」、「やや良い」、「良い」の5件法で評価を求めた。体験頻度については、これまで実際にどのくらい体験したかを、「少ない」、「やや少ない」、「どちらでもない」、「やや多い」、「多い」の5件法で評価を求めた。指導者の選定には、「今まであなたが指導をされたコーチ(指導者)ひとりを思い浮かべてください(大学の指導者でなくてもかまいません)」と提示した。

なお、本研究は国際武道大学研究倫理規則に基づき、研究倫理部会で承認された研究である(承認番号22021)。

倫理的配慮として、対象者には研究趣旨、プライバシーの保護および回答拒否、回答の中断が可能であることを調査用紙に明記し、同意できる者のみに回答の協力を求めた。

#### 【結果および考察】

分析結果等については、当日発表する。

## II P-6

### 剣道を通した大学生の社会貢献活動について — 少年剣道指導の実践報告 —

A Social Contribution of University Students  
through Kendo: from the case of teaching of kendo for youth

○山田彩結 (大阪教育大学), 太田順康 (大阪教育大学)

Yamada Ayu (Osaka Education University), Ota Yoriyasu (Osaka Education University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

In reply to the request of the O kendo Federation, O University of Education Kendo Club hosted the 2<sup>nd</sup> Kendo Juku (Kendo classroom for youth). Considering the background-problem of the decrease in kendo population of schoolboy and the necessity of outreach activities for university students, an attempt was made to show the report of how we could continue the Kendo Juku in the future and how we consider for promoting Kendo on schoolboy.

【目的】少子化が進む中、剣道界においても剣道人口の減少・剣道離れ等が大きな問題となっており、0 剣道連盟(以下 0 剣連)でも喫緊の課題である。一方、地域社会において大学生の力が大いに必要とされており、大学から地域へのアウトリーチ活動が数多く報告されている。そこで、0 剣連では大学生による剣道指導が一つの有効的な方策と考え、今回、0 剣連から 0 教育大学剣道部へ少年剣道の活性化に向けた「剣道塾」の企画・実施の提案があり、「第 2 回剣道塾」を担当した。そこで、企画準備段階からの活動記録を報告し、さらにこの事業への評価を検討することで、今後も継続して運営できる事例となること、小・中学生の剣道指導のあり方、少年剣道活性化を考える機会になることを目的とした。

【方法】実践報告は、「第 2 回剣道塾」実施の経緯、準備委員会の記録、大学生の企画立案の経過記録、当日の記録、及び保護者・参加者の事後アンケートの評価や自由記述による評価を報告する。また、実業団による指導が行われた「第 3 回剣道塾」の事後アンケートを分析、比較検討し、報告する。検証方法は、アンケート結果を Google form に入力、スプレッドシートを作成し、IBM SPSS Statistics29、KH Coder により分析検討した。

【報告および考察】0 剣連の役員と打ち合わせ、その後企画・準備・会場下見に関わり、0 剣連専門家による「第 1 回剣道塾」の事後アンケートから、小・中学生のニーズをまとめ、各部員に共有し、指導内容の検討を依頼した。「少年にとって身近な大学生が楽しく剣道を続けるきっかけになる事」をテーマに、参加者と部員を 10 グループに分け、全体指導・グループ別指導・模範稽古・合同稽古・質問コーナーを行った。参加者の満足度を見ると、5 設問中 4 設問で 70%以上が大変満足と回答している。保護者からは、剣道塾の継続を希望する声が多く寄せられた。第 2 回の大学生は、教育大生ならではの遊びの要素や個に応じたキメの細やかな指導が評価され、第 3 回の実業団では模範稽古での技術の高さや質問コーナーでの剣道や人生の深みのある経験談が特徴的であった。

【結論】身近なロールモデルとなる大学生や憧れの対象である実業団との交流が小・中学生の剣道観に与える影響は大きく、剣道継続のきっかけの一つとして有効である可能性が示唆された。参加者の目的には、強くなるために「学ぶ」ことと、剣道や交流を「楽しむ」ことの二極化が見られ、参加者に対して活動内容を事前に提示する等の工夫により、よりニーズに応えることができるのではないかと考えられる。また、本報告により、今後も継続して大学生が指導を行うことができる事例として有効な土台となることができたと考えられる。



## II P-7

### 英国及び米国の剣道実践者による稽古環境のサーフェイスに関する評価 A comparative evaluation of the surfaces used by kendo practitioners in the UK and USA

○池田孝博（福岡県立大学）

Takahiro Ikeda (Fukuoka Prefectural University)

#### 【PURPOSE AND CONCLUSIONS】

There has been little investigation into the ideal surface (SF) for foreign kendo practitioners and whether preferences with respect to the ideal surface differ from country to country. The aim of this study was to have kendo practitioners in the UK and the US evaluate their respective SF according to an identical and therefore comparable set of criteria. The data obtained from the 121 participants found that the UK practitioners tended to evaluate their SF less highly than did their US counterparts. Furthermore, a correlation was found between how highly each of the UK practitioners evaluated their SF and the conduciveness of that SF to the evaluating individual's particular style as a kendo practitioner.

【目的】 剣道が国際的な広がりを見せる中、海外での指導に関する様々な問題が指摘されている。しかしながら、その中で、海外における剣道実践者のための稽古環境、特に床面（サーフェイス：SF）に言及したものは少なく、また、技術指導に比べると海外の稽古環境を整備するための取り組みもあまり見られない。日本では、剣道場は「床が命」と言われるように、床面の状態が技術面や安全面に影響することが指摘されている。そこで本研究では、英国（UK）および米国（USA）の剣道実践者を対象として、彼らの稽古場所のSFに対する評価とその関連要因について検討することを目的とした。

【方法】 本研究の対象者は121名（UK=45；USA=76）である。英国の調査は2018年3～4月にウエールズ・カーディフにおいて開催された講習会で、また、米国での調査は2022年8月にネバダ州ラスベガスで開催されたKENDOサマーキャンプにおいて、その参加者を対象として実施した。質問項目は、属性（剣道経験・得意技等）、普段の稽古場所のSFに対する評価（すり足、踏み込み、踏み切り動作のしやすさ）、日本の無塗装剣道場での稽古経験とその評価および剣道のSFに関して重視する事項（足さばきのしやすさ、温感、湿感）である。

【結果および考察】 英国と米国の対象者の属性のうち、性別構成（ $\chi^2 [1] = 0.896, p = 0.344$ ）、剣道経験（ $\chi^2 [4] = 5.060, p = 0.280$ ）に有意差は認められなかった。稽古場所のSF評価について、一般線型モデルを適用し、国と足さばき（3種類）の2要因による分散分析をおこなった結果、要因間に交互作用は認められなかった（ $F [2,236] = 0.750, p = 0.474$ ）。主効果の足さばきの動作間に差は認められなかった（ $F [2,236] = 0.158, p = 0.854$ ）が、国間に有意差が認められた（ $F [1,118] = 9.276, p < 0.001, UK < USA$ ）。また、得意技との関連では、英国では、稽古場所の評価について「応じ技が得意な人ほど稽古場所のすり足の評価が高い」（ $r = 0.342, p < 0.05$ ）傾向が、また、SFの重視事項では、「踏み切りのしやすさを重視する人ほど、仕掛け技（ $r = 0.358, p < 0.05$ ）、出ばな技（ $r = 0.326, p < 0.05$ ）が得意」という傾向が示された。一方、米国では、得意技と稽古場所の評価およびSFで重視する事項に関連は認められなかった。

【結論】 本研究で示された、稽古場所のSF評価に関する2国間の差から、両国の稽古場所における剣道を実践する上での適切性に違いがある可能性が示唆された。その一方で、英国において、得意技とSFに対して重視する事項に関連が認められたのに対して、米国ではそのような関連が認められなかったことから、米国に比べて英国の実践者の方が、足さばきの重要性の認識とそれを実現するためのSFの条件について sensitive である可能性も示唆された。

# I-1

## BIOMECHANICAL INVESTIGATION OF TECHNICAL PARAMETERS INDICATING THE SKILL LEVEL OF SEOI-NAGE IN THE KAKE PHASE

○Takanori Ishii (Ryotokuji University), Sentaro Koshida (Ryotokuji University)

### [OBJECTIVE]

We aimed to investigate kinematic differences in the seoi-nage kake phase across skill levels to establish biomechanical indicators for throwing techniques.

### [METHODS]

Nineteen male judo athletes, including three World Judo Championships medallists, participated in the study. Three-dimensional coordinate data of 94 reflective markers were recorded during seoi-nage movements using an 18-camera VICON-MX system (250 Hz). Kinematic parameters of the tori's ankle and hip were calculated. The top six participants were divided into the high-skilled group, and the bottom six participants were divided into the skilled group after determining Uke's centre of mass (COM) angular momentum. A Mann-Whitney U test compared relative positions of ankle and hip joints between the groups. Analysis was performed on the horizontal plane of the global coordinate system, with the uke's left and right ankle joints' midpoint as the origin for ankle joint positions and the uke's left and right hip joints' midpoint as the origin for hip joint positions. Calculations were conducted using MATLAB R2023a ( $p < 0.05$ ).

### [RESULTS AND IMPLICATIONS]

During the seoi-nage kake phase, the highly-skilled group exhibited median relative positions for the left and right ankle joints:  $0.14 \pm 0.03$  m,  $-0.06 \pm 0.12$  m,  $-0.09 \pm 0.04$  m, and  $-0.20 \pm 0.13$  m, respectively. In the skilled group, the corresponding values were  $0.11 \pm 0.02$  m,  $-0.13 \pm 0.06$  m,  $-0.16 \pm 0.01$  m, and  $-0.22 \pm 0.02$  m, respectively. The step position at the beginning of the kake phase did not significantly differ across the groups. The highly skilled group demonstrated a significant increase in the relative position of the midpoint of the tori's hip joints (Fig. 1), ranging from 126% to 180% of the kake phase compared to the skilled group ( $p < 0.05$ ). These results suggest that the adjustment of force application during the kake phase is influenced by the hip joint position rather than the step position. The hip joint position will affect the moment arm during force application to the uke, thus impacting changes in angular momentum.

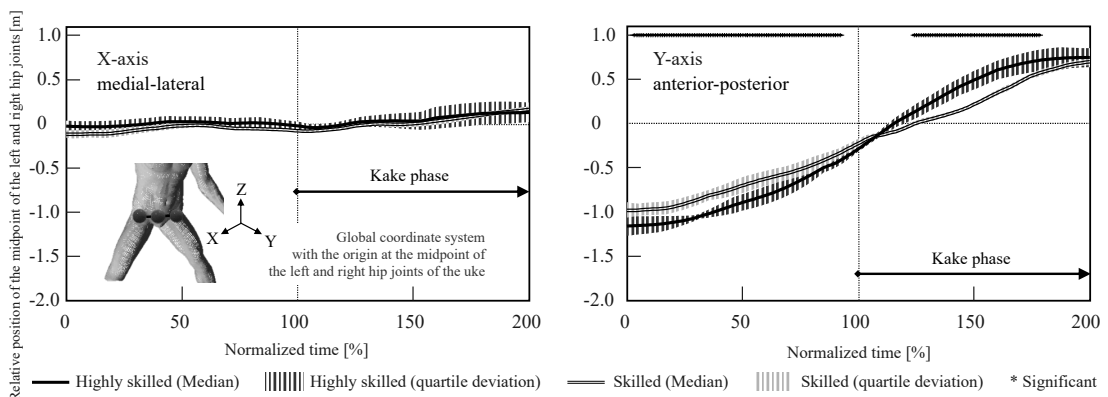


Figure 1: Relative position of the midpoint of the left and right hip joints of the tori in seoi-nage.

## I-2

### A monitoring head impact exposure in women's judo athletes: A single site study

Sentaro Koshida (Ryotokuji University), Takanori Ishii (Ryotokuji University), Hiroshi Churei (Tokyo Medical and Dental University), Hiroshi Kubota (Tokyo Gakugei University)

#### **[OBJECTIVE]**

Judo is recognized for its high risk of head injuries. Despite the clear need for preventive measures, substantial evidence on judo-related concussions is sparse. It's hypothesized that forceful throws may lead to head injuries, but this needs further exploration. Monitoring sub-concussive head impacts, as near-miss cases, may be able to illuminate actual injury risk, aiding in the development of preventative measures. Thus, this study aims to quantify the frequency and magnitude of head impacts during judo sparring practice, aiming to identify high-risk scenarios for college women's judo athletes.

#### **[METHODS]**

The study included four women's college judo athletes in the same university judo team (median age: 19.5-year, median years of judo experience: 14 years). To monitor head impacts during judo sparring practice, a mouthguard-type inertial sensor (The Nexus A9 Smart Mouthguard, HitIQ Ltd., VIC, Australia) was used to measure linear (g) and angular (rad/s<sup>2</sup>) head accelerations. Head impacts exceeding peak linear acceleration of 10g, determined with a 95% probability of accuracy by an algorithm integrated into the application, were further examined. Additionally, video recordings of each participant engaged in judo practice were captured, along with date and time stamps. The head impact data were then synchronized with the video footage to precisely identify the specific situation of each head impact. The identified situations were categorized into five groups: grip fighting, being thrown, attempt attack, being attacked, and mat work. Frequency comparisons were conducted using the chi-square test, while Kruskal-Wallis test assessed magnitude differences among the identified categories ( $p < 0.05$ ).

#### **[RESULTS]**

The participants had a median of 8.5 sessions, incurring a total of 81 impacts, implying an average of 2.4 sub-concussive (greater than 10g) head impacts per session. Breakdown of head impact occurrences includes grip fighting (36), being thrown (15), attack attempts (12), receiving attacks (10), and mat work (8). A significant variation was observed in the frequencies of head impacts across these situations ( $\chi^2 = 31.90$ ,  $p < 0.001$ ). Specifically, grip fighting showed significantly more frequent impacts compared to other situation with a medium to large effect size (Cohen's  $h = 0.57$ - $0.82$ ). The median peak linear (PLA) and angular (PRA) head accelerations were 19.3g [8.7] and 1686.8 rad / s<sup>2</sup> [1184.2], respectively. However, the PLA and PRA values did not significantly vary across different judo situations (PLA:  $H = 5.19$ ,  $p = 0.27$ , PRA:  $H = 5.06$ ,  $p = 0.28$ ).

#### **[CONCLUSIONS]**

Among women's college judo athletes, the head impacts were found to be not limited to just being thrown situation. Interestingly, grip fighting accounted for the highest frequency of such impacts. Regardless of the situation, however, the magnitude of these impacts seems remained consistent.

# I-3

## Grasp and Breaking Grasp Strengths of Judo Versus Non-Judo Athletes

Chinami Nakagawara (Waseda University),

Hiroshi Kubota (Tokyo Gakugei University), Misaki Iteya (Waseda University)

### **[OBJECTIVE]**

For judo athletes, the strength required to grasp judogi is an indispensable element of physical fitness. To date, the grasp strength of judo athletes has been evaluated via handgrip strength. However, handgrip strength and the ability to grasp judogi are not synonymous. Additionally, although humans have left-right differences in morphology and function, the presence of a left-right difference in the strength of grasping judogi is unknown. Based on the above, we predicted that the grasp strength and the eccentric strength required to resist the force of being pulled away (breaking grasp strength) are among the most important physical factors for judo athletes. Therefore, clarification of the characteristics of these abilities is required. Thus, this study aimed to determine the grasping characteristics of judo versus non-judo athletes by measuring their handgrip, grasp, and breaking grasp strengths using a unique measuring device.

### **[METHODS]**

A total of 41 female athletes (22 judo, 19 non-judo) were included in this study. All participants were right-handed. A device equipped with a tension attachment and a digital indicator was used to measure grasp strength. Two types of gripping tools were used: common stick-shaped (bar type) and judogi (sleeve type). Each participant grasped the tool while in a seated posture with the elbow joint flexed at 90° and the upper arm held close to the body and applied an exerting force. Maximum grasping strength was defined as the maximum value at approximately 3–4 s from the time the participant started exerting force by grasping the tool until the wire started to wind up. The breaking grasp strength was defined as the maximum value from the time the motor started to wind the wire to the time when the participant removed the hand from the tool.

### **[RESULTS]**

No significant intergroup differences in handgrip strength (judo athletes, 33.1 kgf; non-judo athletes, 31.9 kgf) or grasp strength (judo athletes, 14.6 kgf; non-judo athletes, 13.7 kgf) were observed. However, the breaking grasp strength was greater for the judo than for non-judo athletes (28.3 kgf versus 21.5 kgf, respectively). This difference was more pronounced with the sleeve than with the bar type of tool. Judo athletes may have already mastered how to efficiently grip judogi sleeves. Moreover, judo athletes tended to show fewer left-right differences than non-judo athletes in all three grasp strengths.

### **[CONCLUSIONS]**

These results suggest that judo and non-judo athletes have comparable handgrip and grasp strengths, but that the former has superior breaking grasp strength; the difference would be more pronounced with the sleeve-type assessment tool. These results also suggest that left-right differences are less common among judo athletes.

## I-4

### **The effect of ambidextrous development on fencing performance in the early training phase of a sabreur practising the Old Polish martial art Signum Polonicum.**

Leonard Marynowski, lmarynos@o2.pl, mob.: 0048-888-188-776, Signum Polonicum Wrocław

#### **Abstract**

The aim of this article is to describe the impact of the fencer's bilateralism on the successful performance of fencing techniques in relation to the over-representation of unilateral fencers, assuming that in many varieties of combat sports and martial arts tactical models and, consequently, prior training are created on the basis of exploiting the fact that the opponent demonstrates clearly marked laterality when performing techniques. The extinguishing of the dominant side preference in the fencer, due to the combined mechanics of movement of all limbs during the fight itself, is easier to carry out at the initial stage of training, where the premises of the Old Polish martial art system allow for the hands and legs to be exercised in a decoupled manner in basic mechanics. The preference for handedness and the use of its existence can be seen not only in sports and martial arts (modern sport fencing, kendo) but also, for example in defensive architecture - the gates of many European castles are often set at such an angle so that defenders can, effectively strike at attackers who are unsuited to defend their less protected (here, over-representatively right) side of the body. However, as the Old Polish martial art derives from the tradition of fighting from horseback, training that evenly develops both sides of the body is not only desirable, but in fact indispensable. Whilst attacking in formation requires the use of a unified dominant side, individual bouts of an antagonistic nature already excludes such a limitation.

**Keywords:** HEMA, Old Polish martial art, handedness, ambidexterity, sabre fencing, basics of fencing training.

#### **Introduction**

Description of the basic elements of a fencer's training to enable bilateral performance of techniques in the old Polish martial art Signum Polonicum.

#### **Objectives**

Promoting the Old Polish martial art Signum Polonicum in diverse local environments and in martial arts centres around the world by demonstrating a universal training mechanism enabling comprehensive preparation of the fencer in terms of both physical fitness and extended motor perception in combat situations while preserving the original cultural code of the martial arts tradition.

#### **Methodology**

Participant observation, analysis of the available literature on the problem, analysis of social needs taking into account the synergy effect of physical, philosophical and spiritual aspects, local cultural code.

#### **Results**

A clear difference was observed in training simulations using uni- and bilateral training as well as simulated clashes in the native martial art system, with a concomitant demand for the holistic development of psychomotor qualities among practitioners. In the development process of students of the Old Polish martial art, a strong marking of the dominant side can be observed in the initial phase, which disappears already during the properly conducted first

stage of training thanks to a properly prepared training system by the master, Dr Zbigniew Sawicki. Thanks to its universalism, the Old Polish martial art Signum Polonicum is in the process of propagating itself in increasingly diverse and distant areas while at the same time retaining its characteristic cultural code.

## Conclusions / Discussion

The versatility of the Signum Polonicum martial art allows it to be practised by people with previously acquired foundations in different fencing systems or even unrelated sports and martial arts. The presentation of a martial art outside one's own region, however, requires the 'translation' of the fundamentals of its training system into terms accessible to participants of different cultural codes while clearly marking its immanent features, one of which is bilaterality. The process of obtaining it is complex due to assumptions that are different from the original ones - e.g. the absence of antagonistic fencing - but feasible at an early stage in the training of a future fencer.

## References

1. Ciosański, A. (2016). *Bramy, cz.1.* retrieved from <https://youtu.be/hxwKMhApTHo?t=511>
2. Cynarski, W.,J. (2019). *Martial Arts & Combat Sports: Towards the General Theory of Fighting Arts.* Gdańsk: Wydawnictwo Naukowe Katedra.
3. Lauren, J.H. (2010). *In fencing, what gives left-handers the edge? Views from the present and the distant past.* <https://doi.org/10.1080/00222895.2019.1579167>
4. Maroteaux, R., J. (2023). *De la technique des hussards a celle des samourais.* Self & Dragon, no 18, pp 32-35. Bagnolet, France
5. Marsden, R. (2015)*Polish Saber. The use of the Polish Saber on foot in the 17<sup>th</sup> century.* Cambridge, Tyrant Industries
6. Miyamoto, M. (2001) *Księga Pięciu Kręgów五輪書*, Bydgoszcz: Diamond Books
7. Sawicki, Z. (2008). *Michała Starzewskiego traktat „O szermierstwie” w interpretacji Zbigniewa Sawickiego.* Zawiercie
8. Sawicki, Z. (2005).*Palcaty. Podręcznik dla początkujących.* Zawiercie.
9. Sawicki, Z. (2012). *Traktat szermierczy o sztuce walki polską szablą husarską część druga,* Zawiercie
10. Sawicki, Z. (2004). *Traktat szermierczy o sztuce walki szablą husarską. Podstawy.* Zawiercie
11. Winkler, W. (2010) *Katana i Karabela, obyczaje szablą pisane.* Bydgoszcz: Diamond Books
12. Witkowski, M. (2020) *Effects of Fencing Training on Motor Performance and Asymmetry Vary With Handedness* <https://doi.org/10.1080/00222895.2019.1579167>

# I-5

## Cutting-edge Developments and Challenges in Artificial Intelligence for Enhancing Martial Arts Sports Performance

Ning Li <sup>1</sup>, Mohamad Nizam MOHAMED SHAPIE<sup>1,2,3,4,5</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Sports Science and Recreation, Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>2</sup> Martial Arts & Combat Sports Research Network(AIRBORNE), Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>3</sup> Seni Gayung Fatani Malaysia Association (PSGFM) (Malaysia)

<sup>4</sup> Federation of National Silat Olahraga Malaysia (PESONA) (Malaysia)

<sup>5</sup> World Silat Federation (WSF), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

### **[OBJECTIVE]**

Intelligent sports emerged in the 1990s. With the advent of the big data era, breakthroughs in algorithms and computing power, and the expansion of the sports industry and market demands, Artificial Intelligence (AI) has brought a new transformation to the traditional sports sector. As evident in the current development of martial arts, AI has become an indispensable part of improving martial arts sports performance. The integration of AI into the martial arts domain is an inevitable trend. However, while significant expectations are placed on the role of AI in enhancing sports performance, challenges persist due to the inability of emerging technologies to effectively address the specific needs of martial arts development, particularly in the absence of a comprehensive database of martial arts sports performance. Therefore, it is crucial to systematically review the cutting-edge research progress in this domain, reflect on the existing difficulties and issues, explore the future development trends of AI in enhancing martial arts sports performance, foster effective coupling between sports performance analysis and AI, and provide feasible theoretical methods and practical guidelines for the advancement of this field.

### **[METHODS]**

A literature search was conducted using databases such as Web of Science, China National Knowledge Infrastructure (CNKI), and WanFang Data, resulting in the selection of over four hundred research papers. Relevant interpretations of "sports performance" encompassed "athletes," "players," "sports performance," "sports competitions," and "sports training," while AI-related terms included "Artificial Intelligence," "Deep Learning," "Machine Learning," "Computer Vision," and "Speech Recognition." The current applications of AI in enhancing martial arts sports performance primarily focus on AI-assisted training and monitoring, competition analysis, psychological regulation, and performance maintenance. Subjective factors affecting athletes include training accumulation, body movement regulation, adaptation to physical and mental changes, neural system modulation, in-game performance, psychological qualities, and injuries. Objective factors include opponents' in-game performance, environmental conditions, referees, rules, and spectators. During the literature selection process, besides prioritizing relevant keywords, unpublished works, review papers,

studies from unrelated fields, and non-peer-reviewed research were excluded. In summary, this paper provides a comprehensive review of research literature on AI in the domain of martial arts sports performance, and identifies its applications predominantly in auxiliary training, competition analysis, psychological regulation, and performance maintenance, offering valuable references and guidance for further research and development in this field.

### **[RESULTS]**

AI has brought about revolutionary changes in the domain of martial arts sports performance. Technologies such as computer vision, sensors and their networks, wearable devices, etc., play crucial roles in real-time data monitoring during martial arts training and competitions. Data mining techniques identify patterns to support training and competition decision-making. VR technology provides conditions for maintaining athletic abilities under special circumstances. Machine learning has gradually transitioned into deep learning, achieving success in numerous areas such as image recognition and injury prevention. These advancements significantly aid athletes in improving their competitive abilities, regulating body movements, enhancing physical and mental adaptability, modulating the neural system, providing real-time feedback and post-game analysis, and managing psychological aspects and injury fatigue.

### **[CONCLUSIONS]**

Innovation is the driving force of progress, with technological innovation being a core element. Technological leadership has become the main approach to enhance sports competitiveness, outreach, and influence. The application and development of AI in the field of martial arts epitomize the effective integration of technology and martial arts. Globally, technology's role in competitive sports is becoming increasingly prominent, and fierce competition among nations' athletic capabilities directly reflects their technological innovation prowess. The enhancement of martial arts sports performance through AI has become a critical aspect of competing national athletic capabilities, and it has rapidly become a focal point of scientific research and technological development across nations. Addressing the significant needs in the entire process of enhancing martial arts sports performance using AI, such as talent selection, training, participation in competitions, game events, and event management, requires comprehensive research and solutions. Additionally, the development of institutional and legal frameworks, ethical considerations, and information security in the field of AI-enhanced martial arts sports performance merits in-depth exploration and resolution both theoretically and practically.



# I-6

## Seni Silat Malaysia Curriculum: The arts of silat combat in *Tempur Seni*

Mohamad Nizam MOHAMED SHAPIE<sup>1,2,3,4,7</sup>, Hazim SAMSUDIN<sup>1,3,4,7</sup>,

Syahida MOHD NAZRI<sup>1,2</sup>, Indrayuda INDRAYUDA<sup>5</sup>, Dahlia AL-SYURGAWI<sup>6</sup>, Roma IRAWAN<sup>8</sup>,  
Romi MARDELA<sup>8</sup>, Mohamad Rahizam ABDUL RAHIM<sup>1,2,3</sup>, Nagoor Meeera ABDULLAH<sup>1</sup>, Vincent  
PARNABAS<sup>1</sup>, Nasru Syazwan NAWAI<sup>1,4</sup>, DONIE<sup>8</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Sports Science and Recreation, Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>2</sup> Martial Arts & Combat Sports Research Network (AIRBORNE), Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>3</sup> Seni Gayung Fatani Malaysia Association (PSGFM) (Malaysia)

<sup>4</sup> Federation of National Silat Olahraga Malaysia (PESONA) (Malaysia)

<sup>5</sup> Faculty of Language and Art, Universitas Negeri Padang, Sumatera Barat (Indonesia)

<sup>6</sup> Cardiff School of Sport & Health Sciences, Cardiff Metropolitan University (United Kingdom)

<sup>7</sup> World Silat Federation (WSF), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>8</sup> Fakultas Ilmu Keolahragaan, Universitas Negeri Padang, Sumatera Barat (Indonesia)

### [OBJECTIVE]

Seni Silat Malaysia (SSM) Curriculum is the only established martial arts curriculum recognized by Malaysian government in 2002. The objective of the current study is to provide information on the ancient Malay fighting technique known as *Tempur Seni* (the arts of combat). The information will provide useful evidence to determine the authenticity of Silat compared to other martial arts, particularly in Malaysia context.

### [METHODS]

This paper used document analysis and review. It employed the qualitative method on current available literature in Malay Silat, books, various official silat documents, published journal articles that related to the establishments of Malay Silat.

### [RESULTS]

*Tempur Seni* is the application of traditional weapons in silat such as stabbing style (tikam or menikam) with keris or badik, machete style (parang or memarang) with sword, sundang or machete and cutting (tetak) using sword, ax and so on. In *tempur seni*, the method of weapon combat is maintained by attacking or receiving based on the movement of the weapon. In practice or performance only use unarmed hand attack signals. *Tempur Seni* is performed according to a certain procedure to maintain the authenticity of martial arts which is a self-defense art based on the science of war.

### [CONCLUSIONS]

*Tempur Seni* also known as *silat pulut* or *gayung pulut*. It is a game played by people in the field or gatherings that had its own secrets and meanings in Malay silat. It tests every practitioner's technique while at the same time increasing their level of knowledge. Any *pesilat* (silat practitioners) that already achieved a red or black belt in SSM can fight with other opponents that are not in the same silat school. The format and the procedures of *silat tempur* preserve the originality of Malay civilization art of war.

## **[ACKNOWLEDGEMENTS]**

We would like to thank Akademi Silat Malaysia and Pertubuhan Seni Gayung Fatani Malaysia for volunteering for the study especially to Grandmaster Aminuddin Anuar, Grandmaster Mohd Safwan Abu Hassan, Grandmaster Mohd Shahiid Elias, Coach Muhammad Salehin Ramli, Cik Puan Nurliyana Hazwani Rohaizat, Mrs Raja Noor Adilla Raja Mahyaldin, Puteri Eimaan Safiyya, Mohamad Aisy Luqman, Puteri Elissa Sarah, Puteri Eilya Sofea, Mohamad Azraf Luqman for their support in this study. Special thanks to Institute of Research Management and Innovation, Universiti Teknologi MARA for the financial support for this research [100-RMC 5/3/SRP (053/2022)].

## **The impact of the study of selected Aikido techniques on the performance in wrestling exercises applied in the Old Polish martial art Signum Polonicum.**

Kornel Kalka, kornelkalka94@gmail.com, mob.: +48 512 244 873, Signum Polonicum  
Wrocław

### **Abstract**

Sabre combat comes directly from the art of fighting on horseback, so that by using one type of versatile weapon one could stop an opponent's attack regardless of the weapon he used. This process developed as early as the 16th century and the sabre became a Polish national symbol, now immortalized even in the words of our anthem. During the fight itself, there was often a close-quarters clash, and as a result there was also wrestling to overpower the rival as quickly as possible or to destabilize him and throw him off his horse. On the ground, too, this way of fighting had a practical translation. The purpose of this article is to examine the similarities between selected leverage and overpowering techniques used in the Japanese martial art of AIKIDO and sabre wrestling, in which Signum Polonicum specializes.

### **Key phrases**

old-school martial art, wrestling, close combat, Aikido, techniques in close combat

### **Introduction**

The impact of knowledge of human anatomy and incapacitating techniques on facilitated training in the Polish martial art.

### **Objectives**

Promotion of the Polish martial art and demonstration of techniques performed on the sabre, or with it.

### **Methodology**

Training simulations, observation of students, interviews with instructors

### **Results**

The following techniques derived from Aikido were applied whilst analysing the Polish martial art wrestling techniques, holding the sabre in one hand and controlling the movement of the horse :

1. Ikka-jo based techniques.
2. Nikka-jo based techniques.
3. Shiho-nage based techniques.

### **Conclusions**

From our perspective, the techniques used in aikido, have their close counterparts used in sabre, on foot and horse combat, the result of homogeneous mechanics regardless of geographic location; the effects on specific body elements have the same application.

The skills acquired during Aikido training and working on control of the balance center allow for more precise application of wrestling techniques.

Orientation of the vector of Aikido techniques - omote and ura is applicable in techniques performed on the ground; during techniques performed on horseback, the marui movement is applicable.

Knowledge of the mechanics of arm work when performing techniques based on ikkyo, nikkyo or shihonage contributes to better control of the opponent's arms especially during a clash on horseback, where movements causing body position shift are restrained. There is no comparative literature on the subject, further in-depth comparative studies of the subject are advisable.

## **Bibliography**

1. Omiya, S. (1988). *The Hidden Roots of Aikido, Aiki Jujutsu Daitoryu*. Diamond Books, Bydgoszcz
2. Maroteaux, R., J. (2023). *De la technique des hussards a celle des samourais*. Self & Dragon, no 18, pp 32-35. Bagnolet, France
3. Marynowski, L. (2021) *Tactics of foot fighting with a hussar sabre and a singlestick in the pattern of the old Polish martial art Signum Polonicum in terms of parries, dodges, descents and counterattacks in foot combat*. Rzeszów
4. Sawicki, Z. (2004). *Traktat szermierczy o sztuce walki szabla husarską. Podstawy*. Zawiercie
5. Sawicki, Z. (2005). *Palcaty. Podręcznik dla początkujących*. Zawiercie.
6. Sawicki, Z. (2019). *Palcaty Staropolska szermierka na kije (Studium historyczne z dziejów kultury fizycznej)*. Rzeszów, Poland.

# I-8

## Differentiation and Analysis of Four Theories on the Origin of Karate

yi Gao (Southwest University), guodong Zhang (Southwest University)

### [OBJECTIVE]

Due to limited historical records, the origin of Karate remains uncertain. Several theories have been proposed to explain its beginnings; however, some of these theories demonstrate misunderstandings of historical events. In this study, our aim is to explore the true origin of Karate through a thorough analysis and differentiation of four mainstream theories based on historical facts and the historical context surrounding interactions between China and the Ryukyu Islands.

### [METHODS]

This article primarily employs a literature review method to explore the origin of Karate. We have selected and included key records from the Ming and Qing dynasties, official historical texts from the Ryukyu Islands, and other relevant literature. Subsequently, we have made inferences and hypotheses regarding the origin of Karate based on these pieces of evidence.

### [RESULTS]

(1) The theory of weapon prohibition policy contains evident misconceptions. It is claimed that two weapon bans were implemented in the Ryukyu Islands, leading the Ryukyuan people to practice barehanded combat due to the absence of weaponry. This environment is believed to have given rise to Karate. However, the interpretation of historical records reveals that King Sho Shin did not outright prohibit the use of weapons but instead collected them for the defense of the nation. The Chronicles of the Joseon Dynasty documents the existence of a royal military force in Ryukyu, allowing Ryukyuan people to possess weapons. While Satsuma strictly controlled weapons within its territory, they permitted Ryukyuan gentry to be armed, and agricultural tools were not categorized as weapons. If commoners desired to train in martial arts using weaponry, they could substitute them with agricultural tools. Many of the tools utilized in ancient Ryukyuan martial arts today originated from the implements used in daily life during that time. The evolution theory of Ryukyuan "te" 「手」 (which means "hand") is rooted in the social background of Ryukyu. It is asserted that Karate evolved from the combination of indigenous Ryukyuan martial art "te" and Chinese martial arts. However, there is no evidence substantiating the existence of "te." Primitive combat skills were a necessity in early human confrontations and were not unique to a particular location. The formation of martial arts culture requires a sizable stable population, highly developed social productivity, and prolonged stability. Nevertheless, the sparsely populated Ryukyu, scattered across numerous small islands, saw its tribes engaged in a state of primitive conflict for an extended period. Under such social circumstances, it is implausible for Ryukyu to have possessed a martial art like "te."

(2) The theory of Chinese officers' input exaggerates Gong Xiangjun 「公相君」's dissemination of martial arts. It is purported that Karate was introduced to Ryukyu by Chinese officer "Gong Xiangjun" and his disciples. According to the "Dadao Jilu," Gong Xiangjun was referred to as a practitioner of "combination skills." Technically, Karate's overall style is mainly influenced by southern Chinese martial arts, while "combination skills" embody more of a northern Chinese martial arts style, which differs from Gong Xiangjun's Karate routines. From this perspective, Gong Xiangjun's teachings should have been integrated into the Tang Hand system, becoming the classical routines of Karate in the future. Additionally, Chinese martial arts emphasize "master-disciple transmission" and the practice of "fundamental skills before martial skills," which led Gong Xiangjun not to generously impart his martial arts to the Ryukyans. However, even if he was willing, Gong Xiangjun only stayed in Ryukyu for a few months, which was insufficient time to systematically teach the Ryukyans martial arts, resulting in the transmission of only a small fraction of techniques.

(3) The theory of the "Min 36 Clans" influx provides a logical framework concerning the prerequisites, main sources, and timing of the transmission of Chinese martial arts to Ryukyu. It is claimed that Karate was introduced to Ryukyu by immigrants from Fujian, China, known as the "Min 36 Clans." Firstly, during the period of their migration to Ryukyu, Chinese martial arts were experiencing significant development. The "Min 36 Clans" introduced systematic Chinese boxing to Ryukyu, aligning with historical timelines. Secondly, the martial customs prevalent in Fujian, coupled with the extensive involvement of Fujian civilians and military personnel in the resistance against Japan during the War of Anti-Japanese, facilitated widespread practice of Fujian martial arts. Furthermore, the integration of Fujian immigrants with the local Ryukyans was an inevitable trend after settling in Ryukyu. As Ryukyans were assimilated into immigrant villages, the composition of villages inhabited by Fujianese underwent changes, creating opportunities for the transmission of Chinese martial arts to the Ryukyans. Moreover, in the 19th century, a descendant of Fujianese, Kanagusuku Ue sho, performed martial arts at a Ryukyuan king's banquet, showcasing many traditional Fujianese martial techniques. Additionally, numerous descendants of Fujianese in Ryukyu became martial arts masters, further confirming the hypothesis that the "Min 36 Clans" possessed martial arts and transmitted them to Ryukyu.

## [CONCLUSIONS]

Considering relevant historical records, historical background, and cultural factors, among the four theories about the origin of Karate, the theory of the "Min 36 Clans" influx presents the most reasonable explanation. The theories of weapon prohibition, the evolution of Ryukyuan "te," and the input of Chinese officers may seem plausible, but they do not withstand scrutiny based on historical records, historical background, and cultural factors. The input theory of Chinese officer Gong Xiangjun introducing "combination skills" to Ryukyu and enriching the technical system of Tang Hand with elements of northern Chinese martial arts is one of the significant examples of extensive and ongoing martial arts exchanges between China and Ryukyu.

## Fact-Finding study of Kodokan Kohaku-shiai

Shusaku Kiryu(Kodokan Judo Institute)

**[OBJECTIVE]**

The Kodokan Kohaku-shiai is a historical and traditional judo match that has been held since the pioneering days of the Kodokan. Understanding the actual situation of the Kodokan Kohaku-shiai, one of the origins of the game, would be a valuable resource in considering the essence of the Judo match. Therefore, the purpose of this study was to clarify the actual conditions of the red and white matches, including their origins and characteristics.

**[METHODS]**

From the following documents in the Kodokan collection, we analyzed the descriptions of Kodokan Kohaku-shiai. Note that although the Kodokan Osaka International Judo Center held Kohaku-shiai after World War II, they were not included in the scope of this study.

- 『國士』『有効乃活動』『柔道』『大勢』(Kodokan's official magazines)
- 『柔道年鑑』(Kodokan official year book)
- 『嘉納塾同窓会雑誌』(Published by Kano Juku)

**[RESULTS]**

Analysis of the materials revealed the following

- From 1882 to 1889 and from 1904 to 1913, no records were found.
- According to Jigoro Kano's recollections, from the very beginning of the Kodokan's founding, matches were held to encourage training.
- Around 1884 or 1885, Tsukinami-shiai(monthly games) and Kohaku-shiai were made into events.
- Although it had several names, such as Kohaku-shobu, Kohaku-Dai-shobu, and Dai-Kohaku-shobu, the Kohaku-shiai became firmly established.
- Kohaku-shiai were held twice a year, once in the spring and once in the fall, with players divided into red and white groups and played on a winner-take-all basis.
- There is a Batsugun-shodan (instant promotion) system in Kohaku-shiai to allow contestants, who win a predetermined number of times by Ippon, to get a higher Dan grade on that day. Toshiro Daigo, Haruki Uemura, Yasuhiro Yamashita, and Yasuyuki Muneta were among the achievers.
- In the Taisho era, with the increase in the number of practitioners, it was sometimes done for two or more days.
- A new women's division was established in 1995.

**[CONCLUSIONS]**

At the Kodokan, Shiai were held to encourage ascetic training. Kohaku-shiai was institutionalized in response to the actual situation, including the increase in the number of trainees. Even after the death of Jigoro Kano, measures were taken to give trainees opportunities to compete, such as increasing the number of days the matches were held and establishing a women's division. The fact that the general public was able to watch the red-white matches suggests that judo played a major role in gaining social recognition.

# I-10

## The Influence of Taijiquan Training on the Physical Function of College Students

Liu Chang<sup>1</sup>, Mohamad Nizam MOHAMED SHAPIE<sup>1,2,3,4,5</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Sports Science and Recreation, Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>2</sup> Martial Arts & Combat Sports Research Network (AIRBORNE), Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>3</sup> Seni Gayung Fatani Malaysia Association (PSGFM) (Malaysia)

<sup>4</sup> Federation of National Silat Olahraga Malaysia (PESONA) (Malaysia)

<sup>5</sup> World Silat Federation (WSF), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

### **[OBJECTIVE]**

Taijiquan is a traditional martial art that is widely popular in China, promoted by the Ministry of Education of the People's Republic of China as a physical education curriculum in colleges and universities across the country. FMS (Functional Movement Screen, FMS) is a set of detection methods used to detect the overall stability of movement control, body balance, softness, and proprioception. The aim of this study is to provide information about the effect of Taijiquan training on FMS test scores that will provide strong evidence to determine that Taijiquan training can develop physical function in college students.

### **[METHODS]**

The experiment was carried out in a university in China, and all participants were informed of the experimental content and obtained the consent of all personnel before the experiment began. Three hundred and ninety eight (398) students who did not have a foundation in Taijiquan training and began the experiment for nearly a year. Due to the restrictions of the Chinese university system, all participants undergo regular training in various sports courses during the first semester, and participants who can reach the basic level of various sports courses are screened out in the second semester and undergo FMS tests. Finally, 60 participants with the closest scores to the average were randomly divided into experimental group and control group, and there was no significant difference in the scores of the seven FMS tests between the two groups ( $P=0.5367$ ;  $0.317$ ;  $0.321$ ;  $0.615$ ;  $0.608$ ;  $0.160$ ;  $0.556$ ) through the independent sample T test. The main part of the experiment was in the seventeen weeks of the second semester, and the experimental group joined the Taijiquan training course three times a week for 90 minutes each time, while the control group carried out normal physical education course training in each project without Taijiquan training intervention. Finally, independent sample T tests were used for the experimental group and control group. The test data before and after between the experimental group and the control group were compared, and the paired sample T test was used.

### **[RESULTS]**

The FMS test scores in the experimental group showed significant differences before and after the experiment in all items ( $P=0.0001$ ). In the FMS test data of the control group, only the score of rotational stable items was significantly different before and after the experiment ( $P=0.0001$ ). The FMS test results of the experimental group and the control group showed a significant difference ( $P<0.05$ ) after the experiment. In terms of the mean score of the seven



test items, the average total score of each test item in the experimental group increased significantly compared with the previous test, and the average value of the other items decreased in the control group except for the two items of trunk stable push-ups and rotation stability.

**[CONCLUSIONS]**

Taijiquan training can improve the FMS test score of the college student population, thereby improving the physical functional ability. The practice of traditional sports programs may lead to an improvement in sports skills, but it can cause impairment of physical function, while Taijiquan training can improve the decline in physical function caused by other programs.

# I-11

Abstract September 4-5, 2023 Osaka

## Title

A lance, a saber, a pistol - the offensive weapon of the Polish hussars and the art of using it in the years 1498-1786(93)

Jakub Pokojski, Signum Polonicum Katowice, Poland, IDOKAN Poland, IMACSSS

## Introduction

The article presents a cross-sectional review of offensive weapons used by the most famous Polish cavalry formation - hussars, along with the ways of using them, showing the extraordinary versatility of this formation.

## Methods

Analysis of the available literature, both from the era (16th to 18th century sources) and limited literature on a wide spectrum of topics (monographs, press articles, journals, internet) that dealt with the topic.

## Results and discussion

By analyzing the available literature and sources, presentation describes the various types of weapons used by the hussars as well as the ways of using these weapons, pointing to the offensively versatile character of the Polish hussar. The results show a historically consistent picture of an extremely diverse set of hussar offensive weapons, along with the ways of its use, adapted to practically every need of the old battlefield.

## Conclusions

The article aims to draw attention to the subject matter, which is important, among others, for a better understanding of the Polish hussar phenomenon and to encourage further research in this field.

# I-12

## **Discovering the tradition of Polish martial art**

Miłosz Markiewicz, milosz.markiewicz@gmail.com, mob.: +48 667 850 330, Signum Polonicum Wrocław

### **Abstract**

The film series 'With Respect To The Sabre', focusing on Polish art of sabre and singlestick, is a scholarly contribution to the study of Poland's cultural heritage. The series aims to document and broadly promote the Old Polish martial art, along with showing the importance of Polish weaponry heritage for cultural identity and patriotic ethos. Each film focuses on different aspects of the Polish martial art, in particular the fencing techniques. The episodes focus on thorough historical research and analysis of source material to recreate and understand the techniques, styles and strategies of combat used in Poland. Interviews with experts, renowned researchers, instructors and fencers, are an important part of the series, exploring especially practical aspects of this martial art. Exposure to a variety of perspectives and in-depth analysis help to bring audiences closer to the richness of armed traditions and mark their importance to our society. Through the documentation of training and the presentation of various techniques, the series provides a practical insight into learning and perfecting fencing skills in the context of Polish cultural heritage. Special attention is given to ethics and moral, spiritual values indispensable to the creation of a fencer, such as honour, courage and discipline, perseverance. Meticulously documented and critically analysed, the series is an important contribution to the study and rediscovery of the scattered and often overlooked, denied Polish cultural heritage. It serves to uncover and promote Poland's armed heritage and inspires subsequent generations to respect and cherish these values.

### **Key phrases**

Old Polish martial art, history, fencing, sabre, education.

### **Introduction**

A series of films on Polish values and the art of sabre and singlestick combat.

### **Goals**

1. To document the processes of reconstruction of the Old Polish martial art.
2. To promote the Polish martial art in the country.
3. Promotion of the Old Polish martial art outside the country.

### **Methodology**

Participatory observation in training sessions, self-development, analysis of source materials, research work, interviews, in-depth interviews.

### **Results**

Over 600 subscribers on the youtube channel.

3300 hours of viewing

More than 64 thousand views

12 videos shared.

### **Conclusions**

The series of films "With Respect To The Sabre" about the Old Polish art of fighting with a singlestick and sabre inspires respect for and cultivation of the native traditions of swordsmanship as an immanent component of Polish cultural heritage. By educating, promoting patriotism and inspiring the honing of fencing skills, these films have a significant impact on a variety of social groups - including young people. They allow for a deeper comprehension and immersion in Polish culture and history.

### **Bibliografia**

1. Ciosański, A. (2013). *Uzbrojenie Husarza*. retrieved from: [https://www.youtube.com/watch?v=aZoN\\_tb950o](https://www.youtube.com/watch?v=aZoN_tb950o)
2. Cynarski, W.,J. (2019). *Martial Arts & Combat Sports: Towards the General Theory of Fighting Arts*. Gdańsk: Wydawnictwo Naukowe Katedra.
3. Maroteaux, R., J. (2023). *De la technique des hussards a celle des samourais*. Self & Dragon, no 18, pp 32-35. Bagnolet, France
4. Marynowski, L. (2022). *Elements of Sarmatism in the historical Polish martial art Signum Polonicum* Rzeszów : IMACSSS
5. Sawicki, Z. (2019). *Palcaty Staropolska szermierka na kije (Studium historyczne z dziejów kultury fizycznej)*. Rzeszów

Dr. Edvard Šefer (Doctorate at Slovenian Academy of Sciences and Arts) ,  
founder of Monk Art, Martial art school of self-defense based on *Kata* forms.

#### [OBJECTIVE]

The aim of the research was to find out where and when San Chin Kata was created, who its author was, what the original performance looked like and what was its purpose and content.

#### [METHODS]

The author decided to do research as proposed by Descartes and to observe from different points of view to collect all Rashomon's truths. The author studied several implementations of *San Chin Kata*. For the research, the author used a qualitative method. He opted for probabilistic sampling in the population practicing karate and *San Chin Kata*. He started collecting data by learning several version of *San Chin Kata*, continued with the method of participant observation, and collected data by attending global seminars held by world-renowned masters. Author used content analysis focused on written and visual objects. Author checked his findings with Chinese and Japanese philosophy and cultural history, kinesiology principles, acupuncture points, Newton's laws, vector analysis and other laws of physics and mathematics,

#### [RESULTS]

Nowadays there are many variations of *San Chin Kata* based on different understandings and exaggerations with added or lost moves but when observed with experienced eye it is quite possible to extract the skeleton common to all variants. Logical conclusion out of it is that most probably all executions are “right” and in same time “wrong”. *San Chin Kata* have base in natural circular moves where the Sun and the Moon Hand is foundations. Understanding begins with awareness that *San Chin Kata* teach only three self-defense techniques, and no attacking techniques. There is no fist punch or foot kick in *San Chin Kata*, because *Kata* instruct attacked person how to use *Kyushu* pressure point techniques, kinesiology principles, lever and vector principles to take control over the attacker. Necessary answers for above conclusions Author found in Qi Jiguang, *Jixiao Xinshu* (1.561AD) poster No. 6 (Mount the dragon backwards), Nicolaes Petter, *Worstel Konst* (1.674AD) drawing No.7 and No.8 and *Bubishi* (round 1.850) posters No. 41(Sun and the moon), No.14 (One-sided triangular horse-ride step) and Article 27: Zheng's Twenty-Four Iron Hand. Author at the end of the research, based on the results and extracts of his research created a version of *San Chin Kata*, which he considers to be the closest to the original.

#### [CONCLUSIONS]

The value and understanding of *San Chin Kata* was lost before Karate spread from Okinawa in the beginning of the twentieth century therefore we will most probably never know who is creator and when *San Chin Kata* occur and how original form looked like but with great probability and based on the laws of exact sciences, we can claim that *San Chin Kata* contain only three defense forms which we can find in *Jixiao Xinshu*, *Bubishi* and many other *Kata* and that in *San Chin Kata* there is no attack with fist or foot.

## Research on the International Communication Strategies for Wushu Culture from the Perspective of Globalization

Song Yazhou<sup>1,6</sup>Mohamad Nizam MOHAMED SHAPIE<sup>1,2,4</sup>Nasru Syazwan Nawai<sup>1,5,7</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Sports Science and Recreation, Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>2</sup> Martial Arts & Combat Sports Research Network (AIRBORNE), Universiti Teknologi MARA (UITM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>3</sup> International Martial Arts Scientific Center for Youth Development and Engagement under the auspices of UNESCO (UNESCO IM) (Republic of Korea)

<sup>4</sup> International Martial Arts and Combat Sports Society (IMA) CSSS(Poland)

<sup>5</sup> Seni Gayung Fatani Malaysia Association (PSGFM) (Malaysia)

<sup>6</sup> Hebei Finance University (China)

<sup>7</sup> Federation of National Silat Sports Malaysia (PESONA) (Malaysia))

### [OBJECTIVE]

As a representative of traditional Chinese culture, Chinese Wushu, with its distinctive cultural characteristics and significant emphasis on personal development and inner cultivation, has gained popularity among international audiences. However, the current internationalization level of Chinese Wushu culture remains relatively low, and its international recognition and influence have not yet reached a high level. Therefore, the purpose of this paper is to explore strategies for the international communication of Wushu culture with a view to promoting the global transmission of Chinese Wushu, enhancing its international recognition and influence, and adding new impetus to China's cultural soft power in global competition.

### [METHODS]

This paper used literature research method, expert interview method, logical analysis method. It employed the qualitative method on current available literature in Wushu, books, published journal articles that related to the establishments of Wushu. At the same time, through interviews with well-known Wushu experts in the country, this paper comprehensively and systematically analyzes the opportunities and challenges of the international dissemination of Wushu culture, the international communication process of Wushu culture and the existing problems in the international communication of Wushu culture, and further puts forward the suggestions.

### [RESULTS]

Through research, it has been found that there are the following issues in the international dissemination of martial arts culture: difficulties of accurate translation of extensive and profound Wushu terminology; communication content emphasizing skills over culture and lack of deep cultural identity; abundance of Wushu schools and lack of unified standard system; lack of Wushu comprehensive talents and inadequate attention from sports institutions.

## **[CONCLUSIONS]**

This article proposes the following paths and strategies for the international communication of Wushu culture: eliminate language barriers in Wushu and boost Wushu translation efforts; strengthen cultural awareness of Wushu and enhance profound connotation of Wushu; hold high the banner of Wushu innovation and strive to meet audience needs; pay attention to comprehensive Wushu talents and establish a scientific training system; increase government support and set up Wushu communication institutions, so as to better realize the international communication of Wushu.

Wenyao Chen<sup>1</sup>, Mohamad Nizam MOHAMED SHAPIE<sup>1,2,3,4,5</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Sports Science and Recreation, Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>2</sup> Martial Arts & Combat Sports Research Network (AIRBORNE), Universiti Teknologi MARA (UiTM), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

<sup>3</sup> Seni Gayung Fatani Malaysia Association (PSGFM) (Malaysia)

<sup>4</sup> Federation of National Silat Olahraga Malaysia (PESONA) (Malaysia)

<sup>5</sup> World Silat Federation (WSF), Shah Alam, Selangor (Malaysia)

### [OBJECTIVE]

Wenzhou Nanquan has deep heritage and local characteristics. Because learning martial arts was very popular in the Song, Ming and Qing Dynasties, and the mass base was good, Wenzhou has now become a very famous hometown of martial arts. China has also listed Wenzhou Nanquan as one of the 128 excellent styles of martial arts. It is the mother of Wenzhou martial arts and originated from the fighting technique used by people in coastal areas to defend against invaders at sea. Its characteristic is to use three steps up and three steps down to carry out extremely practical fights on the narrow hull. Later, it evolved into sports activities in your own yard and on the ground.

### [METHODS]

This paper used document analysis, expert interviews, and review. It employed the qualitative method on current available literature in Wenzhou Nanquan, books, various official documents, published journal articles that related to the establishments of Wenzhou Nanquan.

### [RESULTS]

**Heyday:** 1. There is a strong atmosphere for folk learning martial arts. After consulting local historical documents, all men practice martial arts, and there are boxing gyms in every village. In history, Wenzhou has produced 439 Wu Jinshi (finalists of the highest-level examination of the central government), 30 martial arts Dingjia (top three in national competitions), and 19 Wu Zhuangyuan (first in national competitions).

2. People's living conditions are harsh. Wenzhou is a coastal city in China, surrounded by mountains on three sides and facing the sea on one side, with few plains and many water systems in the urban layout, such as the Oujiang River, Nanxi River, Feiyun River, Aojiang River, etc., making the living environment harsh. People here struggle with nature while defending against invaders. In Nanquan, the sayings of Wenzhou boat boxing and Wenzhou stick of south have been formed.

**Decline period:** 1. Changes in the social environment. After the reform and opening up, Wenzhou's social economy developed rapidly, and the focus of development was on the economy. As well as the prevalence of foreign emerging sports such as taekwondo and so on.

2. Government departments lack long-term planning. Insufficient support and protection. At present, social funding is the mainstay, and a small amount of government funding is limited, which has affected the development of Wenzhou Nanquan.

**Revival period:** 1. The government supports the establishment of Wenzhou Nanquan Platform to create its own brands. Organize online and offline interactions, advocate the



combination of sports and leisure, build a sports and leisure platform, and continue to strengthen the promotion of entering campuses, towns, communities, enterprises, institutions, and military camps, which fully drives the atmosphere of national fitness activities. At the same time, dig deep into the value and culture of Wenzhou Nanquan, strengthen protection and inheritance, and form a brand of Wenzhou-style martial arts culture.

2. Expand the beneficiary of Wenzhou Nanquan with the education department. Based on the number of young people, local courses are widely carried out in schools to promote cultural identity, and the initial results have been recognized by society, forming a virtuous circle, so as to form a comprehensive and clear understanding of Wenzhou Nanquan.

### **[CONCLUSIONS]**

In the transition period of social development, the role of cultural productivity has not yet fully manifested, and the development situation of Wenzhou Nanquan is still not optimistic, facing the dwindling development path and scale. First, Wenzhou Nanquan needs the support of the government is essential. Secondly, we need to actively seek the development direction of Wenzhou Nanquan to realize both social value and economic value. Finally, Wenzhou Nanquan should adapt to the development method under the new situation, change with time and demand, develop, and innovate, and then achieve continuous and effective inheritance and development.

# I-16

## The Tasks and Outcomes in Karate Classes: A Survey of Junior High School Students

Kaori Inoshita, Tatehiro Toyoshima, Tomitaro Hashimoto (Reitaku University) ,  
Kiso Okazaki (Japanese Karatedo Federation)

**OBJECTIVE** : The number of junior high schools offering karate classes in P.E. has increased dramatically over the past 10 years. Little research has been done, however, to investigate the specific tasks of these classes and assess their outcomes. The purposes of this study, therefore, were to carry out practical research into the forms and teaching tasks of Japanese traditional martial arts (karate) classes, to gauge the results of the instruction offered in them, and to explore solutions to issues in areas that were identified as in need of improvement.

**METHODS** : A survey of karate classes (by an outside instructor) was conducted at four junior high schools in Chiba and Ibaraki Prefectures and Tokyo Metropolitan Junior High School. 1200 responses were obtained from students (first, second and third graders, including special needs students) after the first or second periods of karate classes conducted using ICT.

At all the junior high schools, the karate classes were co-teaching sessions involving boys and girls. The content of the instruction included manners, preparatory exercises (stretching and strength training) using karate movements, basic karate skills, basic kata and kumite, and the task of making a hole through a piece of newspaper with a thrust.

**RESULTS and CONCLUSIONS** : More than 90% of the students “agreed or mostly agreed” in relation to questions on “Ease of understanding the manner and basic movements” and “I was able to do it safely and without injury”. 70% of the students felt that their learning was effective in the areas of "interest in karate," "courtesy and decorum," "respect for others," and "problem-solving ability and ingenuity." In terms of learning content, more than 50% said they had been able to learn not only the basic movements of "TSUKI and UKE" but also "offensive and defensive techniques with movement" and "movements assuming attack and defense against an opponent," indicating the possibility that learning effects can be achieved even in one or two classes. 70% of the students indicated that they did not wish these classes to be coeducational.

As for ICT, karate classes utilizing ICT were conducted at the four junior high schools, providing many opportunities for "thinking, judging, and expressing" through group work. As a result, students' interest increased and their understanding of techniques and movements was enhanced. This investigation clearly showed that karate physical education classes have the advantages of "simplicity of implementation" and "safety"; the incidence of injury is in fact extremely low. It also revealed the need in future to provide learning that leads to outcomes such as better "problem-solving," "improvement in attitudes toward daily life such as politeness and civility," and "improvement in thinking, judgment, expression, and physical fitness".

This study is based on the results of a project commissioned by the Japan Sports Agency to enhance the quality of martial arts instruction and conducted by Reitaku University in 2020 and 2021,

# I-17

## A study of Kendo *Shinpan* Method with one-arm II -Focusing on the Diversity of Budo and Lifelong-kendo-

Yoshiko ODA (Hosei University), Kosuke NAGAKI (Hosei University),  
Yasuhsa MITOMA (Otsu Seiryō high school), Tamotsu HOSHIKAWA (Honorary member)

### **[Purpose]**

In focusing on the diversity of Budo and lifelong-kendo, On the one hand, 'an awareness of the wish to certainly carry on such as tradition and essence which are expressed in terms. The main point of the symposiums is positively identified as 'the ability to accept diversity in Budo'. But how about KENDO?

We presented a paper entitled "A Study of Kendo *Shinpan* Method with One Arm - Focusing on the Flag Display Guidelines" at the 52nd Conference in 2019. At first, the issue of *Shinpan* with a 'one-armed' disability being unable to carry out the 'Use of *Shinpan-ki*' as presented in '*the Regulations for Kendo Shiai and Shinpan*' was considered. In short, it was about the 'display guidelines' associated with the difficulty of displaying two flags with one arm. However, in the discussion, the subjects are not practiced in the category of 'kendo for the disabled', which requires assistance and assistance, despite of the fact that they have one-armed. Exactly the subjects are lifelong practitioners of kendo, with or without disabilities, and who became instructors expressed their confusion and challenges when they stood on the position of kendo *Shinpan*. It was suggested that resolving this challenge could lead to inclusive and practicable lifelong kendo and its potential to promote diversity.

Regarding *Shinpan*, Nakabayashi states that "*Shiai* are two sides of the same coin with *Shinpan*", when considering *Shiai* in Budo, he states that it is "a form of *Shinpan* in which a person in the position of master examines and judges the performance of a person in the position of a disciple". The important issue concerning the essence of Budo is the question of the criteria for judging a valid skill, i.e. whether it is an ippon or not. "It can be said that the skills and self-cultivating ways of training in Budo are determined by what criteria and from what viewpoints. It even defines the essence of Budo itself", he asserts. (Nakabayashi, 1987) On this point, this is an experience that we have all felt over the adaptations and discussions to the 'Provisional *Shiai* and *Shinpan* Rules in place until the COVID-19 pandemic is brought under control'.

Therefore, the purpose of this study is to consider the 'Kendo *Shinpan* method with one-arm' that includes the traditions and essence of kendo and contributes to the passing on KENDO as a living physical skill, while taking into the diversity of kendo and lifelong-kendo.

### **[METHODS]**

To examine the "display method of holding two *Shinpan-ki*, flags (red and white) under the armpits", a method devised and practiced by one-armed kendo practitioner T (30 years of kendo experience, 6th dan renshi).

### **[RESULTS]**

To be presented at the conference on the day.

### **[Reference]**

Shinji Nakabayashi (1987) 'Budo no susume', Publication Society for the Posthumous Works of Prof. Shinji Nakabayashi

# ご存知ですか！

## 全日本剣道連盟が推奨するルールを礎に、 安全用具を推進。

賠償責任保険対象商品

### ■SSPシール

1年間に100万本の竹刀に貼付



SSP Q1

000001

全日本武道具協同組合  
\*竹刀規格はQRコードから 全日本剣道連盟公認規格に基づいています

Shinai (竹刀) Safety (安全) Promotion (推進)



### ■安全顎

突きから喉を守る

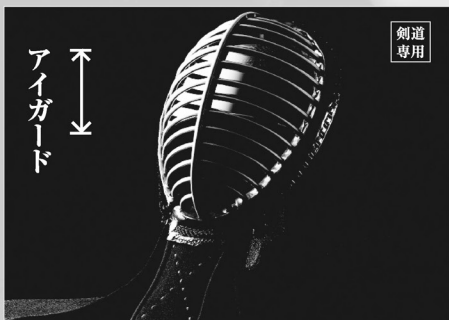


特許第5438204号

- 頸動脈突入防止
- 外見の変化なし
- どの防具にも適応

### ■アイガード

竹刀などの破片から目をガード！



アイガード

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大用をご用意。  
適正サイズの物をお選びください。

「安全対策の一つとして、初心者への剣道防具面には、必ず備わっていることを推進しています。」

### ■フェイスシールド

相手からの飛沫飛散の防止に！



フェイスシールド(一体型)

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大用をご用意。  
適正サイズの物をお選びください。

「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」に対応してフェイスシールド(一体型)を製作し、シールドの着用を推進しています。



## 全日本武道具協同組合

zenbukyo.jp/



しかり、  
道はあそび

### 株式会社 建武堂

営業時間 AM10:00~PM7:00  
(日曜・祭日はPM6:00まで) 毎週月曜定休

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-15-1 菱山ビル2F  
TEL 03-3971-4840 (代) FAX 03-3971-4461  
URL: <http://www.kenbu-do.co.jp/>  
e-mail: [information@kenbu-do.co.jp](mailto:information@kenbu-do.co.jp)



剣士を第一に考えた  
国産無垢材100%の剣道場床



当社が施工する剣道場の床は、材料支給から  
施工・技術指導まで一貫してご提供いたします。

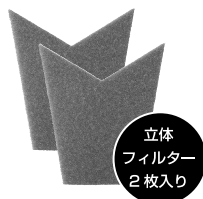
当社は環境保全のためにも国産無垢材を100%使用した弾性床構造の剣道場床  
を推奨させていただいております。体育館などのウレタン塗装とは違って温かみ  
があり、適度にクッションの効いた安全性の高い剣道場の床をご提案いたします。

<https://kendoujou.com> English Site <https://architecture-dojo.com> Mail Address [info@kendoujou.com](mailto:info@kendoujou.com)

# 新設計で息スムーズ理想のマスク！

- 呼吸しやすい立体設計
- パワーマスクメッシュ構造により、蒸れにくく抜群の通気性を誇ります。  
(フィルター装着時: 不織布マスクの10.8倍の通気性 / 計測値)
- 吸汗性・速乾性・防活性 洗濯耐久性に非常に優れた素材です。
- 鼻出しを容易にする加工縫製構造の快適設計です。

不織布マスクの10.8倍の通気性  
(フィルター装着時の計測値)  
【試験方法 JIS 1096A 法通気性テストによる】



立体  
フィルター  
2枚入り

株式会社 **松興堂**

渋谷ショールーム

東京都渋谷区道玄坂2-17-3

TEL.03-3463-0471

<http://www.shokodo.com/>

安心の  
日本製

# 極

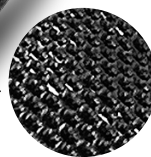
剣道面マスク Kiwami

# 剣道専用



「感染拡大予防ガイドラインのマスク」応需

- 洗って使える速乾性。
- メッシュ構造で高い通気性。
- 呼吸に特化した口元立体形状。
- 激しい稽古でも！



価格：2,200円（税込） カラー：(黒) / サイズ：フリーサイズ

## 武道具の総合メーカー

# 株式会社 ヒロヤ

〒672-8048 姫路市飾磨区三宅2丁目26番地

TEL 079-234-2220

FAX 079-234-3300

# 創業百余年

伝統と技術を守りながら  
新たななる挑戦を続ける  
信頼のブランド



剣道具 一分五厘手刺

アノ目刺

60本立 極上黒呂色塗胴付

## 森 武道具 株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 6-12

営業時間：9時-19時（土曜 17時）

電話：03-3661-0469

定休日：日曜日・祝祭日

お気軽にお問い合わせください。ショッピングサイトはコチラ→



(五十音順)



# 人にまっすぐ。

未来を創る子どもたちと、  
最も向き合うことができる  
「教育」を学ぶ。

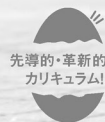


国立大学法人

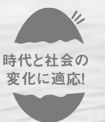
## 大阪教育大学



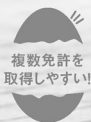
2024年4月  
教員養成課程  
改組



先導的・革新的な  
カリキュラム!



時代と社会の  
変化に適応!



複数免許を  
取得しやすい!

入試関係  
問合せ先

大阪教育大学 入試課  
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1  
TEL 072-978-3324



## 日本武道学会賛助会員

- ・ 全日本武道具協同組合  
(以下、五十音順)
- ・ 株式会社 建武堂
- ・ 株式会社 五感
- ・ 株式会社 松興堂
- ・ 株式会社 ヒロヤ
- ・ 森武道具株式会社

令和5年8月22日 印刷  
令和5年8月26日 発行

## 発行所 日本武道学会

発行者 大保木輝雄  
〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園2-3  
公益財団法人日本武道館 中道場棟内  
TEL・FAX 03-6269-9260  
E-mail : budogaku@xj8.so-net.ne.jp  
振替東京 102326  
印刷所 株式会社ソウブン・ドットコム  
東京都荒川区西尾久7-12-16  
電話 : 03-3893-0111



国立大学法人  
大阪教育大学

日本武道学会第56回大会事務局

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学柏原キャンパス

E-mail : yori@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

大会委員長 太田順康

大会副委員長 石川美久

第56回大会本部事務局 : budoshomu@gmail.com